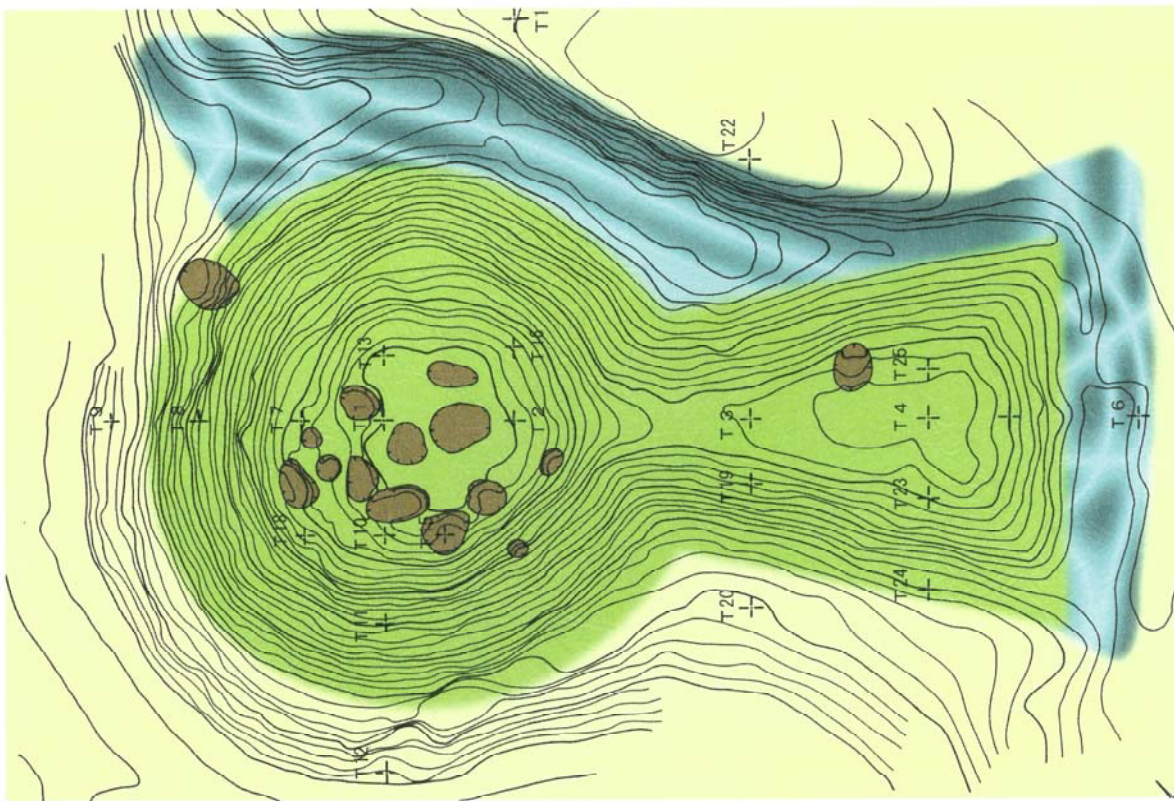


遺跡詳細分布調査報告書 第16集

別冊 成島古墳群 1号墳



成島古墳群1号墳測量図

2003

米沢市教育委員会

遺跡詳細分布調査報告書
第16集

別冊
成島古墳群 1号墳

2003

米沢市教育委員会

序 文

本報告書は、米沢市教育委員会が平成12年度と、14年度に文化庁の補助を受けて実施した「遺跡詳細分布調査」のうち、重要な成果が得られた成島古墳群1号墳についてまとめたものです。

成島古墳群1号墳は、平成元年に発見され、平成3年に測量調査が行われました。その結果、全長58.7mの前方後円墳であることが確認されました。

古墳からは、墓壙跡と副葬品として鹿角装鉄剣、鉄鏃、鉈、管玉等が出土しました。墓壙には、割竹形木棺を埋置したと推測され、粘土槨をもたない木棺直葬の形態と聞いております。年代は、県内でも古い4世紀後半～4世紀終末期に位置づけられます。

米沢盆地には、米沢市の戸塚山古墳群139号墳並びに南陽市の稲荷森古墳等の大型古墳が点在する地域であります。これらの大型の前方後円墳は、大和政権の影響を受けながら、地域一帯を統括していた主長墓と考えられていますが、古墳の出現する時期や詳しい背景に関しては課題となっていました。そのことから、平成11年には木和田古墳の調査を実施し、県内最古の古墳であることが判明しました。

今回の成島古墳群1号墳の調査は、米沢盆地の、古墳文化を探る上で極めて重要な位置を占める資料であります。さらに、新たな古墳群も発見され、その中には前方後円墳も確認していることから、より詳しい調査を進めながら地域の遺跡の解明、保存、活用に尽力していく所存です。

最後になりましたが、この調査にあたりご指導、ご協力を賜りました文化庁、山形県教育庁社会教育課文化財保護室をはじめ、地権者各位、地元の皆様に対し、心から感謝を申し上げます。

平成15年3月

米沢市教育委員会

教育長 佐藤 政一

例 言

1 本報告書は、文化庁の補助を受けて実施した、遺跡詳細分布調査の成島古墳群を分割して報告する「遺跡詳細分布調査報告書第16集別冊」であり、米沢市埋蔵文化財報告書第82集である。報告書である。

2 調査は米沢市教育委員会が実施した。

3 調査期間 平成12年9月11日～同年11月24日、平成14年12月2日～同年12月24日

4 調査体制は下記の通りである。

平成12年度

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 鈴木たみ子（文化課長）

調査担当 手塚 孝（文化課文化財係主任）

調査主任 菊地政信（文化課文化財係主任）

事務局長 小林伸一（文化課長補佐兼文化財係長）

事務局 渡邊紘子（文化課文化財係主査）

調査指導 文化庁 山形県教育庁文化財課

調査協力 鈴木 仁・色摩はるえ・金谷恵一・荒井政二郎・粟野修一

水野 哲・柴田円右衛門・林高庵

調査参加者 遠藤富男・加藤美貴子・小島 鍛・近野慶子・今野周蔵

高橋正子・高橋俊助・長澤朋人・清水弘文

平成14年度

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 村野隆男（文化課長）

調査担当 手塚 孝（文化課文化財担当主任）

調査主任 菊地政信（文化課文化財担当主任）

調査補助員 長澤朋人

事務局長 情野憲治（文化課補佐兼文化財主査）

事務局 深瀬順子（文化課文化財担当主査）

調査指導 文化庁 山形県教育庁社会教育課文化財保護室

調査協力 鈴木 仁・金田八良・粟野修一・金谷恵一

寒河江矢重・色摩はるえ・柴田円右衛門・林高庵

調査参加者 遠藤富男・近野慶子・佐藤謙治

5 管玉のX線撮影は東北芸術工科大学の松井敏也氏によるものである。

6 挿図の縮尺は各地にスケールで示した。遺物はEZ-管玉、DZ-鉄製品、AZ-土器である。

7 出土遺物は、米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山269-3）に一括保管している。

8 本書の作成は、第1～3章を菊地政信、第4章を手塚 孝が行い、挿図に関しては小林順子が補佐した。全体については、手塚が総括し、編集は菊地が担当した。

本文目次

序 文

例 言

第1章 成島古墳群の地理的環境及び歴史的背景	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的背景	5
第2章 遺跡の現状と調査経過	7
第1節 遺跡の現状	7
第2節 調査方法	8
第3節 調査の経過	9
第3章 調査結果	12
第1節 分布調査	13
第2節 成島古墳群1号墳の調査	25
①墳丘	25
②周溝	30
③主体部	41
④出土遺物	42
第4章 成島古墳群の考察	47
第1節 成島古墳群の成立	47
①成島1号墳の形態	47
②京塚4号墳の形態	49
③主体部	50
④副葬品	51
第2節 成島古墳群の性格	51
①置賜地域の前中期古墳の分布と特徴	51
②古墳の年代	56
③成島古墳の意義	56
参考文献	57
報告書抄録	67

挿図目次

第1図 古墳群位置図	2
第2図 古墳群分布図(1)成島古墳群、京塚古墳群	3
第3図 古墳群分布図(2)西方古墳群、延長寺古墳、下小管古墳	4
第4図 成島古墳群1号墳測量図	14

第5図	成島古墳群2号墳測量図(1).....	15
第6図	成島古墳群3・4号墳測量図(2).....	16
第7図	成島古墳群5・6号墳測量図(3).....	18
第8図	京塚古墳群1・6号墳測量図(1).....	20
第9図	京塚古墳群2・3号墳測量図(2).....	21
第10図	京塚古墳群4号墳測量図(3).....	22
第11図	京塚古墳群7・8号墳測量図(4).....	23
第12図	成島古墳群1号墳調査区位置図.....	26
第13図	成島古墳群1号墳Aトレンチ土層断面図・平面図(1).....	27
第14図	成島古墳群1号墳Bトレンチ土層断面図・平面図(2).....	28
第15図	成島古墳群1号墳C、Dトレンチ土層断面図・平面図(3).....	29
第16図	成島古墳群1号墳墳頂後円部現況、遺物出土点図.....	31
第17図	成島古墳群1号墳墳丘土層断面図(1).....	33
第18図	成島古墳群1号墳墳丘土層断面図(2).....	34
第19図	成島古墳群1号墳墳丘土層断面層(3).....	36
第20図	成島古墳群1号墳墳丘土層断面図(4).....	37
第21図	成島古墳群1号墳墳丘土層断面図(Eトレンチ).....	38
第22図	成島古墳群1号墳主体部平面図.....	43
第23図	成島古墳群1号墳主体部位置図.....	44
第24図	成島古墳群1号墳出土置物実測図(1)鹿角装鉄剣.....	45
第25図	成島古墳群1号墳出土置物実測図(2)鉄鏃、鉞、管玉.....	46
第26図	成島1号墳の古墳企画概念図.....	48
第27図	京塚4号墳の古墳企画概念図.....	49
第28図	置賜地域の前・中期古墳の分布図.....	52

付表目次

第1表	土色観察表(主体部東西箇所).....	32
第2表	土色観察表(主体部西側南北箇所).....	35
第3表	土色観察表(主体部Eトレンチ).....	39
第4表	成島1号墳後円部計測表.....	47
第5表	成島1号墳後方部計測表.....	48
第6表	主要前方後円墳計測表.....	50
第7表	米沢盆地の古墳編年表.....	53
第8表	山形県の前円後円(方)墳一覧表.....	55
第9表	東北、関東地方木棺検出古墳一覧表.....	59

図版目次

巻頭図版1 成島古墳群1号分全景（前方部から）

巻頭図版2 国道287号から成島古墳群1号墳を望む（南東から）

図版1 成島古墳群遠景（東方から望む）・成島古墳群位置図

図版2 成島古墳群1号墳の重機削平箇所（東方から望む）・成島古墳群2号墳（南方から望む）

図版3 墳丘南北断面（前方部から望む）・墳丘後円部東端部断面（西方から望む）

図版4 墳丘東西断面（北方から望む）・主体部プラン確認状況（東方から望む）

図版5 F地点断面全景（西方から望む）・主体部西方箇所に確認した木棺の痕跡（西北から望む）

図版6 Eトレンチ上層部断面（西方から望む）・Eトレンチ主体部断面（西北から望む）

図版7 Eトレンチ上層部断面全景（西方から望む）・Eトレンチ主体部近景（西方から望む）

図版8 鉄鏃出土状況（北方から望む）・墳丘表土の管玉出土状況（東方から望む）

図版9 管玉出土状況（東方から望む）・管玉出土状況（北方から望む）

図版10 鹿角装鉄剣、鉈、管玉出土状況（北方から望む）・鹿角装鉄剣、鉈出土状況（北方から望む）

図版11 主体部断面全景（東方から望む）・主体部完掘状況（東方から望む）

図版12 Eトレンチ断面（西方から望む）2002年度南方にトレンチ延長・Eトレンチ延長全景（北方から望む）

図版13 Cトレンチ全景（南方から望む）・Aトレンチ全景（東方から望む）

図版14 Dトレンチ全景（西方から望む）・鉈、鉄鏃

図版15 鹿角装鉄剣・管玉

図版16 靱・墳頂出土の土師器片

図版17 鉄鏃、鉈、管玉、鹿角装鉄剣レントゲン写真

図版18 後円部墳丘埋め戻し風景・現地説明会風景（2000年11月14日）

図版19 成島古墳群3・4号墳近景

図版20 成島古墳群5・6号墳近景

図版21 京塚古墳群4号墳近景

巻頭図版 1



▲成島古墳群 1号墳全景（前方部から）



▲国道 287 号から成島古墳群 1 号墳を望む（南東から）

第1章 成島古墳群の地理的環境および歴史的背景

第1節 地理的環境

成島古墳群は、山形県の南部いわゆる「置賜地方」の中央から南寄りの地域に位置しており、現在の行政区画では山形県米沢市広幡町成島字六月在家山2341番地に所在し、JR米坂線成島駅の南西約1.8kmにある。また、直下には国道287号がほぼ南北に走り、朝夕は川西町や長井市方面からの通勤車で混雑する主要道路となっている。(第1図参照)

この古墳群の眼下に広がる水田地帯を超えた東方約5kmの地点には独立丘陵の戸塚山が視界を遮っている。この戸塚山には195基の古墳群がこれまでに確認されており、全長54mの前方後円墳が三角点のある山頂に構築されている。

南西部には落合と呼ばれる沢合の地区があり、沢の上流を源とする誕生川が蛇行しながら北流している。遙か北東方向には置賜地方で最も標高の低い白竜湖がある南陽市が見通され天気の良い日には上山市から山形市にまたがる蔵王山一帯を望むことができる。

古墳群が所在する広幡町成島地区は明瞭な扇状地であるが、礫はあまり多くない土壌でこの上に黒ボクと呼ばれる酸性に富む黒土が覆っている。また、古墳群がある丘陵は王庭丘陵と呼ばれ風化した赤褐色の粘質を主体とした土層であり、農業用地としては適さないらしく、開発されずに来た事が、古墳の保存に良好に影響したと考えられる。

このような地形の中で、米沢盆地は南方の吾妻山系を源とする羽黒川、最上川、鬼面川の諸河川は盆地中央で合流し、最上川となって西流する。また東方の奥羽山脈から発した梓川、砂川なども最上川へ合流する。

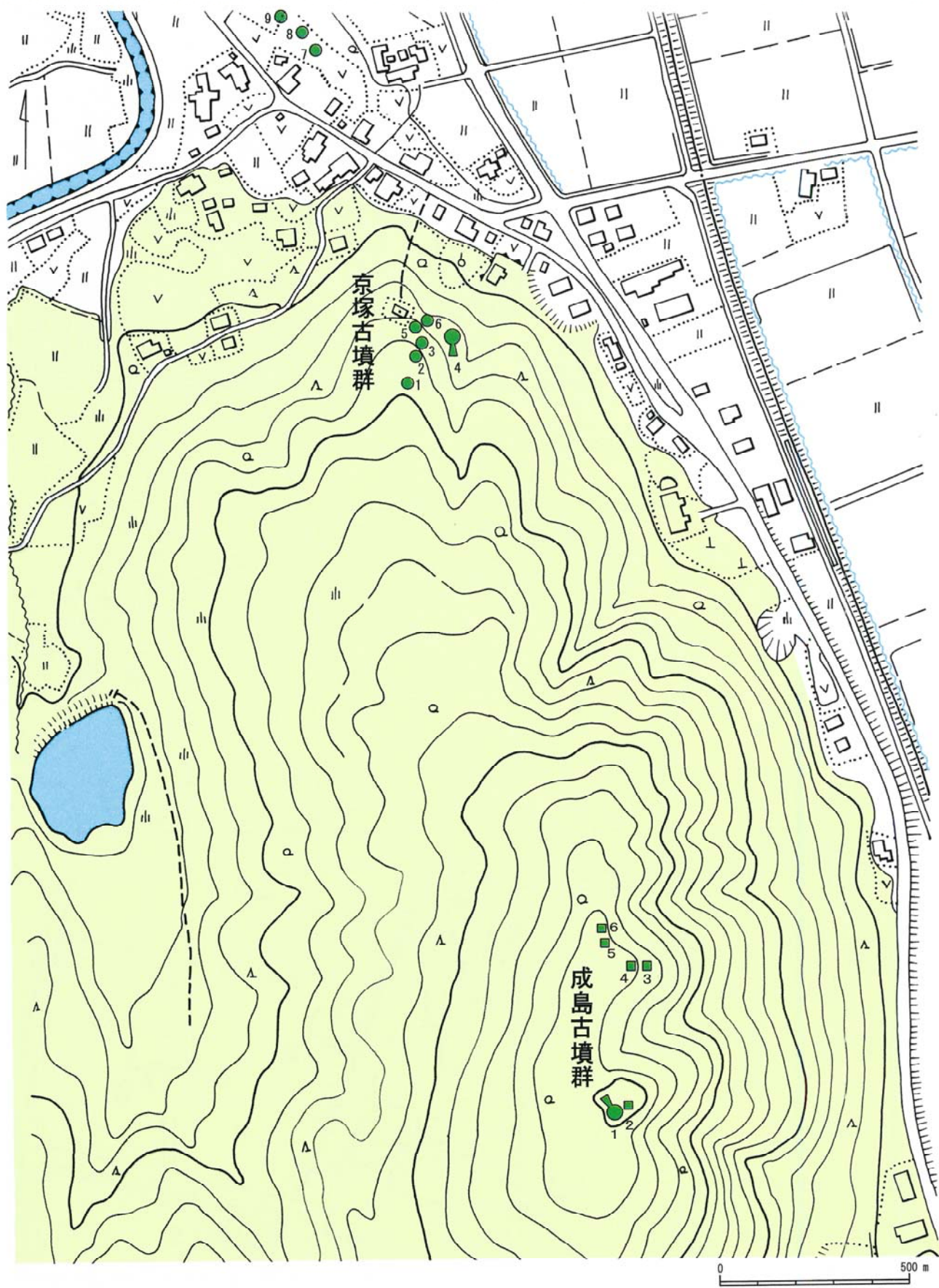
これらの河川は米沢盆地における人類の営みに多大な影響を及ぼして来た事は遺跡の分布からも明らかである。流域が比較的早い段階で扇状地を形成した東方の梓川や砂川流域には縄文早期の遺跡が発見されている。

広幡地区も広義では鬼面川流域にあたる。この河川名が示すように暴れ川として知られ、また直下を流れる誕生川も日頃は緩やかな流れであるが、洪水になると逆流し、流域に大きな水害を与えた昭和42年(1967)の羽越水害は記憶に新しいところである。この水害後、合流する流域を中心に堤防が築かれた。

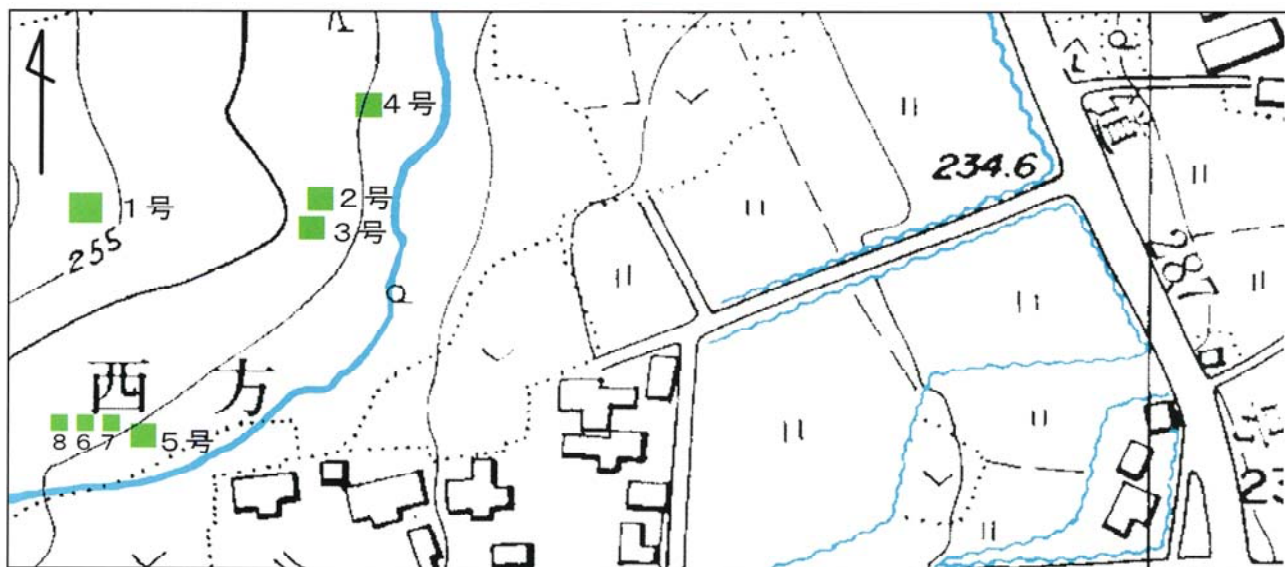
現在、古墳群がある一帯は雑木林になっているが、江戸時代中頃までは寺領であり、山頂直下の北東部一帯には建物があったと言われている。その伝説を裏付けるように今も平坦地が数カ所認められる。中腹には南北に延びる幅約1.5mの平坦地が延々と続いている。これも伝説であるが上流から水を引き込む為に造成されたと言われている。地元では通称「バカ堀」と呼ばれている。山頂に続く山道は今までも人々が往来する。これはこの山が松茸の産地であり、古墳の墳丘でも、松茸が採集できた。また3号墳には石の祠が祭られており、信仰の場として、地元の人にも守られ、通称「御獄堂山」と呼ばれている。



第1図 古墳群位置図



第2図 古墳群分布図(1)



西方古墳群分布図



延長寺古墳分布図



下小菅古墳分布図

第3図 古墳群分布図(2)

第2節 歴史的背景

山形県内で前方後円墳の存在が判明したのは昭和50年（1975）の戸塚山古墳群139号墳が当初である。昭和32年以来この古墳群に注目していた現在山形考古学会々長の加藤 稔氏は昭和50年に佐藤庄一氏や手塚 孝氏と共に戸塚山山頂を踏査し139号墳を前方後円墳と認識するに至った。

これ以前にも南陽市の稲荷森古墳が注目されていた。この古墳に始めて着目したのが地元の研究者である新山三郎氏であり、昭和の初期頃であった。その後、西村真治氏がこの古墳に触れているが詳しく言及されなかった。

昭和36年になって旧赤湯町の要請を受けた柏倉亮吉氏らが調査を行った。この調査の成果から前方後円墳である可能性を示されたが、結論付けることを差し控えた。この背景には山形県内では古墳が出現するのは6世紀以降であり、円墳をもって開始とする意見が大勢を占めていたことが要因として上げられる。

こんな状況の中でも赤湯町はこれを町指定の史跡とし、町史の中でも前方後円墳と主張してきた。その後、昭和52年に山形県史編纂室と南陽市教育委員会により測量調査を行い、その成果から前方後円墳であることを明らかにした。

全長96m、後円部径62m、前方部長34m、前方部幅32m、後円部高さ10m、前方部高さ5mを測ると報告している。

前述した前方後円墳がある戸塚山古墳群は明治30年（1897）に地元上新田の故須藤勇助氏が戸塚山西南山麓から庭石運搬をした際に岩石の下から長さ60m余りの鉄刀や糸切のある須恵器と刀剣の金具などを発見したと伝えられている。

その後、大正末期から昭和の初期にはこれらの古墳群を学問研究の対象にしようと現地を訪れ、数カ所の試掘を実施しその結果から古墳群であることが明らかになった。試掘を実施したのは旧山形高等学校の安斎 徹教授であった。同教授は地元上浅川の故金木宮之助氏等の案内で戸塚山山麓の堤入りにある古墳と山頂の古墳を試掘され直刀二振りや透かしの鏝、馬具などを発見したと伝えられるが、これらの遺物が、戸塚山古墳群のどの古墳群から出土したのかは不明である。直刀二振りと鏝は現在、山形大学付属博物館に陳列されているが、他の遺物の所在は不明である。

昭和10年前後（1935頃）当時早稲田大学教授であった西村真次博士が戸塚山東山麓の古墳を調査され、横穴式石室古墳の代表として、論文「置賜の古代文化」の中に取り上げられ、『東置賜郡史（昭和12年）』の中に戸塚山古墳群として掲載されている。

昭和20年（1945）以降、考古学研究も戦後の自由な学風により急速に進展した。昭和28年に当時の山形大学教授柏倉亮吉氏がまとめられた「山形県の古墳」の中に戸塚山古墳群の横穴式石室の古墳群を長手古墳群（米沢市）や赤湯二色根古墳群（南陽市）との類似性を取り上げられ学問的に論考されてきた。

昭和30年代になると、高畠町の洞窟遺跡を中心とする発掘調査が実施され、それが契機となって、置賜の古墳文化の研究も急速に発展して行った。昭和32年の夏に加藤 稔氏が戸塚山古墳群の分布調査を行い、当時は126基余りを確認したと報告している。その際に山頂東端にあるホタテ貝形古墳（137号墳）の墳丘中央部を試掘し、粘土と礫層を交互に築成した複雑な墳丘であった。

なお主体部までに至らなかったと回顧している。

その後、昭和38年の山形県埋蔵文化財の分布調査に加藤 稔氏は120基余りの古墳を一括して「戸塚山古墳群」と報告した。以上述べてきたのは戸塚山古墳群の139号墳が前方後円墳と認識されるまでの概要であり、戸塚山古墳群を中心とした米沢市の南方から東方にかけての地域が古墳分布調査の対象とされてきた。これは戸塚山の古墳群はもちろんのこと北東に隣接する高島町や北方の南陽市に多数の古墳群が分布することが知られ、今回報告する米沢市西方一帯には古墳群が発見されていなかった状況が上げられる。

また、成島古墳群の所在する地名も「京塚」や「在家」と呼ばれる中、近世の字名が多く点在することもあり、分布調査を実施しなかった地域の一つであった。

昭和50年代に入ると米沢市においても道路建設や大規模開発に伴う発掘調査が実施されるようになり、方形周溝墓が県内で始めて発見された。特に比丘尼平遺跡からは3基の方形周溝墓が確認され、出土した土器が弥生時代の特徴を残す壺形土器であった。他に八幡堂遺跡、大清水遺跡、柿の木遺跡等がありこれらからは「南小泉」式に併行する土器群が出土している。

昭和57年には米沢市教育委員会とまんぎり会が主体となって、戸塚山古墳群137号墳の学術調査を実施した。この古墳は昭和32年に一度試掘を実施した古墳であり、墳丘中央部の試掘坑を中心に調査を実施し、墳丘下約2.2mの地山を掘り込んで構築した組み合わせ石棺1基を確認した。石棺の蓋石は安山岩の一枚岩で上部には割石を配列してあった。

内部には人骨が1体、ほぼ完全な状態で検出された。他に遺物としては豎櫛3点、鹿角製装の刃子1点がある。人骨は145～147cmの女性で年齢は壮年の中後期と推測される。年代は石棺の形態から5世紀後半～5世紀末とみられる。

昭和58年には戸塚山古墳群詳細分布調査が実施され、総数195基の現存する古墳群を確認している。昭和61年の2月10日に米沢市指定史跡として登録された。

南陽市の稲荷森古墳、米沢市の戸塚山古墳群139号墳の発見、あいつぐ発掘調査による古墳時代の遺跡の発見を契機として、各地方自治体や考古学研究グループ「まんぎり会」によって続々と古墳群が発見、確認、調査された。第1回に示したのが置賜盆地の古墳分布図であり、成島古墳群は平成元年に地元の水野 哲氏によって発見された。その後、米沢市教育委員会が測量調査を実施し前方後円墳と発表したのは平成3年であった。

詳細は後述するが、平成14年度には成島古墳群の北方山麓及び平坦地に古墳群が発見され、これらの古墳群を京塚古墳群と呼ぶことにした。この古墳群の中には全長41.1mの前方後円墳1基も含まれており、米沢市の前方後円墳は3基となった。

現在では長井市の河井山古墳群、川西町の下小松古墳等が次々に発見され、置賜盆地における古墳時代の墓あけは4世紀代であることは明らかになり、最近の論考では、米沢市地区周辺、川西町周辺、南陽市周辺の3区域文化圏に同時発生論が想定される。

第2章 遺跡の現状と調査経過

第1節 遺跡の現状

平成元年に地元の水野 哲氏に案内され、現地を踏査したのが最初である。大浦B遺跡を発掘している最中であり、昼休みを利用してのことであった。季節は夏と記憶しており、雑木に覆われた現状であったが、後円部墳丘と南方の周溝だけが印象深く残っている。

国道287号が南北に走る東方から登ったが、本来の山道は北方の神明神社が登り口であることが後から分かった。これは、その当時山頂から麓にかけて、立木の伐採が行われた後であり、運搬道路が国道から山頂に通じており、これを利用すれば少し急であるが、時間が短縮され、早く山頂に辿り着いた。

しかしながら、この運搬道路の造成によって、前方後円墳の北東及び、2号墳の墳丘が削平された結果となっていた。重機による削平はその後の調査で墳形を変容するほどのことではないことは判明しているが、2号墳については、墳丘の土砂が墳丘下に流出し、著しく墳形を変容していた。

立木は周溝にはほとんど認められず、主に墳丘に多く密集していた。これは周溝を構築する際に表土を掘り下げた結果、腐葉土が剥ぎ取られ植物の生育に適さない土状が形成されたものと理解される。

また、山頂で風が強いことから、落葉などは飛ばされ、長年経っても腐葉土が形成されなかったと考えられる。従って、周溝は構築時とほとんど変わらない形態を示していると考えられる。この例として、先述した戸塚山古墳群137号墳の周溝もトレンチ調査の結果、ほとんど堆積が確認されなかったことに類似する。

墳丘前方部はほとんど崩れや、盗掘穴、採集穴は確認されなかったが、後円部については第16図に示すように多量の窪地が認められた。これらの窪地は明らかに人為的に掘られたものが多く、地元の話では昭和19年頃に松の根を掘った際にできたものであろうとのことであった。それらの窪地の中には多量の岩化物や火を炊いた跡もあった。

特に後円部墳丘の東方に集中して窪地が認められ、深いものはFY1で約70cmを測る。東方に窪地が集中するのは立木が生長するに適した条件の場所にあり、掘るに手頃な松の木があった為と思われる。他にFY9とした緩やかなレンズ状の窪地が墳丘のほぼ中央に認められた。この窪地は尾根の東方突端部に構築され、東方からもはっきりとその姿を確認することができる場所を選地している。また成島古墳群と呼ばれる3・4号、5・6号も突端部をうまく利用して構築され、これら6基の古墳群は一連の企画性を持って構築されていたものと推測される現状を呈する。

現在は写真撮影や調査の為に土地所有者の了解を得、伐採を実施し、また採集穴等も埋め戻され構築当時に近い形態を保っている。

第2節 調査の方法

調査区は後円部とくびれ部、前方部、後円部の5箇所にてトレンチを設定した。Aトレンチは後円部配し後円部の墳鹿線の確認を目的とした。また前方部に配したDトレンチも前方部の墳鹿線を明確にするために配した。両者とも、目的を達成した段階で、それ以上の掘り下げを行わなかった。これは墳丘の保存に配慮したものである。(第12図参照)

くびれ部に配したCトレンチ、Bトレンチは祭祀跡の確認等に配したトレンチであり、表土を剥ぎ土壌墳のプラン確認を実施している。

後円部調査区とした箇所は後円部の墳丘ほぼ中央に設定し、最深を有すFY1による、主体部の影響を確認しながら掘り下げた。その際にFY1の西方表土から管玉2点を検出した。管玉の色調は白系を帯びる緑色であり、一見して長い間風雨にさらされてきた色調と推測される。

また同レベルで墳丘から土師片が検出された。その為、後円部の調査は主体部の確認を目的として、南北にセクションベルト一箇所東西二箇所のセクションベルトを設置し、少しずつ掘り下げて主体部のプラン確認を実施していった。

基点としたのは、平成3年に測量調査を実施した際に設置したトラバースの杭であり、朽果てのものもあることから、測量図を基に杭を新しく打ち直した箇所もある。各図面にT1～T25の記号で示した。

第12図に示した重機削平箇所についても調査を実施した。削平された土砂が斜面に散らばっており、それらを丁寧に採集して削平した箇所に貼付した結果、重機が通ったのは始めから平坦地であったことが分かった。すなわち、重機のハイド板によって平坦地にされたのではなく、平坦の場所を選んで重機が進行し、その際若干削平したに過ぎないと判断した。まさに不幸中の幸である。

後円部調査については、盛土の状況を確認するため地山まで掘り下げた。更に平成12年度の掘り下げ区を墳丘2段目まで延長し、Eトレンチとした。主体部の構造確認と版築状況の解明を目的とした。このEトレンチは平成14年度の調査として実施した。

後円部調査において、主体部を確認し、埋葬施設の底面まで掘り下げ遺物も採集した。全長58.7mの前方後円墳の調査例は当市ではなく、また県内においても初めてであることから主体部の施設解明の為にも、プラン確認にとどまらず埋葬施設全体の解明を目指した。主体部の掘り下げに関しては反対意見もあったが、今の段階で遺物と取り上げ保存処理することで遺物を後世に伝えるのも一つの選択と考えたこともある。

土層断面については特に注意を払った。主体部の解明の決め手になるのが土層断面だからである。写真も多く撮影した。写真は必ずしも土色を忠実に伝えられない場合もあるので図版でもできるだけ天然に近い写真を転載した。

調査終了後は埋め戻して現況に服した。主体部底面もそのままの状態で見られている。遺物は取り上げ保存処理した後、米沢市教育委員会が保管している。

第3節 調査の経過

平成3年の測量調査から9年が経過した平成12年と平成14年の2ヶ年に亘って、調査を実施した。測量調査は平成3年11月29日～同年12月7日の日程で平板測量を実施している。調査は成島古墳群で唯一の前方後円の形態と規模を明確にすることに重点を於いた。

測量は十字トラバースを基本としたもので、後円部のほぼ中心にトラバース基点T1を設け、古墳の主軸に沿ってT1～T9の中軸線を配し、古墳の主要箇所を横断するようにT9～T26の基点を設定した。雑木の除去と並行して、平板による測点とレベルでの高低計測を同時に行い、最終測点数は3685点であった。

平成12年の調査は同年9月11日～同年11月20日の期間で実施した。土地所有者の承諾を得て、雑木の除去や運搬道路の整備、現場休憩所の設営に一週間を要した。

その後、各トラバースの杭の打ち替えを実施し、以前に作成した測量図面に今回の調査区を記入した。9月19日からは墳丘の全長を把握するためにトレンチA・Dを設定した。さらに後円部の調査区を設定し、落葉を片付けたところ管玉2点、土師器片、鉄製品が相次いで表採された。鉄製品はその後観察で後世の遺物と判明している。

この状況から判断してFY1～FY9とした松の木の採集穴の一部が既に、主体部まで到達していることや、主体部が表土から比較的浅い場所に構築されている等が推測された。また遺物が散乱している状況から盗掘を受けたのではなく、前述したような理由で、古墳としての意識をしないで穴を掘った結果と考えられる。墳丘調査区の精査と並行して、各トレンチの調査も9月20日から開始した。

Aトレンチは長さ13.6m、幅1mで後円部の墳麓線や有段の形態に重点を於いて調査を進めた。その結果、墳麓線については把握できたが、後者については崩れが認められ、明確にする事が出来なかった。

Dトレンチは長さ8m、幅2mの範囲で前方部の端部から周溝の上場にかけてAトレンチと同様な目的で調査を実施した。その結果推積土は意外と少ないことから2日で終了した。両地区とも遺物は認められなかった。

B・Cは幅3m、長さ8mの範囲で中軸線を境に対称的に配置し、後円部と前方部の境を明確に把握する目的で配置した。その結果Cトレンチには周溝は認められなかった。Bトレンチには落ち込みが確認できた。遺物はCトレンチの表土から赤焼土器の高台を有する底部片が1点出土している。この遺物は平安時代であり、古墳とは関係ない遺物である。9月末日までの各トレンチの調査を終了し、10月2日から後円部の墳頂部である後円部調査区の範囲の調査に専念した。

調査が進行するに従い、次第に主体部の全容が明らかになってきた。第一に窪みの中には年代差が認められ、自積推積を呈し、しかもその場所が古墳の主軸線上に位置することが注目された。これらの事項と当初の遺物出土状況を合わせて考えれば、この窪みは木棺が腐食して出来た空洞に盛地が流れ込んで出来たものと理解され、浅い地点に主体部があると確信した。

その後、調査が進行するにつれて、土層からもはっきりと判明し、主体部の南東部は既に採集穴によって底面まで掘られていることが確認された。

現場での写真撮影は曇りの日が最適である。これは、周囲に立木があることから天気が良いと太陽光によって影が生じ写真が影響を受けるからである。写真撮影はこのタイミングを見計らって実施したが、調査の進行上、天気の良い日も撮影することがあった。現像した写真は木の影が入り予期した通りであった。

主体部の精査は、慎重に少しずつ掘り下げを実施した。その結果、主体部底面まで達している採集穴はなく、約20cmの深さが残る状況であった。遺物出土点及び主体部の実測図作成、写真撮影を終了後、後円部の構築確認をするためEトレンチを配し、地山まで掘り下げた。このEトレンチについては平成14年に南方に延長し掘り下げている。この掘り下げを10月27日までに終了し、同年11月14日(火)午前10時から現地説明会を開催した。埋め戻しは11月15日から11月20日の日程で実施し調査を終了した。下記に平成12年の日ごとの調査状況を記する。

- 9月11日(月) 雨 駐車場の草刈り及び運搬道路設営(終了)
- 9月12日(火) 雨 現場休憩所設営のため材料を運搬
- 9月13日(水) 晴れ 現場休憩所完成、下草刈り開始
- 9月14日(木) 晴れ 下草刈り
- 9月15日～9月17日まで休みとした。
- 9月18日(月) 薄曇り 下草刈り(終了) 下草刈り終了したが立木が多く伐採する用意あり
- 9月19日(火) 晴れ 立木の伐採開始 A-T Cの調査に設定
- 9月20日(水) 晴れ 昨日に続き太い立木の伐採を実施 C・B-T調査区設定
- 9月21日(木) 晴れ 太い木の伐採及び片付け実施、A-T調査区の設定
- 9月22日(金) 晴れのち曇り 太い木の伐採及び写真撮影のためのタワー設置
- 9月25日(月) 曇り時々晴れ 古墳全景撮影、立木伐採終了
- 9月26日(火) 晴れのち曇り一時雨 後円部墳丘整理開始、管玉、土師器、鉄製品出土
- 9月27日(水) 薄曇り一時雨 墳丘精査開始
- 9月28日(木) 薄曇り 同上、東側の精査、主体部は70cm～90cmと推測される
- 9月29日(金) 晴れ 墳丘精査 鉄製品出土(後世の遺物)
- 9月30日(土) 休み
- 10月1日(日) 休み
- 10月2日(月) 曇りのち小雨 墳丘精査 表土から約40cmの地点から管玉出土
- 10月3日(火) 雨のち曇りのち晴れ 墳丘精査(35cm～60cmの面) 出土遺物なし
- 10月4日(水) 晴れ 墳丘から40～70cmの面 出土遺物なし 松の木2本切り倒す
- 10月5日(木) 曇り 墳丘から70～80cm プランまだ見えず
- 10月6日(金) 晴れ 墳丘から70～80cm、プランが少し見えて来た
- 10月7日～10月9日まで休みとした。
- 10月10日(火) 晴れ 東西のセクションベルトを取り外す
- 10月11日(水) 晴れ 各トレンチの中でA-T終了、墳丘調査区南北セクションの撮影
- 10月12日(木) 晴れ 主体部プラン判明しそうである。深さは80cmの面出土遺物なし
- 10月13日(金) 晴れ 主体部プラン確認作業 最深で90cmの面 出土遺物なし

10月14日(土) 休み
10月15日(日) 晴れ プラン確認状況の写真撮影
10月16日(月) 晴れ 主体部の掘り下げ開始(約20cm) 深さ10cmの箇所から管玉出土
10月17日(火) 晴れのち薄曇り C・B-Tの掘り下げ、主体部から鉄鏃、管玉、鉈、鹿角 製
装鉄剣が検出された。確認面から深さ20cmの地点である。
10月18日(水) 休み 10月15日の代休
10月19日(木) 晴れ セクション図作成 主体部底面の精査
10月20日(金) 曇りのち小雨 セクション図終了 午後から西側ベルト取り外し開始
10月21日(土) 休み
10月22日(日) 休み
10月23日(月) 曇りのち雨 セクションベルト取り外し終了 鉄片(刃子の破片)出土
10月24日(火) 晴れ D-Tセクション図作成
10月25日(水) 雨時々曇り 雨のため写真撮影が出来ず。墳丘全体の下草刈り実施した。
10月26日(木) 曇り 写真撮影(遺物出土状況) 遺物の取り上げ実施
10月27日(金) 曇りのち晴れ Eトレンチの掘り下げ実施 セクション図作成A-T
10月28日(土) 休み
10月29日(日) 休み
10月30日(月) 曇り時々晴れ 墳丘の下草刈り
10月31日(火) 晴れ Eトレンチの掘り下げ完了
11月1日～11月3日まで休みとした。現説の原稿作成
11月14日(火) 晴れ 現地説明会、地元を中心に約50名の参加 A～DT埋め戻し
11月15日(水) 晴れ 東方の重機で削平された墳麓線の復元作業
11月16日(木) 小雨 後円部調査区埋め戻し作業
11月17日(金) 小雨 同上 11月18日、19日は休み
11月20日(月) 小雨 後円部調査区埋め戻し作業
11月21日(火) 小雨 同上
11月22日(水) 小雨 同上及び現場休憩所の解体 11月23日休み 埋め戻し終了
11月24日(金) 晴れのち小雨 現場で残務整理、午前中で終了
平成14年は12月2日～同年12月6日に日程でEトレンチ南側を延長して地山まで下げた。

第3章 調査結果

平成3年の測量調査で判明した成島古墳群1号墳について述べる。1号墳は山頂の南側を削平して古墳を構築したものである。古墳の南側から前方部の西側にかけて周溝状の落ち込みが見られる。古墳の主軸方向は東西よりのN-62°-Wで、前方部が西側方向に開いている。

古墳の形状は左右対象の前方後円墳であり、後円部径が32.5m、前方部長が26.2mの全長58.7mを有する。後円部は後世に掘られた穴が十箇所亘って存在し、古墳の墳頂部が著しく変形している。従って墳麓線の有段の把握は困難であった。現状での観察では北側と南側に段が認められ、三段構築の可能性が高い。現高は南側の墳麓線からの計測で述べると、後円部の高さが5.1mであった。

前方部は後円部と同じ様に墳頂部が若干崩れているものの、保存状況は良好である。二段構築を有し、前方部長が26.2m、前方部幅が22.4m、前方部西側の墳麓線の比高差で2.33m、後円部の比高差では0.56mを測る。古墳全体が斜面に構築していることから、後円部の高さと同様の比率で比較することはできない。

平成12年の成島古墳群1号墳の調査では、AトレンチからEトレンチの5箇所を調査区を設置して調査を実施している。前述した測量結果を追認する古墳の計測値であった。後円部の調査区では、主体部を確認して底面まで掘り下げている。また、副葬品である出土品もあり、具体的に古墳であることを解明した。

平成14年には後円部のEトレンチを南方に延長し、主体部の構造解明を実施した。新たな主体部は発見されず、遺物もなかった。このことから、後円部の主体部は1基であることが判明した。またこの年には2号墳から6号墳までの略測図の作成、周辺の分布調査、及び古墳が所在する広幡地区一体を踏査した。

その結果、新たに前方後円墳1基、円墳8基、方墳8基を確認した。これらの古墳群は京塚古墳群、下小菅古墳、延長時古墳、西方寺古墳群と命名した。但し、これらの中には地元では「お経塚」と呼ばれているものがあり、全てが100%間違いなく古墳であるかは断定できない。

京塚古墳群は今回報告する成島古墳群の所在する六月在家山の北西突端部を中心に分布するもので前方後円墳1基を含む総数9基の古墳群である。平成12年の調査期間中に現場を訪れた地元在住の鈴木 仁氏が、他にもこの前方後円墳に類似する塚があるとの情報を土地所有者から聞いているという事であった。それを受け平成14年度に調査を実施、今回の報告となった。

土地所有者は金田八良氏であり、その他に数基の円墳も認識していた。現地の案内をお願いした両氏は快く承諾され、今回の確認となった。また寒河江八重氏の畑に構築された2基の円墳は寒河江家代々に渡り、「お経塚」と称し、立ち入ってはいけない場所とされていたそうである。平坦地にありながら削平されずに残っていた要図として挙げられる。

他の古墳群は国道287号の西方山麓に分布する古墳群であり、方墳で占められるのが特徴である。積雪のため不十分な箇所もあり、今後の踏査で増加する可能性がある。

第1節 分布調査

平成元年の成島古墳群の確認から早14年が過ぎた。しかしながら周辺の分布調査については未調査の箇所や、塚があるとの認識はあったが古墳との確認まで至らなかった塚もあった。

そこで、今回は平成元年から蓄積された資料から、古墳の可能性が極めて高い塚群について古墳と呼ぶことにした。また成島古墳群についても、再度、調査を実施し略測図を作成した。

成島古墳群、京塚古墳群、下小菅古墳、延長寺古墳、西方古墳群の順で説明を加える。しかし、下小菅古墳、延長寺古墳、西方古墳群については、積雪のため略測図を作成することが出来なかつたので概要にとどめたい。期間は平成14年12月9日から同年12月25日である。

●成島古墳群

全長58.7mの前方後円墳の1号墳及び、6号墳までの総数6基からなる古墳群である。前方後円墳の以外の古墳は全て方墳で占められる。2号墳は前方後円部東方直下に構築され、13×13mを測る。斜面に位置しており、東方から見れば墳丘は高く見えるが、西南方向から見ればほとんど高低差は感じられない形態を呈する。この2基が構築された山頂東突端部から北東に約90m離れた場所に3・4号が構築されている。

この箇所も山頂部が東方に張り出す地域であり、平地から見れば目立つ場所を選地していることが判る。(図版1参照)、更に北西へ約30mいった山頂に5・6号がある。山頂が緩やかに北方に下り始める位置であり、前の3・4号の構築された場所と同様、平地から目立つ場所である。この様に6基の古墳が山頂の平坦地を利用して、2基ずつ、目立つ地点を選出して構築されている。1・2号については前述したので、3～6号墳について説明する。

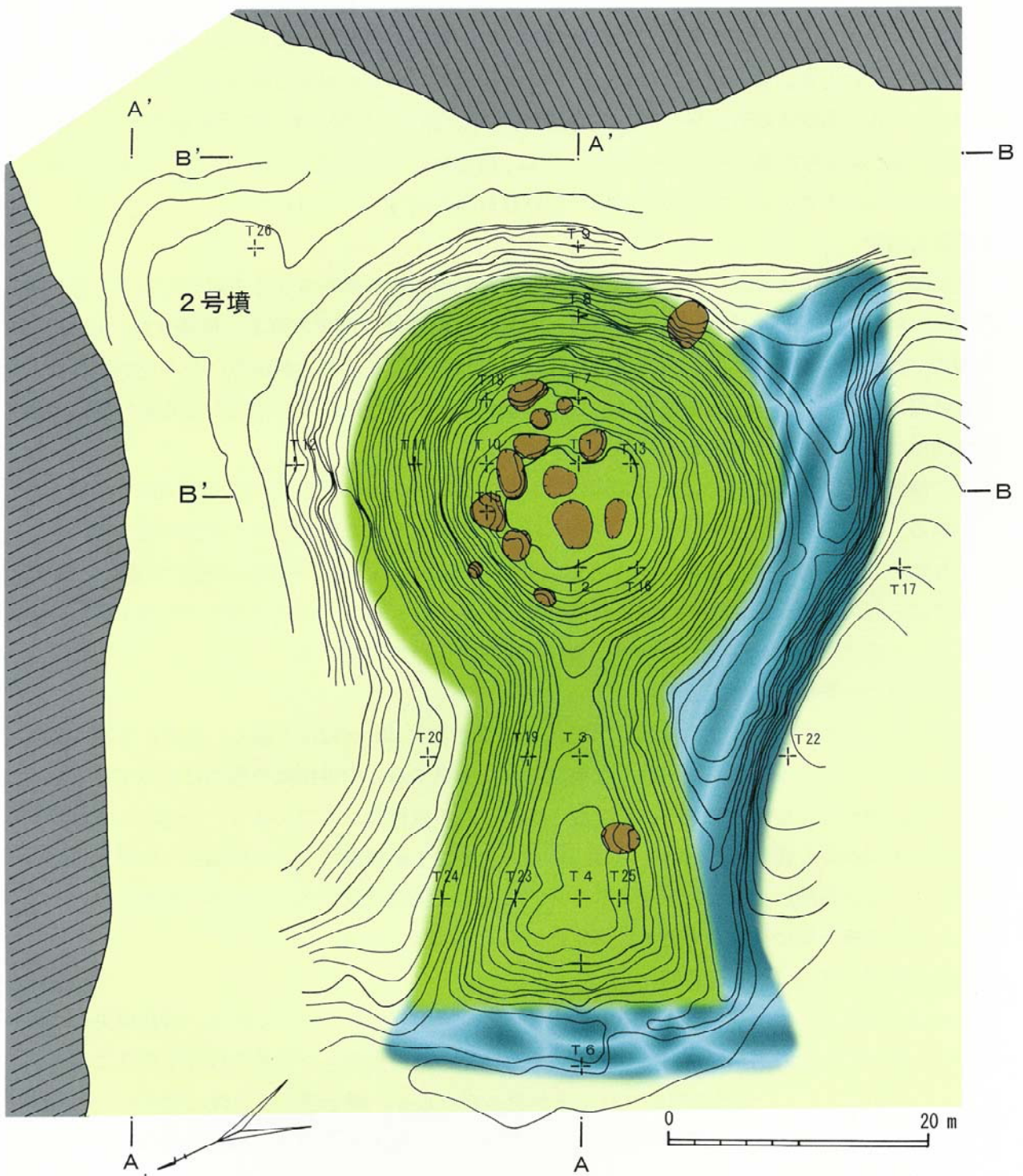
●成島古墳群3号墳(第6図参照)

山頂が東方に張り出す尾根の山頂に3号墳は構築され、12m×12mを測る。西方に位置する4号墳との境には幅3mの尾根を分断した溝があり、一見すると中世山城の掘切にも似ている様相を呈する。墳丘は窪地が多数あり、採集穴と推測される後世のものであろう。全体的に見ればレンズ状に中央が少し窪む墳丘形態である。墳丘の高さは1m前後であるが突端部に構築されていることが、見る場所によっては実際よりも高く見える。盗掘は受けていないが、採集穴によって落した土が墳丘下場に推積しており、不定形に見える現状である。

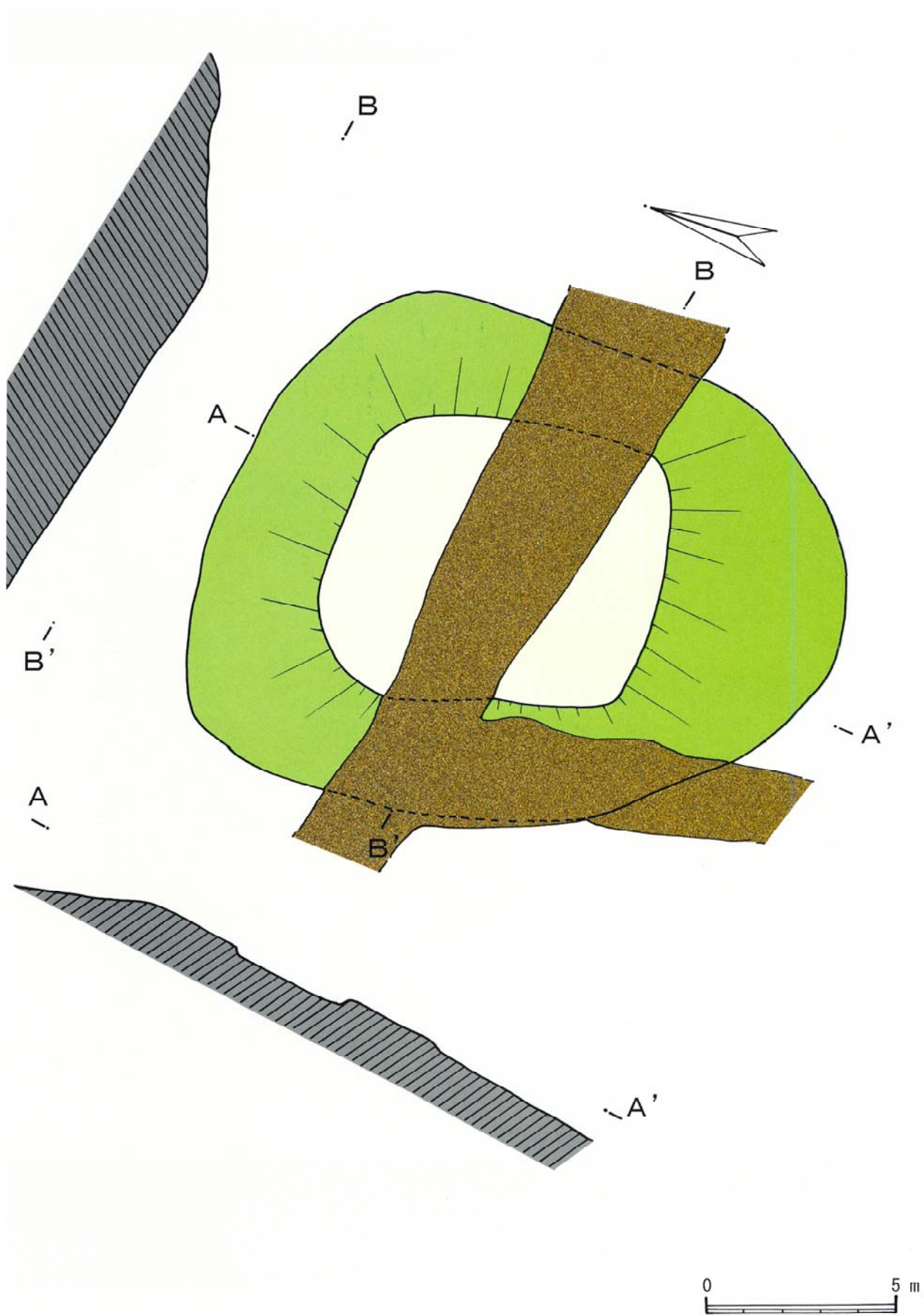
●成島古墳群4号墳(第6図参照)

3号墳と隣接して構築され15m×15mを測り、3号墳よりもやや大型である。墳丘中央には地元の人が建立した石の祠が祭られている。古墳の西南方向すなわち平坦地には片直角状に浅い幅1.5mの周溝がめぐる。南方周溝にブリッチが認められるが、祠を建立する際に造成したとも考えられ結論は差し控えたい。北方は自然斜面を利用した形態であり、明瞭な周溝は認められない。東方の3号墳と隣接する地点には幅1.5mの平坦地があり、南方まで延びている。

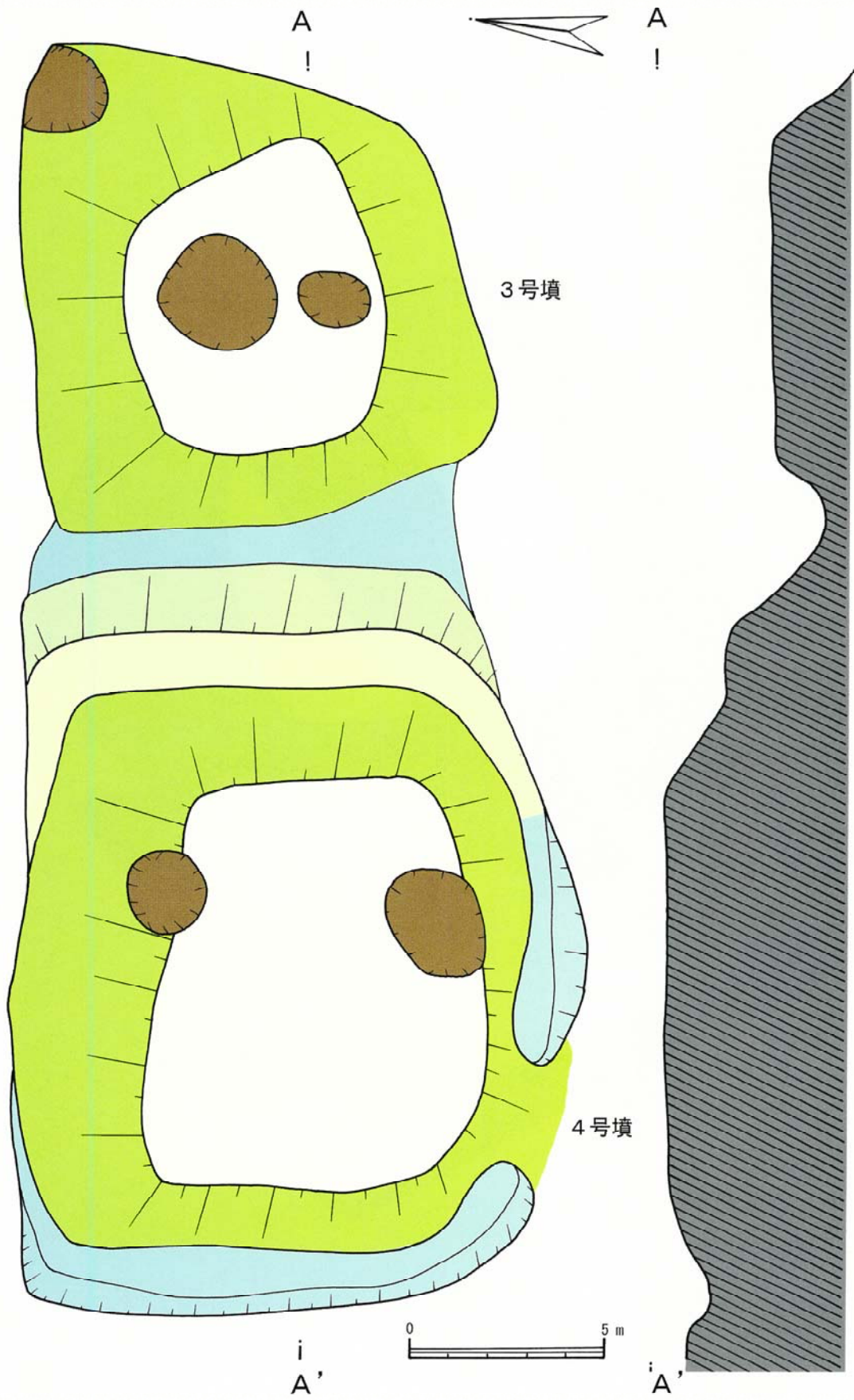
墳丘には太い松木があり、凹凸が多く平坦とは言えない。また採集穴も2箇所認められるが墳丘の平面形態は崩れていない。3号墳との比高差が3mあり、尾根を分断したことによってできた溝が4号墳をより目立つ存在にしている。盗掘坑は確認されなかった。



第4図 成島古墳群1号墳測量図



第5図 成島古墳群2号墳略測図



第6図 成島古墳群3・4号墳略測図(2)

●成島古墳群 5号墳（第7図参照）

六月在家山の山頂は南北に長い平坦地を形成している。その平坦地が緩やかに北方に下り始める地点に構築された古墳であり、長軸方向はほぼ南北にあり長さは16m、東西は14mを測る長方形形状を呈している。墳丘の高さは南方で1m、北方で2.5mを有する。墳丘頂は11m×6mの平坦地であり、採集穴等は認められなかった。3・4号墳と比較すると5・6号墳は大型の形態を呈する。長軸方向の北東が自然斜面に面しており、東方には明確な平坦地は形成されていない現況である。この面を除く北、西、南の墳麓線を囲むように幅1m前後の浅い周溝が認められた。盗掘の跡はないが全体的に中央が窪む現況を呈する。

●成島古墳群 6号墳（第7図参照）

5号墳と隣接する6号墳の両古墳の間にも3・4号墳と同様に尾根を分断した「U」字型の溝が構築されている。この古墳は成島古墳群の方墳の中では最大規模を有するもので23m×23mを測る。墳丘頂もほぼ方形で12m×12mの平坦地であり、採集穴はないが大木が多数立っている。この古墳を境に丘陵が下り始める場所に構築されている。ほぼ全周する形態で周溝が巡り北西から南西にかけては明確に完見できる。幅は上場で2m、広いところでは5mもある。

断面図でも判るように、6号墳は5号墳よりやや低い場所に構築されているが、平地から見れば6号墳の方が目立つ存在である。また周溝が全周することや山頂の北方端部に位置することから、他の方墳とは別格の形態を呈している。墳丘の高さは4mを測り、他を圧倒する墳丘である。広大な山頂部にも関わらず、この地域に関してはこの6基だけであった。

●京塚古墳群

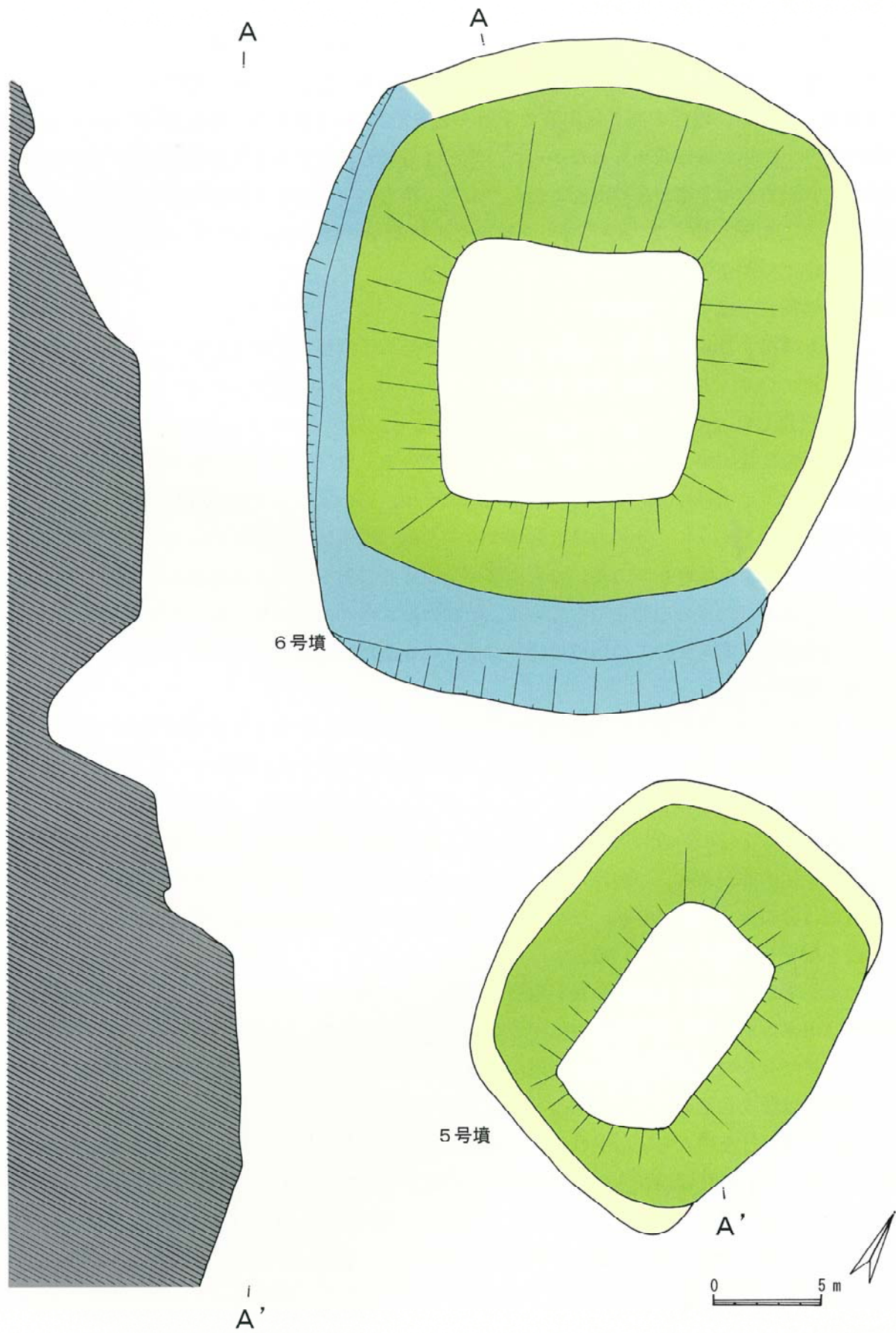
平成14年12月9日から開始し、略測図を作成した。古墳群が構築された場所は大在家山の北方山麓及び、平坦地に確認した。成島古墳群とは平行距離で約1.5kmも離れていることから字名をとって京塚古墳群と総称する。

この古墳群は1基の前方後円墳と8基の円墳、総計9基で構成される。山麓から平坦地の箇所には道路や住宅等があり、この地域にも以前は古墳群が存在した可能性もある。第2図で示すように古墳は分布し、山麓に6基、平坦地に3基が現存する。山麓の尾根中央には神明神社の境内が斜面を削平して建立されている。

この場所も北方でも最も眺望の良い場所であり、この境内にも古墳が存在した可能性が高いが、明確には出来なかった。神明神社には平地からの登り口があり、神社までには石の階段が築かれている。また入り口には古峰神社の石塔があることから、山麓にある神明神社を古峰神社として多くの地図は記入してある。

字名もこの神社を境として分かれ、西方が神明山、東方が京塚山となり、古墳は全て東方の京塚山に分布する。神社境内からは陵線に沿って山道があり、成島古墳群と続いている。

距離的には遠いが登るには緩やかであり、我々が成島古墳群の調査の際に使用した道よりも楽に登れる。このことから考えれば、本来、成島古墳に通じる道はこの山道なのかもしれない。現在、この地域一帯は立木の伐採が進み、見通しの良い緩やかな丘陵になっている。1～9号墳の順で説明したい。



第7図 成島古墳群5・6号墳略測図(3)

●京塚古墳群 1号墳（第8図参照）

成島古墳群が所在する山頂は標高327mを測る。その山頂から北方に標高差で約55m下った標高272mの地点に構築された古墳である。直径9mの円墳で墳丘のほぼ中央に幅2m、深さ約60cmの削平箇所がある。盗掘の跡とは考えにくく、一見重機が通った跡にも見えるが、周辺に重機が通った痕跡は認められない。主体部の崩壊によって生じた窪地とも考えられるが、明言は避けたい。墳丘の高さが1m前後と低く、周溝は認められなかった。

現状は雑木に覆われており、注意して見ないと見逃すような古墳である。

●京塚古墳群 2号墳（第9図参照）

2・3号墳は、隣接して構築された古墳である。墳丘は平坦であり、直径14mを測る。墳丘の高さは南から見ればほとんど比高差がなく、北方から見れば高く見える。これは斜面に構築されたことによるが、平地からの視線に重点をおき、構築した結果と考えられる。この構築法は全ての古墳に共通する。

●京塚古墳群 3号墳（第9図参照）

2号墳の北方に位置し、直径8m、墳丘は平坦で墳丘の高さは1m前後である。2・3号墳とも雑木に覆われているが、平坦地に構築された1号墳と違い緩やかな斜面に構築され、墳丘も明瞭に確認できた。盗掘跡は認められなかった。

●京塚古墳群 4号墳（第10図参照）

全長41.1mの前方後円墳である。前方部幅は15m、後円径は21.7mを測る。くびれ部には周溝が認められる。墳麓線には全周する平坦地が構築されている。北方の前方部から後円部にかけて緩やかに傾斜している墳丘頂の形態を有する。

前方部は尾根を削平し作り出した構築法と判断され、後円部に重点を置き盛土によって構築したものと推測される。後円部に段は確認できなかった。後円部の高さは約3.5mあり、北方からの景観は圧巻である。

前方後円墳は尾根を利用して構築されており、主軸線が丘陵の稜線と同一であることから山道の一部となっている。その為、雑草が刈り取られてきれいになっていた。土地所有者も稜線が境となり、複数いると思われる。

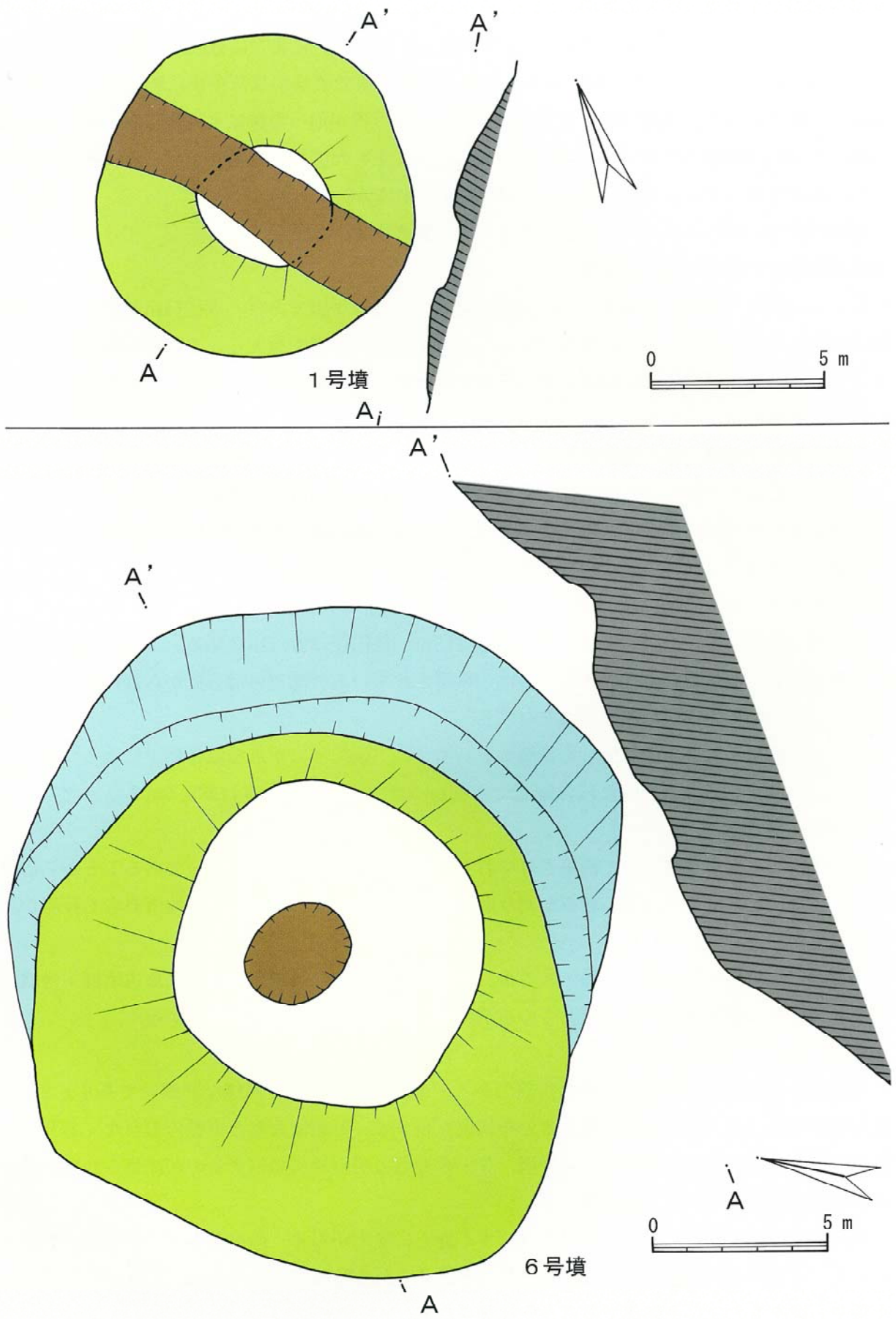
墳丘頂については前方部は平坦であるが、後円部には窪地の箇所もあり、成島古墳群1号墳の窪地と類似する形態を有する。なおこの古墳に対しての盗掘跡は認められなかった。

●京塚古墳群 5号墳

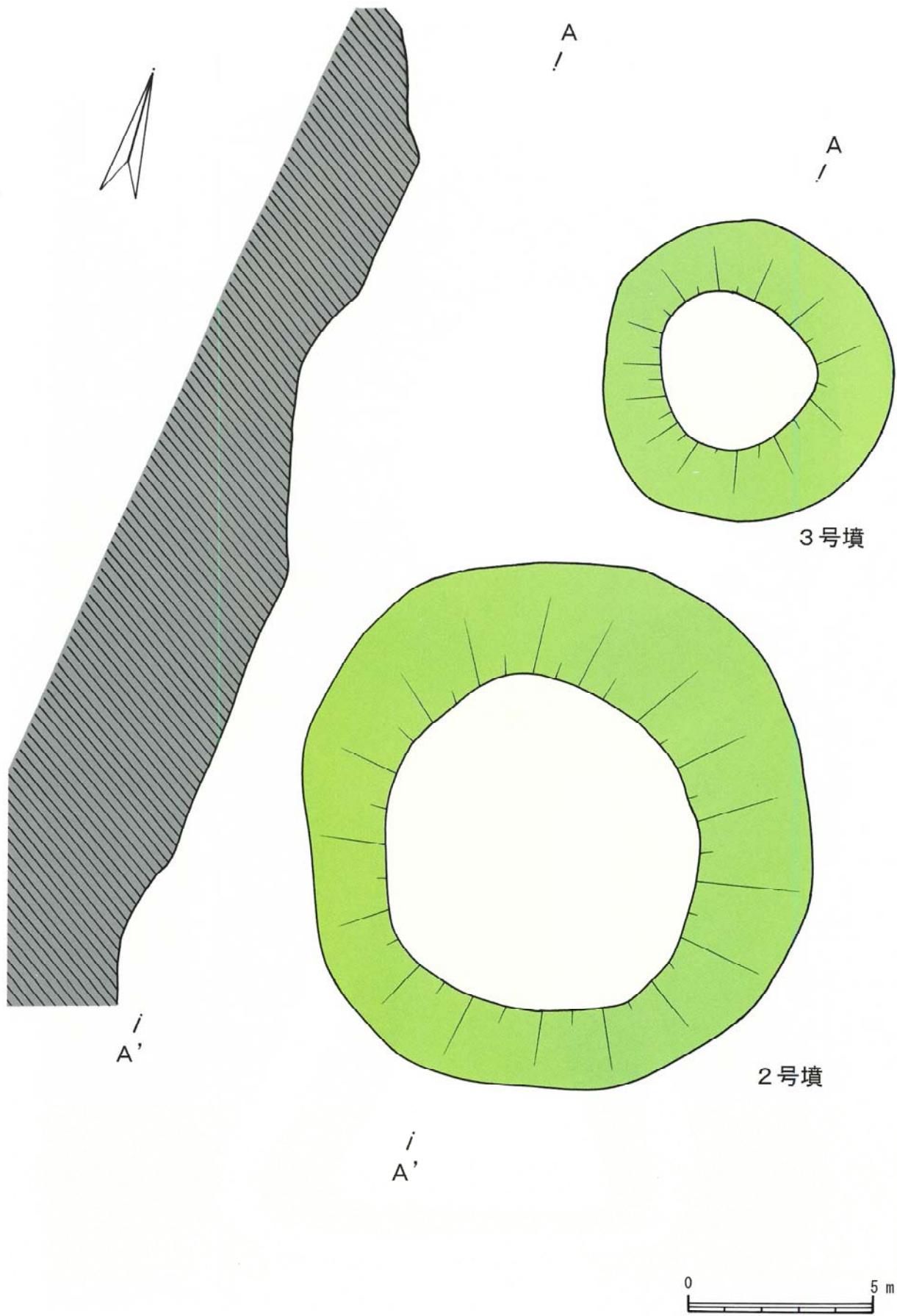
6号墳の西南に隣接する小規模な古墳である。前述した3号墳と同様な計測値であり、2号・3号墳が隣接、5・6号墳が隣接する分布状況を呈する。形態は大型と小型の組合せであり、山頂に構築された成島古墳群の3・4号墳、5・6号墳の組合せに類似するのが注目されている。

●京塚古墳群 6号墳（第8図参照）

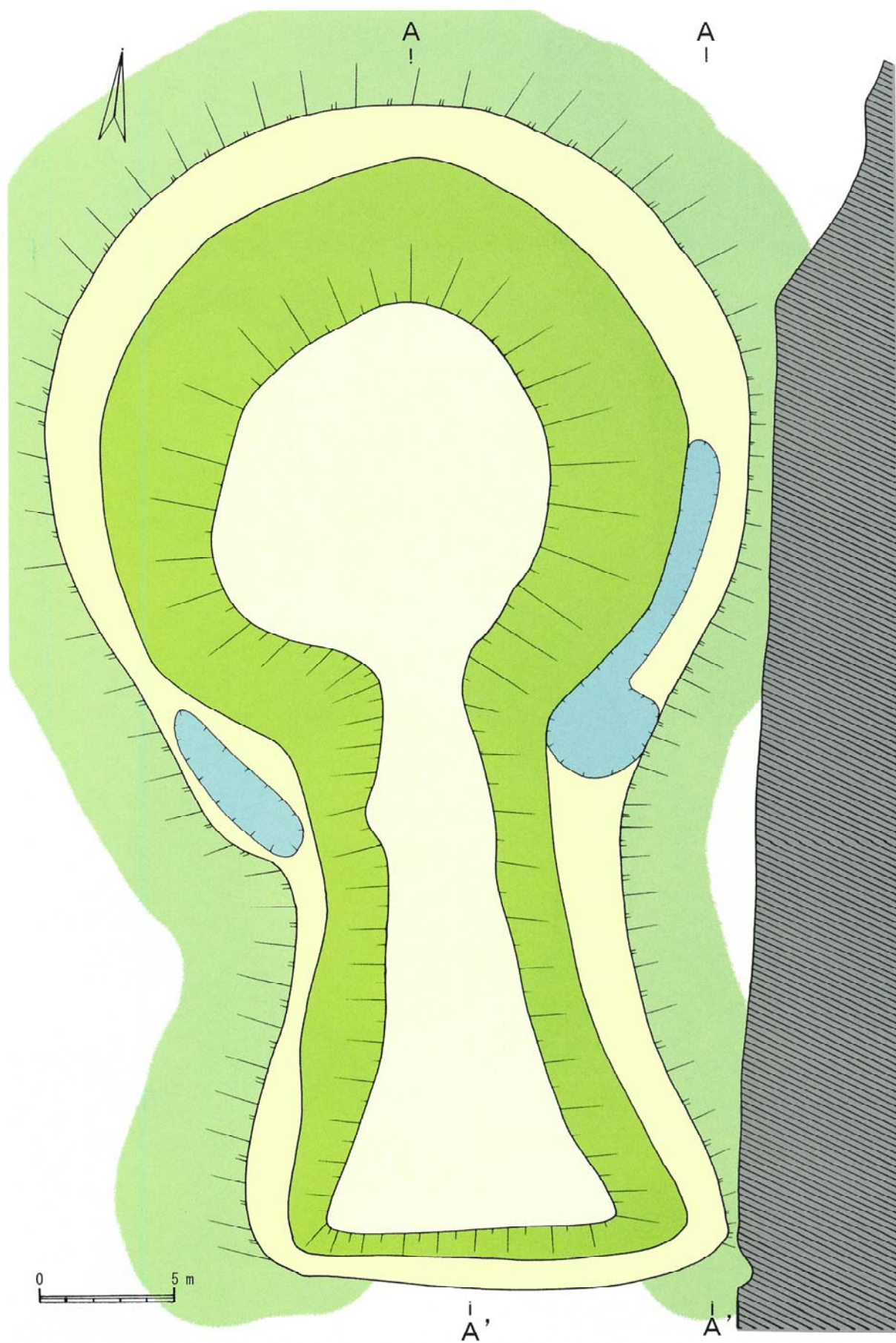
丘陵の末端部に構築された古墳であり、すぐ近くに住宅がある。周溝が半周する形態で墳丘頂の中央に主体部が崩落する事によって生じたと考えられる窪地が認められる。これは主体部が粘土層や石層をもたない主体部であろうと推測される。



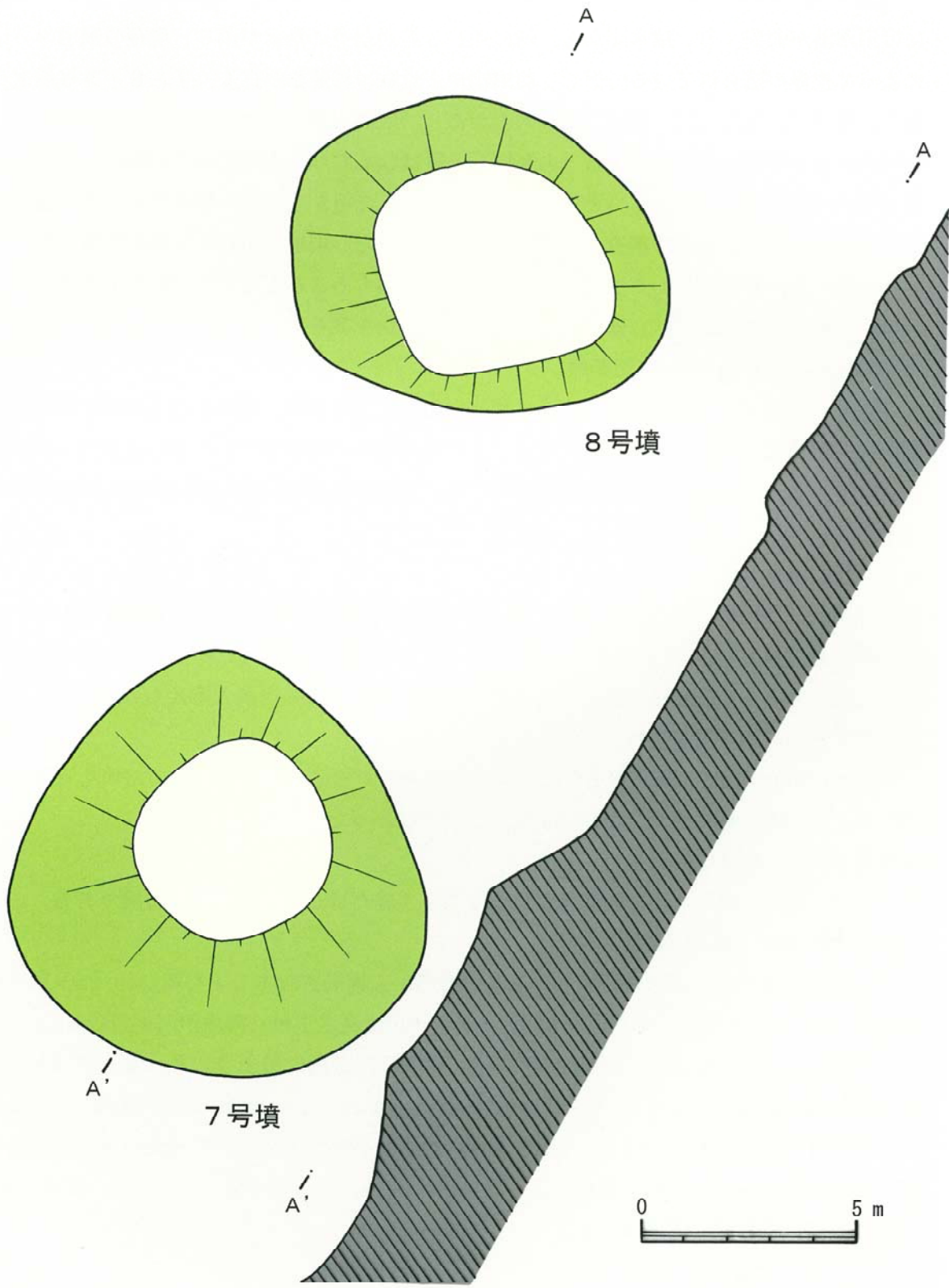
第8図 京塚古墳群1・6号墳略測図(1)



第9図 京塚古墳群2・3号墳略測図(2)



第 10 図 京塚古墳群 4 号墳略測図(3)



第 11 图 京塚古墳群 7・8 号墳略測図(4)

この6号墳は京塚古墳群の円墳の中では最も大型で直径15m、墳丘の高さは3.5mを測る形態を有する。

●京塚古墳群7号墳（第11図参照）

国道287号の旧道と新道に囲まれた場所に位置する。現況は畑で古墳の西南に住宅、東方直下には用水路が北流する。用水路から、畑に通じる斜面地帯に雑木が茂り、現在の国道からは雑木によって視界が遮られている。但し、旧道側から見れば見通しが良く、7・8・9号墳を一望できる。墳丘には畑にも関わらずキワダの大木があり、塚が大事にされてきたことが伺える。

隣接する8号墳と共に地元では「お経塚」と呼ばれており、土地所有者の話によれば以前に山形大学から調査をさせてほしいとの以来があったが、先祖からの言い伝えによりこの場所は立ち入り禁止となっているので調査を断ったとの事であった。現地を踏査した結果古墳の可能性が高いと判断した。しかしながら地名等から経塚の可能性もあることをここに記しておきたい。墳丘頂は少し削平されレンズ状に窪んでいる。直径は9mを測る。

●京塚古墳群8号墳（第11図参照）

平坦地に位置する3基の古墳の中央に構築された古墳である。墳丘が若干削平され、土砂が墳麓線に及び、墳形が不定形になっている。この8号墳も大事に守られ、墳丘の東方に桜の木が植えられている。直径6mの円墳と推測され、墳丘の高さは1m前後の比較的低い形態を有するものと考えられる。

●京塚古墳群9号墳

やや小高い平坦地の北端部に位置する。この箇所は石塔や祠が立ち並ぶ様相を呈している。だいぶ削平を受けているが墳麓線の一部が残っており、古墳と判断したが、2号・8号と同様に経塚の可能性もある。直径は現状から8号墳と同様な6m前後の円墳と考えられる。

●下小菅古墳（第3図参照）

京塚古墳群から北方に約1.8kmを丘陵づたいに行った所に位置し、2基の方墳を丘陵山麓に確認した。周辺を詳細に踏査したが他には確認できなかった。

●延長寺古墳（第3図参照）

下小菅にある延長寺の南方約80mに位置する。1基だけがあり、形態は方墳である。

●西方寺古墳群（第3図参照）

川西町との境に近い地域に位置し、8基の方墳から構成される。1号墳は16.4m×16.5mで高さは2.8m、周溝が全周する。2号墳は8.1m×7.0mで高さ1m、周溝が南東面にある。

3号墳は8m×8mを測り、高さは1.4m、周溝は部分的に確認された。4号墳は13m×13m、高さは1.2m、周溝が全周する。5号墳は5.2m×5.5mで高さ1mと低い。周溝は認められなかった。

6号墳は4m×4.3m、高さは1.2mを測る。周溝は不明であった。7号墳は6号墳と同様な規模であるが墳丘がやや低い形態である。8号墳は14.2m×8.5mの唯一長方形で、高さは1.8mを測る。周溝は部分的に認められた。

第2節 成島古墳群1号墳の調査

① 墳丘

標高327.2mの大月在家山の頂上平坦地が、若干東方に張り出す東方端部を削平及び盛地によって構築した墳丘である。第4図が平成3年の測量によって作成した平面図で原図は百分の一でトレースした。

平成12年には第12図で示した箇所を調査を実施しており、平成3年の測量結果と平成12年の調査を加味して以下に述べる。墳丘に対してはA～Eトレンチを配置した。Eトレンチについては南側に延長し、平成14年に再度調査を実施している。各箇所について述べていく。

● Aトレンチ (第13図参照)

後円部の東南部に配したトレンチである。T9から3m行った地点からは、急斜面の沢となっている。調査は表土を掘り下げただけにとどめた。このトレンチは段の有無を確認するために実施したが、表土を剥離した段階では明確な段は確認できないが、自然崩落もあまり受けていない墳丘形態と理解された。

このトレンチからは遺物は認められなかった。トレンチの平面図に一点破線で示した箇所が墳麓線と想定した箇所である。セクション図中央に認められる突起部は木の根によるものであり、段の有無とは無関係である。

測量図の等高線を見ると3段構築と推測されるが場所によっては明確でない場所もあり、特に南方部のくびれ部から後円部南西部がなだらかになっている。この形態は意図的に作り出した可能性がある。なぜなら、もし自然崩落とすればむしろ反対側もこの様な等高線を示すものと考えられるからである。

● Bトレンチ (第14図参照)

くびれ部の南西箇所に配したトレンチで、表土を剥離した状態で終了した。トレンチ平面図に実線で示した墳麓線を確認した。墳頂から墳麓線までの高低さは2.7mで傾斜は緩やかである。このトレンチからも遺物は認められなかった。

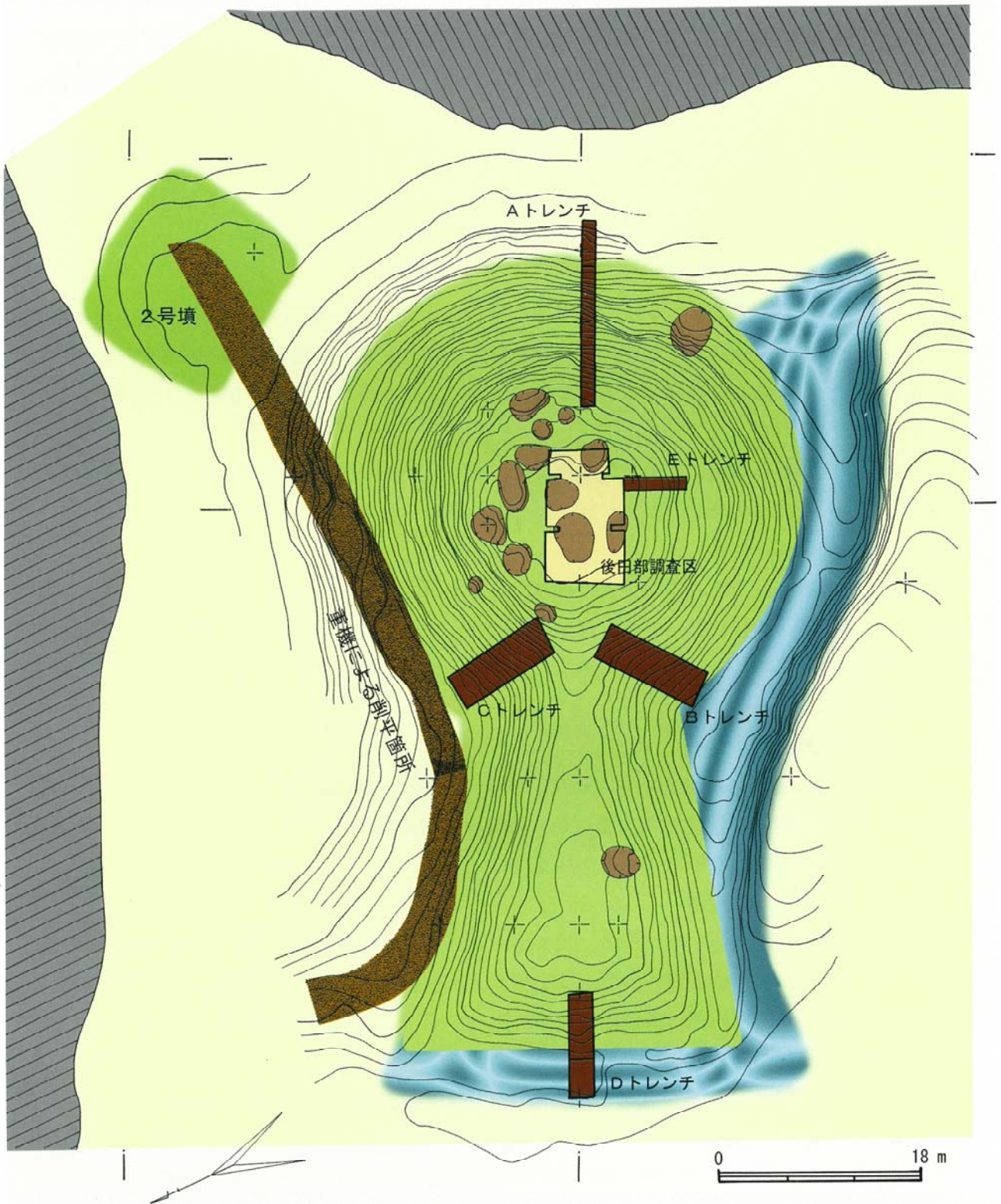
● Cトレンチ (第15図参照)

くびれ部に北東に配したトレンチで、KY1とした溝跡を確認した。KY1は墳麓線の箇所に位置し、幅1m、深さ12cmと浅い。覆土は1層で灰褐色粘質土であった。底面はレンズ状を呈し、長さは不明であるが、後円部の南東部墳麓線に沿って延びると推測される。また底面には白色の粘土を貼付した痕跡が認められた。

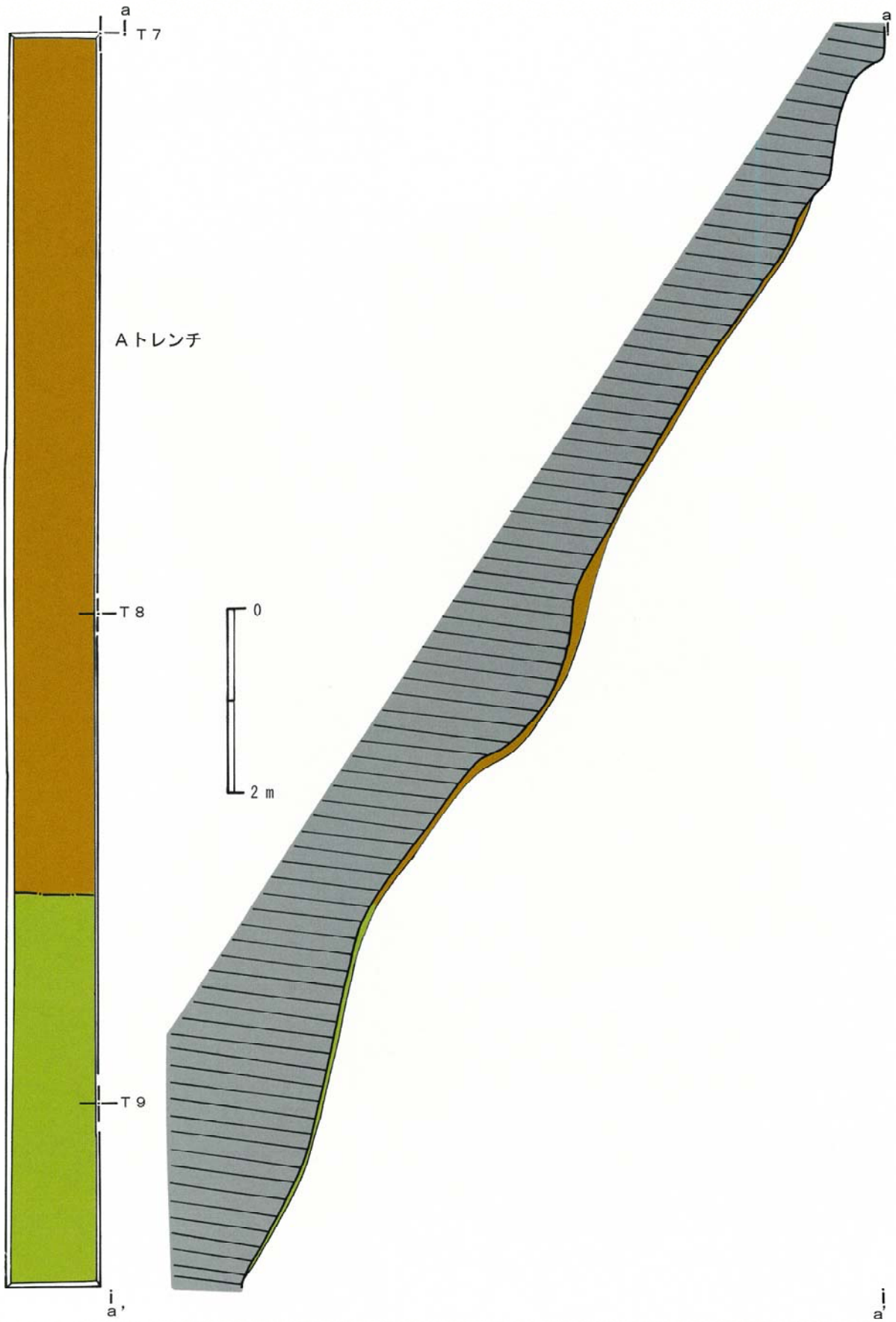
このトレンチの表土から平安時代の赤焼土器片1点が出土しているが、他には認められなかった。

● Dトレンチ (第15図参照)

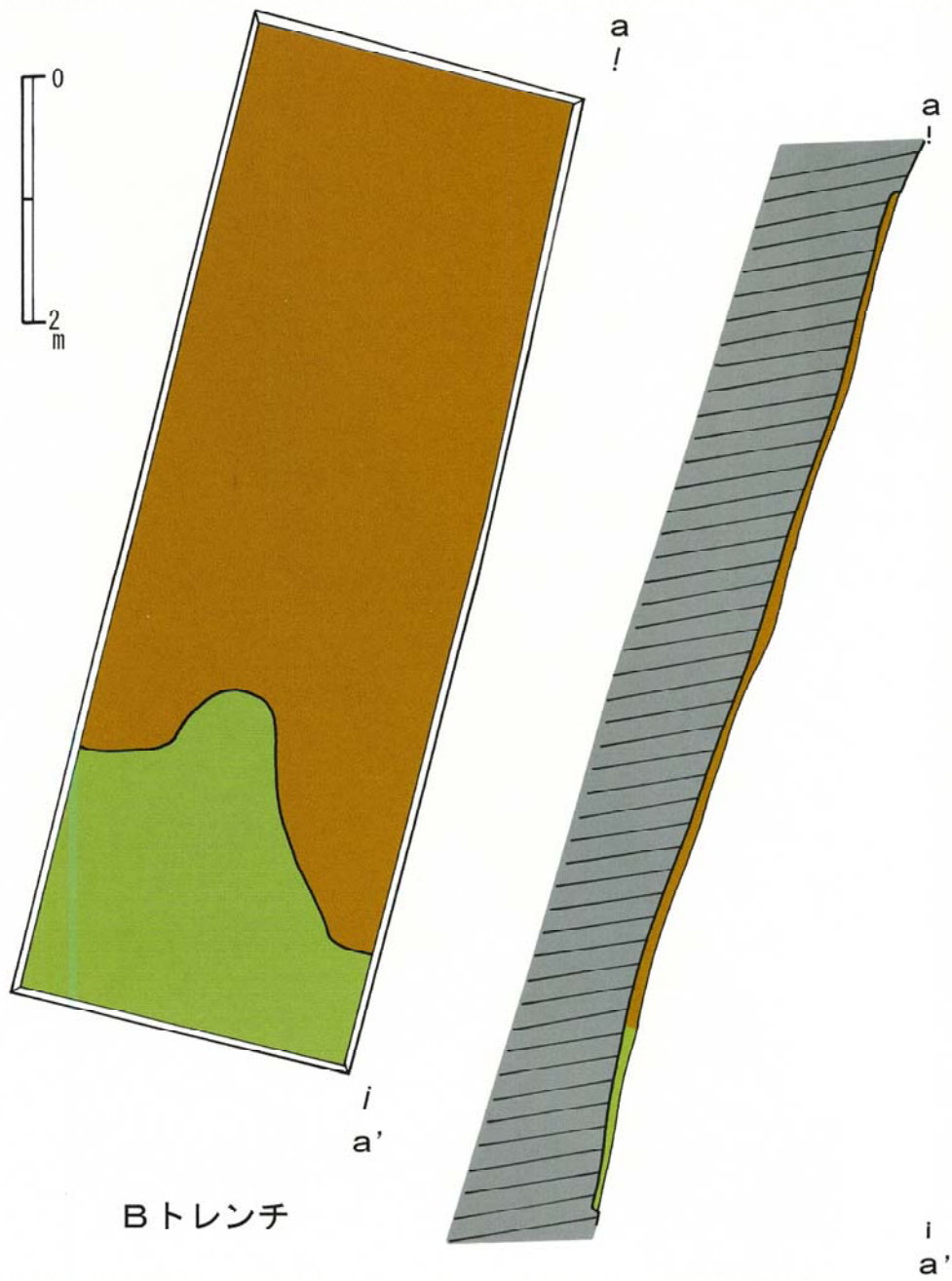
前方部に配したトレンチで、平面図に示した実線が墳麓線と想定した。実線箇所を境として墳頂部は赤褐色、周溝箇所は黄褐色を呈す。この状況から判断して実践で示した。この地点からも遺物は認められなかった。周溝の推積土は最深でも26cmであった。



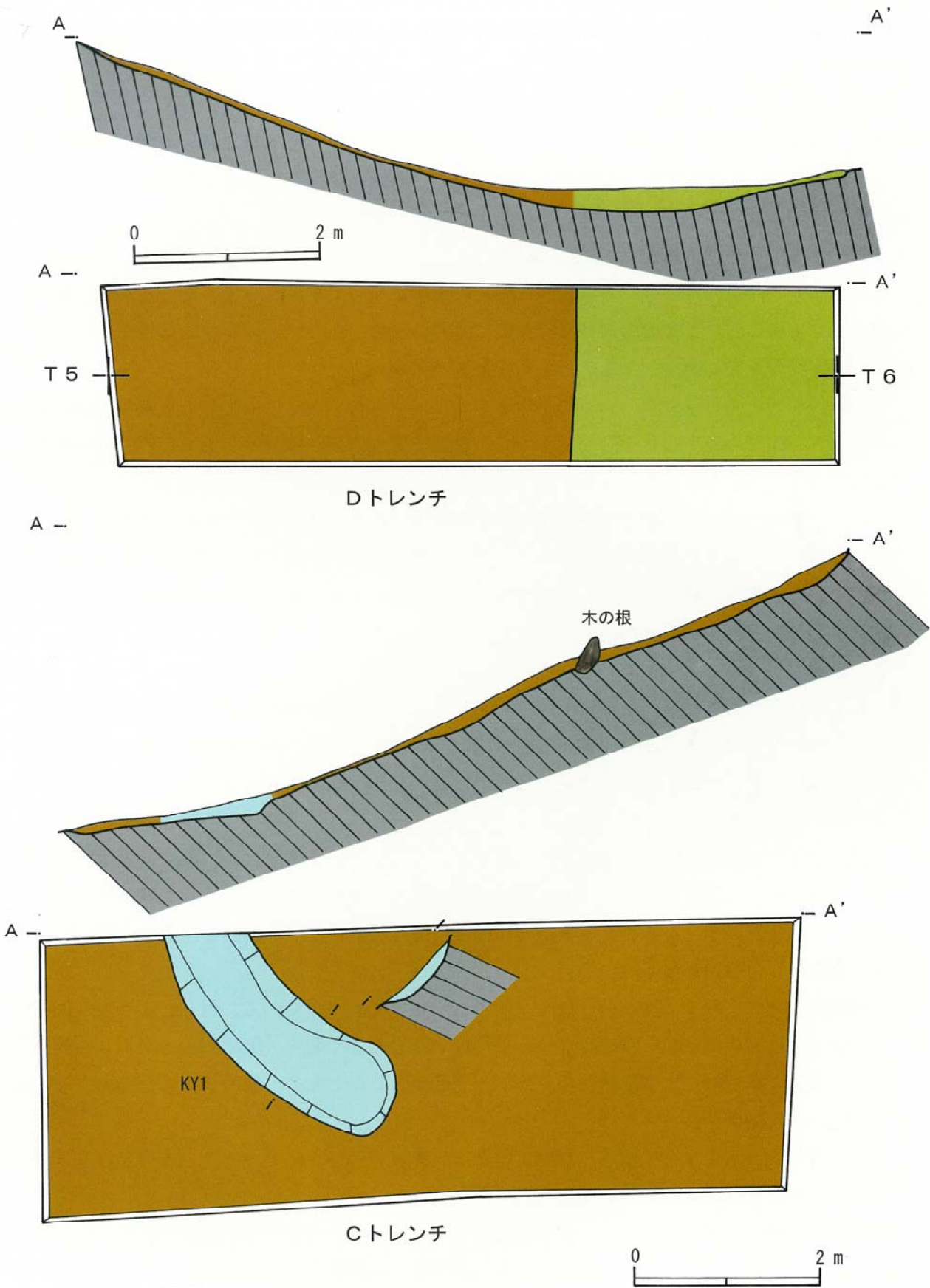
第 12 図 成島古墳群 1 号墳調査区位置図



第 13 図 成島古墳群 1 号墳 A トレンチ土層断面図・平面図(1)



第 14 図 成島古墳群 1 号墳 B トレンチ土層断面図・平面図(2)



第15図 成島古墳群1号墳Cトレンチ土層断面図・平面図(3)

AトレンチとDトレンチの調査結果から得た古墳の全長は測量結果と同一の58.7mであった。凹地となっている周溝でも、推積土は26cmだけであり、若干の自然崩落はあるものの、構築時期の形態を有すると考えられる。

● Eトレンチ（第21図参照）

唯一、地山まで掘り下げたトレンチである。平成12年と14年の2ヵ年に亘って調査を実施したトレンチであり、平成12年の土層断面と平成14年の土層断面を接合したのが第20図である。この調査区については、主体部との関連も含めて、次の頁で説明したい。

● 重機による削平箇所の調査（第12図参照）

北方の西方から東方にかけての墳麓線を中心に重機によって削平されていたことから、復元を目的として実施した。この箇所は平成元年頃に木材の運搬道として造成された林道であり、この頃はまだ古墳の存在が明らかでなかった時期にあたる。

造成は斜面の山側を削る事によって平坦地を作り出すものであり、流出した土砂が各側に推積していた。そのため流出した土砂を削平された場所に戻す作業から開始したところ、意外にも削平面は少なく、平坦地は以前から存在していたことが明確になった。

これは、重機の排土板が古墳の墳麓線をかすめる形で造成したことがうかがえる状況であった。ただし、2号墳の墳頂で旋回したことから、土砂が多量に谷側へ流出し、突起部を有す平面形態を有するが、本来は方墳であったと推測される。2号墳から更に東南箇所に重機は進行していたが、ほとんど後円部には影響が認められなかった。

② 周溝

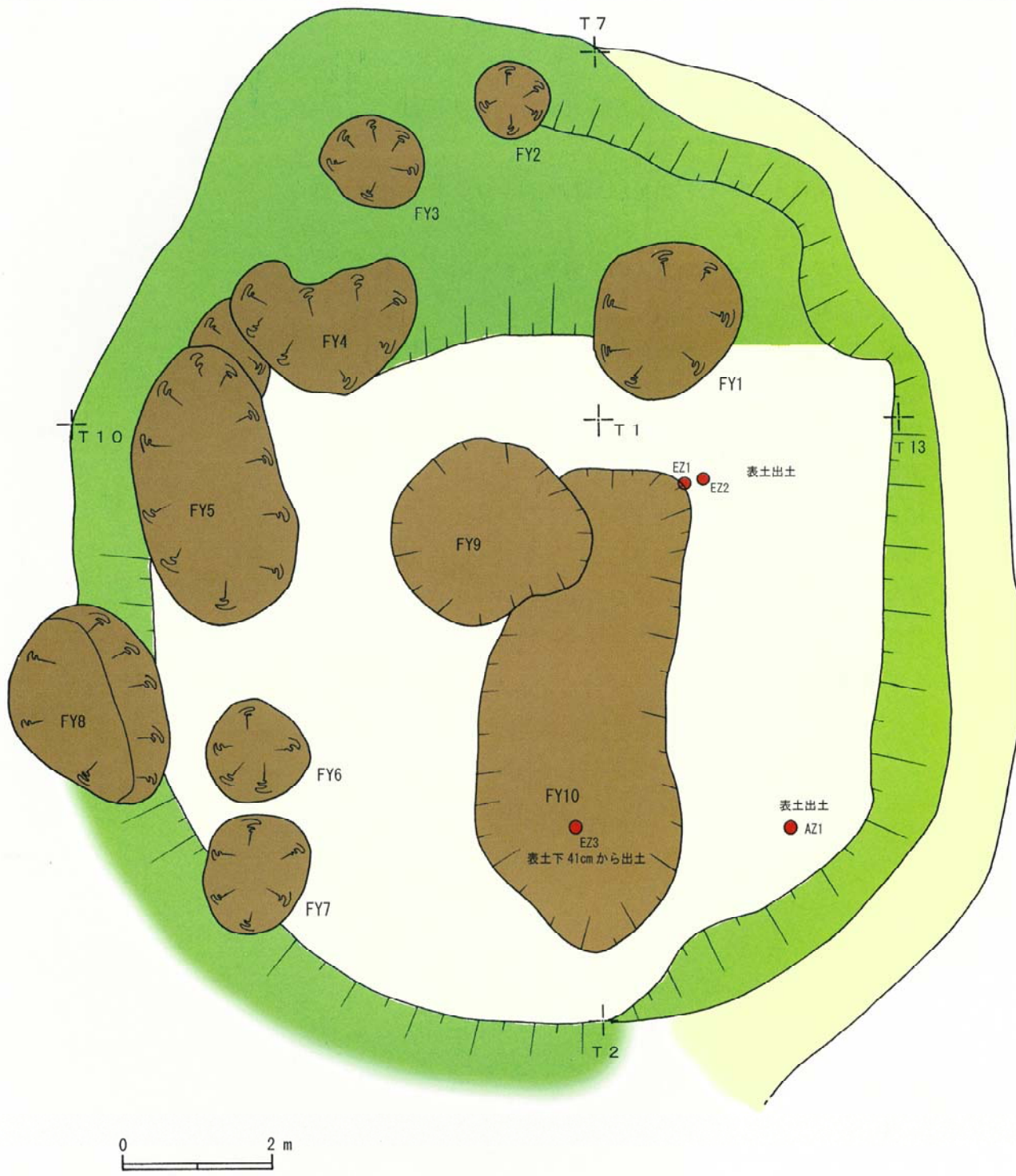
Dトレンチの調査結果から推積土はほとんどなく、構築時の現況を保っているものと考えられる。明瞭な周溝は後円部の南東から前方部の北西端まで巡る。幅は南東部で最大幅12mを測り前方部では3mと狭くなる。下場では8m～2mあり、底面の幅は8m～2mとある。底面は平坦で立木も少ない。

削平によって構築されたと想定され、削平によって生じた土砂は、後円部や前方部の盛土として使用されたと想定される。この周溝は後円部南方部墳麓線辺りがブリッチ状になっているようにも感ぜられる。このブリッチ前方には後円部の緩やかな墳丘斜面が位置し、後円部へ墓道にも思われる景観を呈している。

周溝は前方部に行くに従い狭くなり、前方部西北角で終わっている。但し、ここから後円部にかけての墳麓線に前述した幅約2mの平坦地が続く形態である。周溝が前方部よりも後円部が広がっているのは、後円部に多くの盛土を必要としたことや、後円部をより強調するため等の理由が想像される。

またCトレンチによって確認した溝状遺構は墳麓線に沿ったものであり、注目される。この形態から想定すれば後円部にだけ巡る可能性が高い。

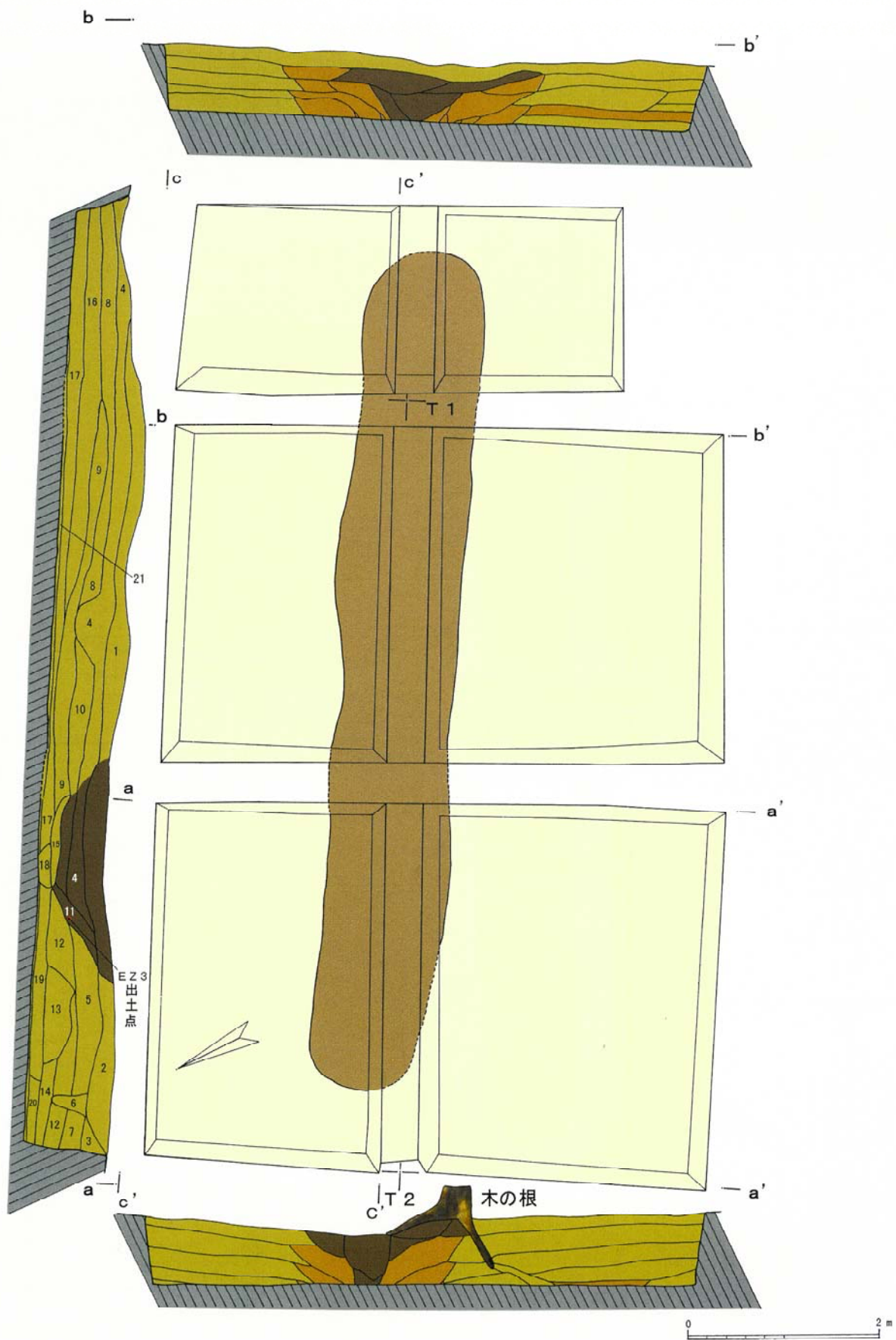
前方部は地形の影響もあるが、前方部端部ではほとんど比高差のない形態を有し、前方部南方にもブリッチがわずかに観察できる。前方部へ通じる墓道と想定されるが明言は避けたい。



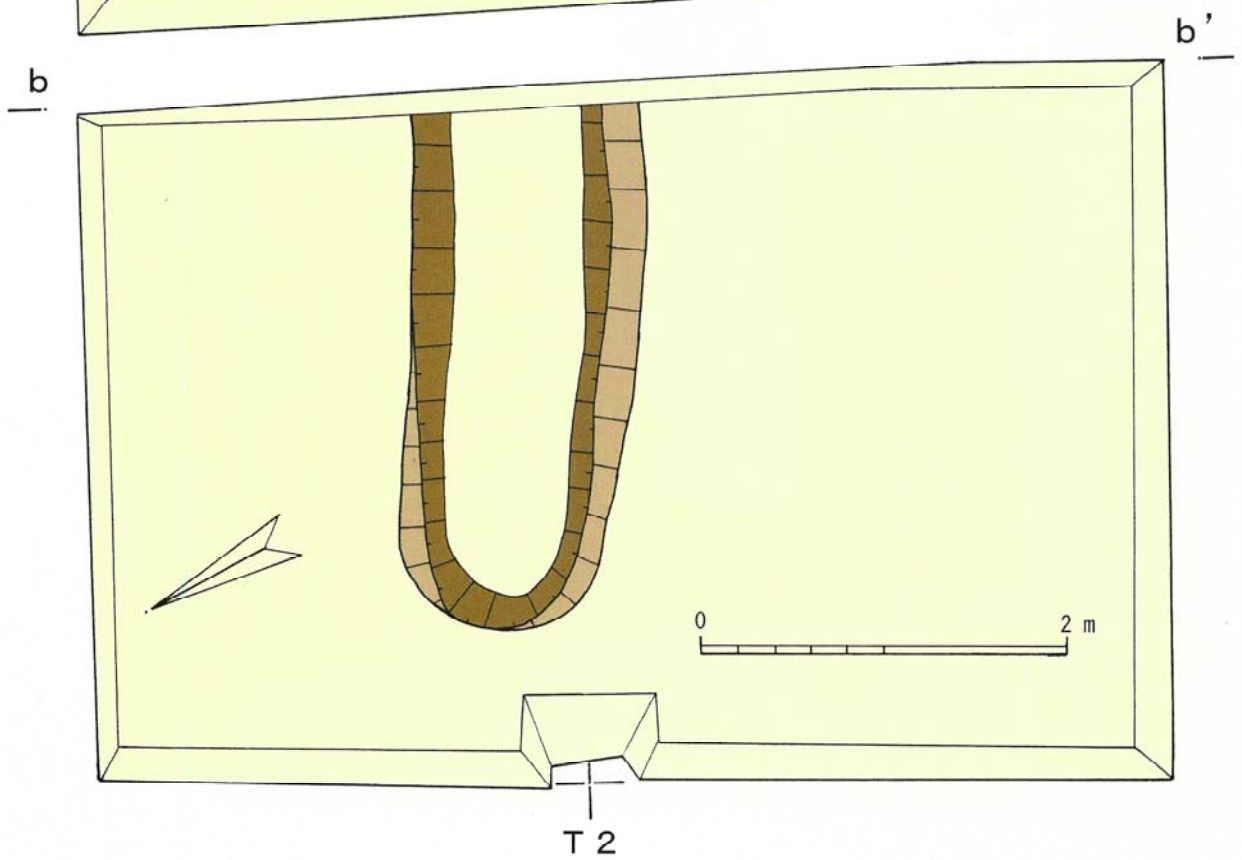
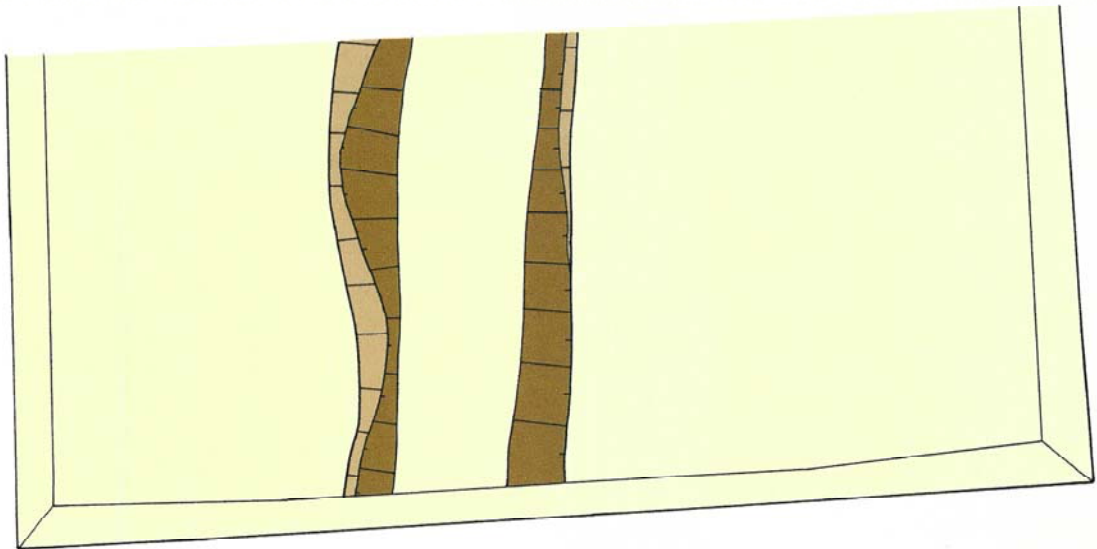
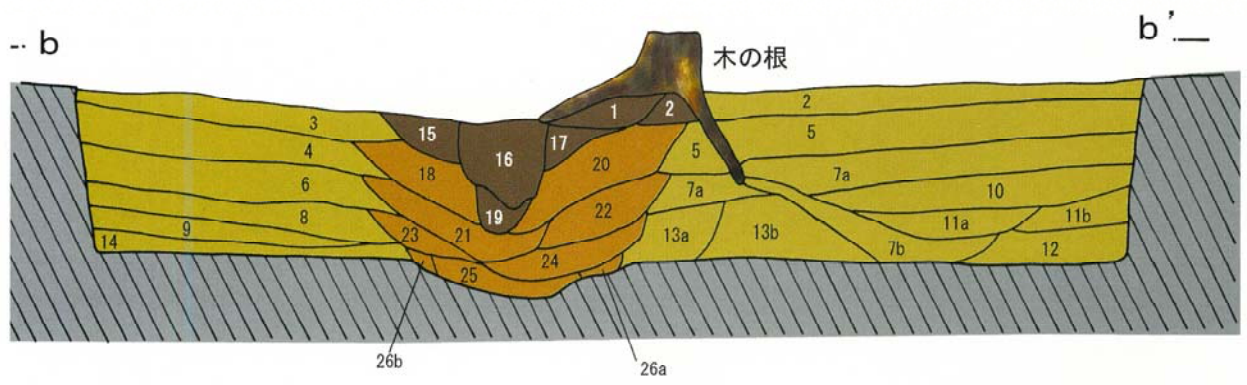
第 16 図 成島古墳群 1 号墳後円部墳頂現況・遺物出土点図

第1表 土色観察表（主体部東西箇所）

- 1 汚れた赤褐色粘質土（しまり強）
- 2 赤褐色粘質土に少量の黒褐色混合（しまり強）
- 3 赤褐色粘質土（しまり強）
- 4 赤褐色粘質土に多量の黒褐色粘質土混合（しまり強）
- 5 赤黄褐色粘質土（しまり強）
- 6 赤黄褐色粘質土に少量の黒褐色粘質土混合（しまり強）
- 7 5と同様（しまり強）
- 8 黄褐色粘質土と赤褐色粘質土の混合（しまり強）
- 9 黄赤褐色粘質土（しまり強）
- 10 赤褐色粘質土に多量の黒褐色粘質土と少量の炭化物混合（しまり強）
- 11 赤褐色粘質土に少量の黒褐色粘質土混合（管玉E Z 3出土層）（しまり中）
- 12 黄赤褐色粘質土（しまり強）
- 13 赤褐色粘質土（パサパサしてしまり強）
- 14 暗赤褐色粘質土（しまり強）
- 15 黄褐色粘質土に多量の黒褐色粘質土、少量の炭化物混合（しまり強）
- 16 黄褐色粘質土に少量の赤褐色粘質土混合（しまり強）
- 17 赤褐色粘質土（白色の小礫をブロック状に、多量に含む（しまり強）



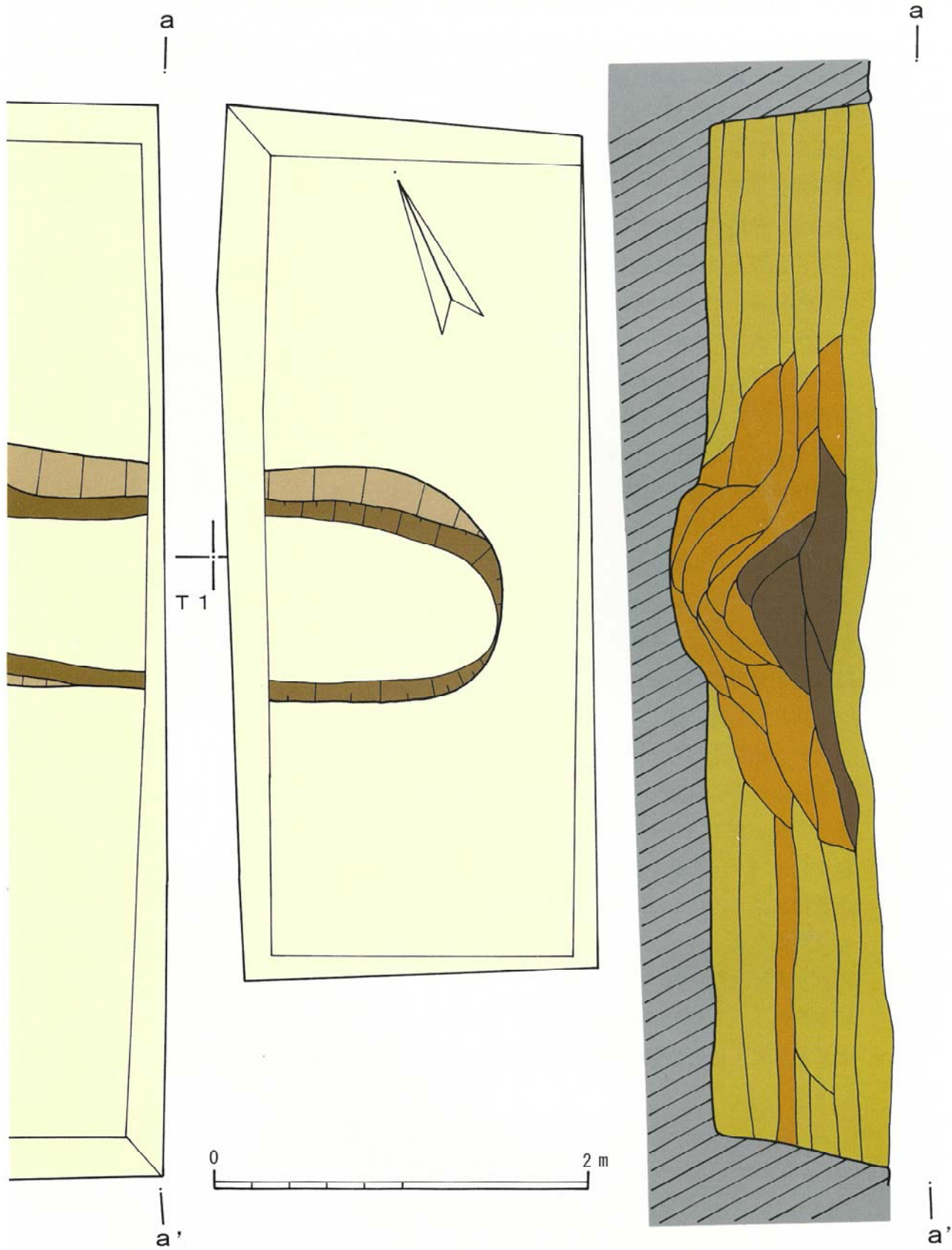
第 17 図 成島古墳群 1 号墳墳丘土層断面図



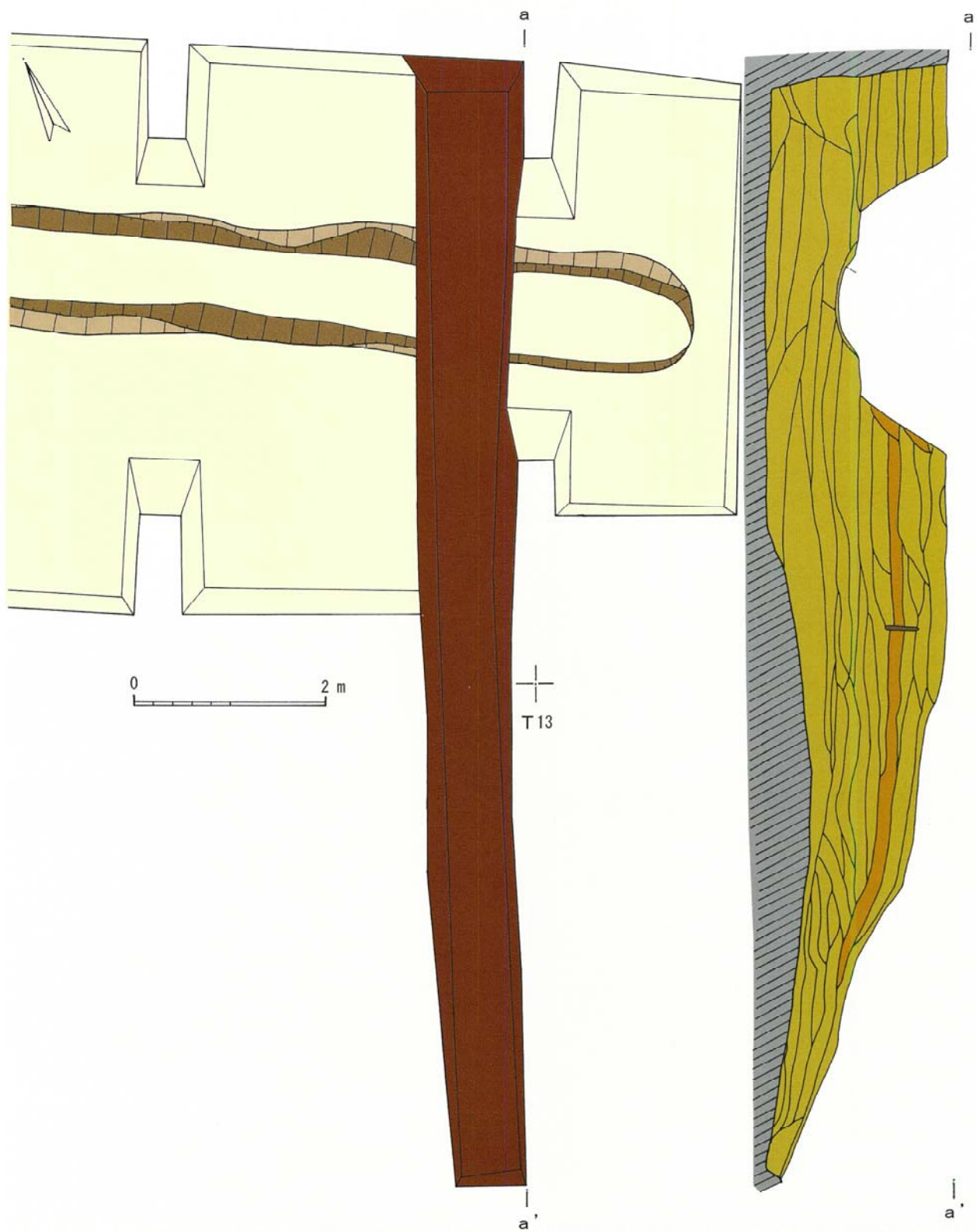
第 18 図 成島古墳群 1 号墳墳丘土層断面図(2)

第2表 土色観察表 (主体部西側・南北箇所)

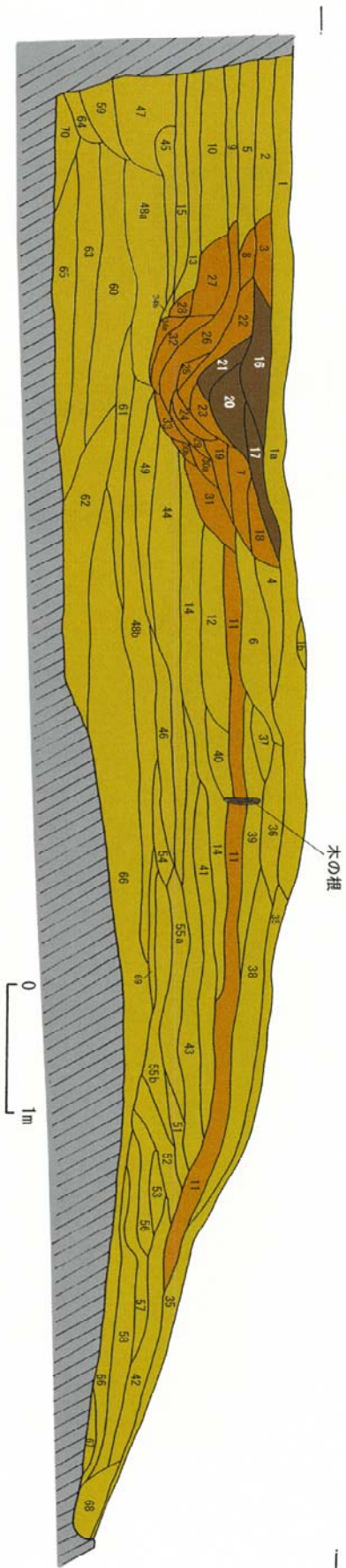
- 1 明赤褐色粘質土に黒褐色粘質土混合 (しまり強)
- 2 少し汚れた赤褐色粘質土 (しまり強)
- 3 暗赤褐色粘質 (しまり強)
- 4 暗赤褐色粘質土 (しまり強)
- 5 赤が強い赤褐色粘質土 (しまり強)
- 6 赤褐色粘質土に白色粘土少量混合 (しまり強)
- 7 a 赤褐色粘質土に小礫と白色粘土少量混合 (しまり強)
- 7 b 青灰色粘質土に少量の赤褐色粘質土混合 (しまり強)
- 8 赤褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合 (しまり強)
- 9 赤褐色粘質土に白色粘土少量混合 (しまり強)
- 10 赤褐色粘質土と褐色粘質土の混合 (しまり強)
- 11 赤褐色粘質土に青灰色粘質土少量混合 (しまり強)
- 12 赤褐色粘質土に微量の青灰色粘質土混合 (しまり強)
- 13 a 青灰色粘質土に黄褐色粘質土少量混合
- 13 b 赤黄褐色粘質土 (しまり強)
- 14 赤黄褐色粘質土 (しまり強)
- 15 暗赤褐色粘質土に少量の黒褐色粘質土混入 (しまり強)
- 16 暗赤褐色粘質土に多量の黒褐色粘質土混入 (しまり中)
- 17 15と同じ (しまり強)
- 18 赤黄褐色粘質土 (しまり強)
- 19 赤褐色粘質土に微量の黒褐色と混入 (しまり強)
- 20 暗赤褐色粘質土 (しまり強)
- 21 赤褐色粘質土 (しまり強)
- 22 赤黄褐色粘質土に少量の黄褐色粘質土混合 (しまり強)
- 23 赤黄褐色粘質土 (しまり強)
- 24 汚れた赤褐色粘質土 (しまり強)
- 25 暗赤褐色土 (木棺設置の最下層) (しまり強)
- 26 a 赤褐色粘質土に白色粘土混合レ版築した土
- 26 b ・25 a と同様 (しまり強)



第 19 図 成島古墳群 1 号墳墳丘土層断面図(3)



第20图 成島古墳群1号墳墳丘土層断面图(4)



第 21 図 成島古墳群 1 号墳墳丘土層断面図(5)E トレンチ

第3表 土色観察表（主体部Eトレンチ）

1	にぶい赤褐色粘質土（表土）（しまり強）	16	黒褐色（腐食土）（しまり弱）
2	明赤褐色粘質土（しまり強）		
3	暗赤褐色粘質土（しまり強）		
4	2と同じ（しまり強）		
5	明赤褐色粘質土に少量の黄褐色混合（しまり強）		
6	黄褐色粘質土に少量の赤褐色粘質土混合（しまり強）		
7	明黄褐色粘質土に少量の赤褐色粘質土混合（しまり強）		
8	暗黄褐色粘質土に少量の白色粘質土・赤褐色粘質土混合（しまり強）		
9	赤褐色粘質土に黄褐色粘質土混合（しまり強）		
10	赤黄褐色粘質土（しまり強）		
11	赤褐色粘質土（しまり強）		
12	赤黄褐色粘質土（しまり強）		
13	黄赤褐色粘質土（しまり強）		
14	赤褐色粘質土と黄褐色粘土質の混入（しまり強）		
15	黄褐色粘質土（しまり強）		
16	赤褐色粘質土に少量の黒褐色土混入（しまり強）		
17	赤褐色粘質土（しまり強）		
18	赤褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合		
19	赤褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合（白色粘土を少量含む）（しまり強）		
20	赤褐色粘質土に多量の黒褐色粘質土混入（炭化物を少量含む）（しまり中）		
21	黄褐色に微量の黒褐色粘質土混入（しまり強）		
22	黄褐色粘質土と少量の赤褐色粘質土の混合土（しまり強）		
23	暗褐色粘質土（微量の炭化物を含む）（しまり中）		
24	黄褐色粘質土に褐色粘質土少量混合（しまり強）		
25	黄褐色粘質土に微量の白色粘質土混合（しまり強）		
26	黄褐色粘質土に白色粘質土が多量混合（しまり強）		
27	黄褐色と赤褐色の混合（版築）粘質土（しまり強）		
28	赤褐色粘質土に白色粘質土混合（版築）（しまり強）		
29	暗黄褐色粘質土に微量の白色粘質土混合（しまり強）		
30	明赤褐色粘質土	30b	赤褐色粘質土（版築）（しまり強）
31	27と同じ		
32	明赤褐色粘質土（しまり強）		
33	明赤褐色粘質土（微量の白色粘質土混入）		
34a	赤褐色粘質土と黄褐色粘質土混合（パサパサしている）	34b	・30bと同じ
35	やや明るい赤褐色粘質土（表土）（しまり強）		

- 36 赤褐色粘質土に少量の黄褐色粘質土混入 (しまり強)
- 37 やや汚れた赤褐色粘質土 (しまり強)
- 38 暗赤褐色粘質土 (しまり強)
- 39 暗黄褐色粘質土 (しまり強)
- 40 暗黄褐色粘質土に少量の赤褐色粘質土混入 (しまり強)
- 41 黄褐色粘質土 (しまり強)
- 42 赤褐色粘質土 (少量の小礫を含む) (しまり中)
- 43 黄褐色粘質土 (しまり強)
- 44 黄褐色粘質土に少量の赤褐色粘質土混合 (しまり強)
- 45 黄褐色粘質土に少量の白色粘質土混合 (しまり強)
- 46 明黄褐色粘質土に少量の赤褐色粘質土混合 (しまり強)
- 47 赤褐色粘質土に黄褐色粘質土少量混入 (しまり強)
- 48 a 白色粘質土に少量の赤褐色粘質土混合
- 48 b 赤褐色粘質土に微量の白色粘質土混合 (しまり強)
- 49 黄褐色粘質土に少量の赤褐色粘質土混合 (しまり強)
- 50 明赤褐色粘土質 (しまり強)
- 51 暗赤褐色粘質土 (しまり強)
- 52 黄褐色粘質土 (しまり強)
- 53 暗黄褐色粘質土 (しまり強)
- 54 黄褐色粘質土 (しまり強)
- 55 a 明赤褐色粘質土 (しまり強) 55 b 赤褐色粘質土 (しまり強)
- 56 やや汚れ黄褐色粘質土 (しまり強)
- 57 赤褐色粘土質 (しまり強)
- 58 黄褐色粘質土 (しまり強)
- 59 暗黄赤褐色粘質土 (しまり強)
- 60 黄褐色粘質土 (しまり強)
- 61 黄褐色粘質土にすじ状に白色粘質土が少量混合 (旧表土) (しまり強)
- 62 明黄褐色粘質土 (旧表土) (しまり強)
- 63 明赤褐色粘質土 (しまり強)
- 64 赤褐色粘質土 (しまり強)
- 65 赤黄褐色粘質土 (しまり強)
- 66 黄褐色粘質土 (旧表土) (しまり弱)
- 67 明赤褐色粘質土 (しまり強)
- 68 赤黄褐色粘質土 (しまり弱)
- 69 暗黄褐色粘質土 (しまり弱)
- 70 明黄褐色粘質土 (しまり中)

③ 主体部（第16～25図参照）

後円部の中央に約6m×10mの調査区を設けた。調査区の表土から第16図で示す箇所から管玉が2点（EZ1・2）を表採した。この管玉は長い年月風雨にさらされたことから白色系に変色していた。墳丘に数箇所点在する採集穴によって偶然掘り出された主体部の副葬品と判断される。

後円部墳頂中央部の主軸方向に沿って墓壙が掘られており、内部に木棺の埋置されていた痕跡が確認された。（図版15参照）

墓壙は2段に掘られており、下部の平面プランは明確であるが上部から掘られた平面プランは土層断面図で南北幅だけを確認した。東西の長軸方向の掘り方は今回の調査区からは確認できなかった。

墓壙の規模は上部の南北幅が約2.7m、東西幅は推測であるが10.1mとなり、もう少し調査区を延長すれば確認できたと反省している。この上部墓壙は第21図で示した土層断面図13、44の層位上面までの深さで0.9mを測る。

下部に構築した墓壙は割竹形木棺を固定するためのものと理解され、幅1.31m、長さ8.78m深さは約20cmの隅丸長方形を呈する。（第17図参照）両方の墓壙とも盛土を掘り込んで構築している。

第21図の28・30bの層位は割竹形木棺の底部及び側面を固定するための版築層と考えられ、固くしまっている。

本来なら上部の墓壙プランも表土直下で確認すべきであり、より慎重に調査を進める重要性を再認識した。

第22図は下部墓壙を底面まで掘り下げた平面図である。埋納された木棺の一部痕跡を西方で確認した。底面に2本の実線で示した箇所であり、幅は0.44mを測るが、土層断面図の観察から木棺の直径は0.75mと推測される。

外線部には幅約20cmで全周する版築層が、土質は第21図で示した28・30bの層位が相当する赤褐色粘質土に白色粘質土混合の版築層である。従って下部の墓壙から、棺の形態を把握することができた。これらによれば、埋納方法は木棺直葬であったと推測される。

粘土を使用しているものの、その役割は棺の固定と棺身と棺蓋の合わせ目の密封被覆（同図層位の27、31）だけである。粘土礫と呼ぶほどのものではなく、木棺直葬の範疇で捉えられる。

棺身部分の推定高すなわち土色断面図で下方に向かう層位（第21図の17、20～27、29、32、33）があり、合計が0.75mになる。墳頂表土から棺底までの深さは棺の中央で1.1mであり、表土から木棺上部までの深さは35cmに過ぎない。木棺の長さを下部墓壙から推測すれば、約8.4mと推測される。

棺の埋設方位はN-63°-Wで墳丘の主軸方向とほぼ一致している。ちなみに墳丘の主軸方向はN-62°-Wであり、1度だけ北にふれているに過ぎない。木棺の覆土は概ね赤褐色を呈する土層によって充填されている。

墓壙内、棺内には第22図で示した地点から遺物が出土している。遺物は副葬品であり、鹿角装鉄剣1点、鉄鏃2点、鉈1点、管玉7点（内2点は墳頂出土）鞍の破片であり、大型の古墳にも関らず極めて少ない出土数である。

遺体の頭位は、遺物の出土位置から判断して、北西部の前方部方向との可能性が高い。

④ 出土遺物

前述した主体部棺内からの出土で占められるが、第25図4・5は墳丘からの出土であり、本来は棺内に埋納されたと理解される。出土状況については図版12を参照願いたい。また地点については、第16図に示した。図示したF Y 1の採集穴による主体部からの移動が有力と考えられる。鹿角装鉄剣、鉄鏃、鉈、管玉、鞞の破片の順で説明したい。なお出土地点について第22図を参照願いたい。

●鹿角装鉄剣（第24図）

刃先を東方に向け棺内の中央、やや東南に位置から出土した小型の鹿角装鉄剣で柶に鏢状の菱形と外反菱形に加工した鹿角装具を装着して漆を施した精巧なもので、柶間に紐を巻いた痕跡と木質部が残っている。剣身部は凸レンズ形をし、全体に鞘木が残っている。長さは残存長で33.5cmを測る。出土状況から埋葬時に置かれた場所と相異はないと推測される。

●鉄族（第25図1・3）

2点出土しており、第25図の1は、棺内の北西箇所底面からの検出であった。木棺の痕跡が認められた地点であり、北西部の棺内中央に配置した副葬品と理解され、出土状況から鹿角装鉄剣と同様に埋葬時と同様な状況と考えられる。

形態は身が薄く、刺逆「腸袂」のある大型の有茎腸袂式である。現存長は11.4cmを測り、茎には矢柄の痕跡を示す木質痕が明瞭に観察された。

第25図3は小型の鑿頭式鏃で現存長は5.7cmを測る。出土地点は第25図で示した木片出土地点の箇所であり、底面から約20cm上面であった。この鉄鏃も茎には矢柄の痕跡を示す木質痕が認められた。

●鉈（第25図2）

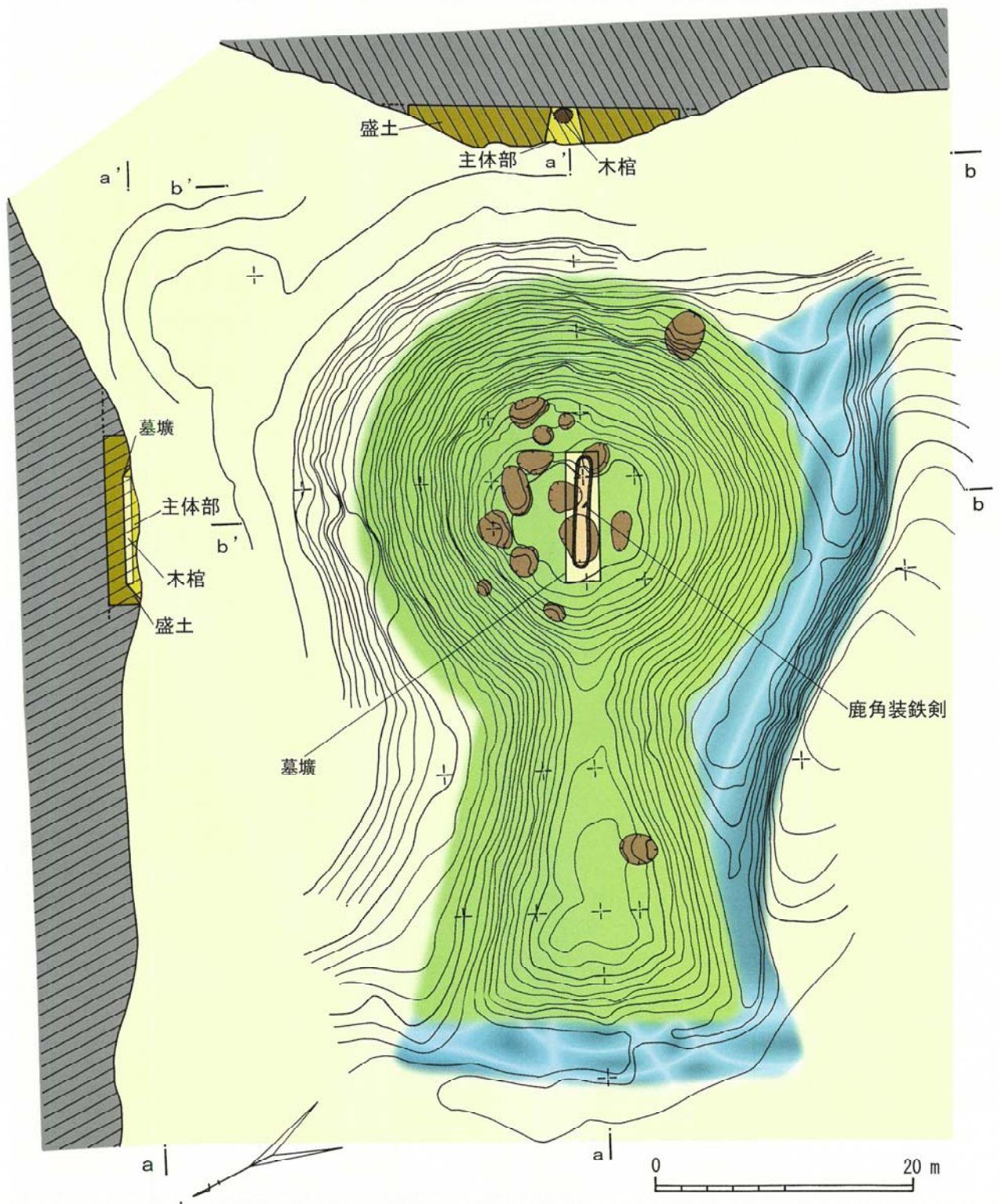
鹿角装鉄剣と並列して出土した。（図版17参照）刃部が中央で折れた状況で検出された。現存長は12.4cmを測る。柄の部分には布の痕跡と認められる。

●管玉（第25図4～10）

総数で7点出土している。最大長を有する第25図6を除き他の6点は2個ずつ、同一の長さに整形されている。同図の4と8・5と5・7と7・9と10の組合せであり、4と8は2cm、5と7は2、6cm、9と10は1.5cmを測る。最長の6は3.5cmある。出土点については第25図に遺物番号で示してあるので参照願いたい。土の中から検出された時点では図版19の様に鮮やかな緑色であった。管玉のX線撮影を実施し、穿孔の形態を作図した。

●鞞（図版16）

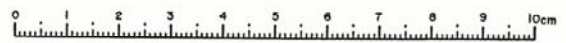
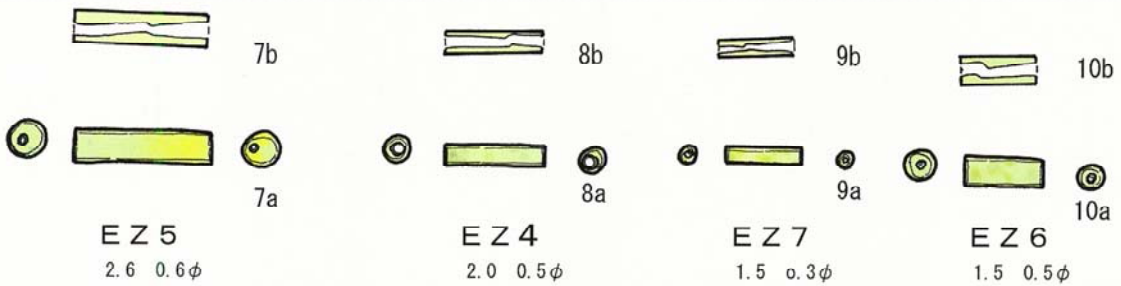
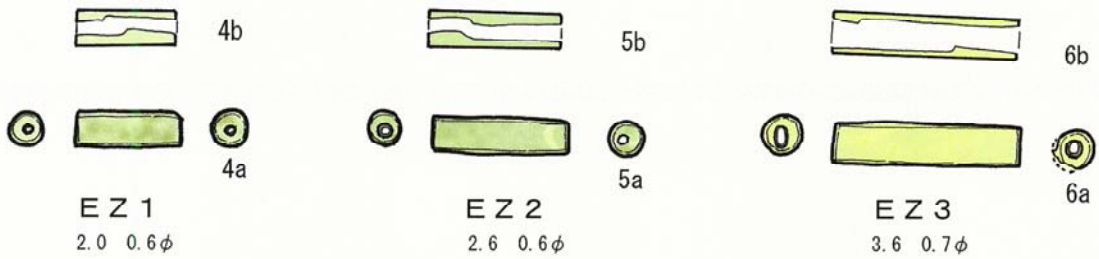
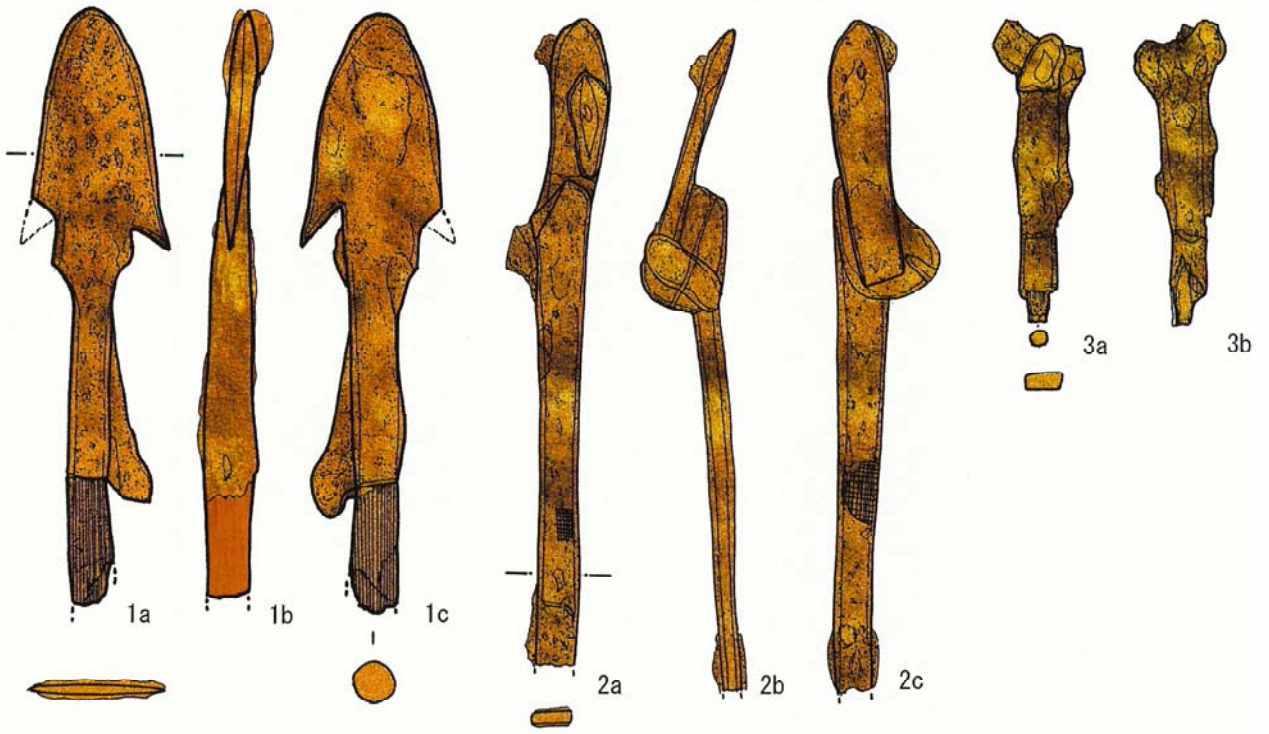
棺内の東方部底面から出た鞞の破片と推測される。他に第22図で示す様に漆塗の木片もあり鞞に関連する遺物と推測される。第25図3の鉄鏃は木片の上面から出土している。



第 23 図 成島古墳群 1 号墳主体部位置図



第 24 図 成島古墳群 1 号墳出土遺物実測図(1)



第 25 图 成島古墳群 1 号墳出土遺物実測図(2)

第4章 成島古墳群の考察

第1節 成島古墳群の成立

成島古墳群の中核をなす成島1号墳は、丘陵の西東部北東墳麓に隣接する12mの方墳2号墳を倍墳にもつ。さらに離れた西側の尾根に沿って3号から6号墳の4基の方墳が分布しており、成島古墳群を形成している。

少し離れて存在する方墳群は、何れも尾根を切断した空間を成形して構築するもので、米沢市横山古墳や川西町雁境塚古墳と類似している。3号墳と4号墳、5号墳と6号墳といったように接近して築くのを特徴とする。未調査の段階で年代を推測することは、難しいことではあるが、立地や古墳の形態を考えると3・4号墳が最初に築かれた後に5・6号墳が構築され、最終的に1・2号墳が成立していったものと推測している。

さらに、成島古墳群が存在する丘陵の西端には、今回の分布調査で発見された京塚古墳群が舌状先端部から山麓にかけて9基分布している。京塚古墳群の中核をなす4号墳は、唯一の無段築成の前方後円墳であり、他の8基の古墳群は、全て円墳となっている。成島古墳群とは、立地や形態に明らかに異質な構成となる。また、古墳群一帯には京塚「経塚」の地名が残っていることや実際に経筒が検出されたとの伝承もあり、特に河岸段丘に存在する7号～9号の3期の古墳については中世塚の可能性も指摘しておきたい。

経塚古墳群の形態と年代については、後で詳しく触れることにする。両者の古墳群については、米沢盆地における古墳の成立と発展に重要な役割を示していたことは間違いない。

1. 成島1号墳の形態

ここでは、置賜地区を中心とする前方後円（方）墳を参考にしながら成島1号墳を中心としながら京塚1号墳についても検討する。成島1号墳は、後円部の直径が32.5m、前方部の長さが26.2m、前方部幅24mの左右対称の前方後円墳であり、後円部のほぼ中央に割竹形木棺が設置してあった。後円部は、戦時中の松根油採掘によって後円部の墳頂上が著しく影響を受けている。移動した土砂を除去し、墳丘の精査により三段構築を示していることが判った。

比較的平坦面を残している北側のくびれ部を基点として測定した計測値は次のようになる。

基部となる一段面は南側を周濠、北側を3m幅の周庭状に整形しながら東側の急斜面に行くに従って自然地形に同化している。二段面は、前方部と直結したもので、約1m前後の段帯が廻っている。三段面は、1.1mの段帯が直径20.2mで後円部に配されている。

最後の墳頂は13.2mで、主軸線の北側よりに埋葬施設が設置してある。高さは、二段と三段

第4表 成島1号墳後円部計測表

後円部					
一段径	32.5 m				
二段径	27.4 m	二段高	2.05 m	二段幅	0.9 m
三段径	20.2 m	三段高	4.01 m	三段幅	1.1 m
墳頂径	13.2 m	墳頂高	5.09 m		

が概ね2m、三段から墳頂までの高さが約半分の1mとなっている。主体部の盛土と各トレンチの状況から想定される後円部の墳丘は、1段と2段部分が地山の削平と整形が中心で、3段部分のみを盛土版築したことになる。県内での三段構築を有する古墳としては南陽市稲荷森古墳がある。

二段構築を有する前方部は、南側と西側に周濠を配し、北側を3m幅の周庭状のテラスが前方部端に接

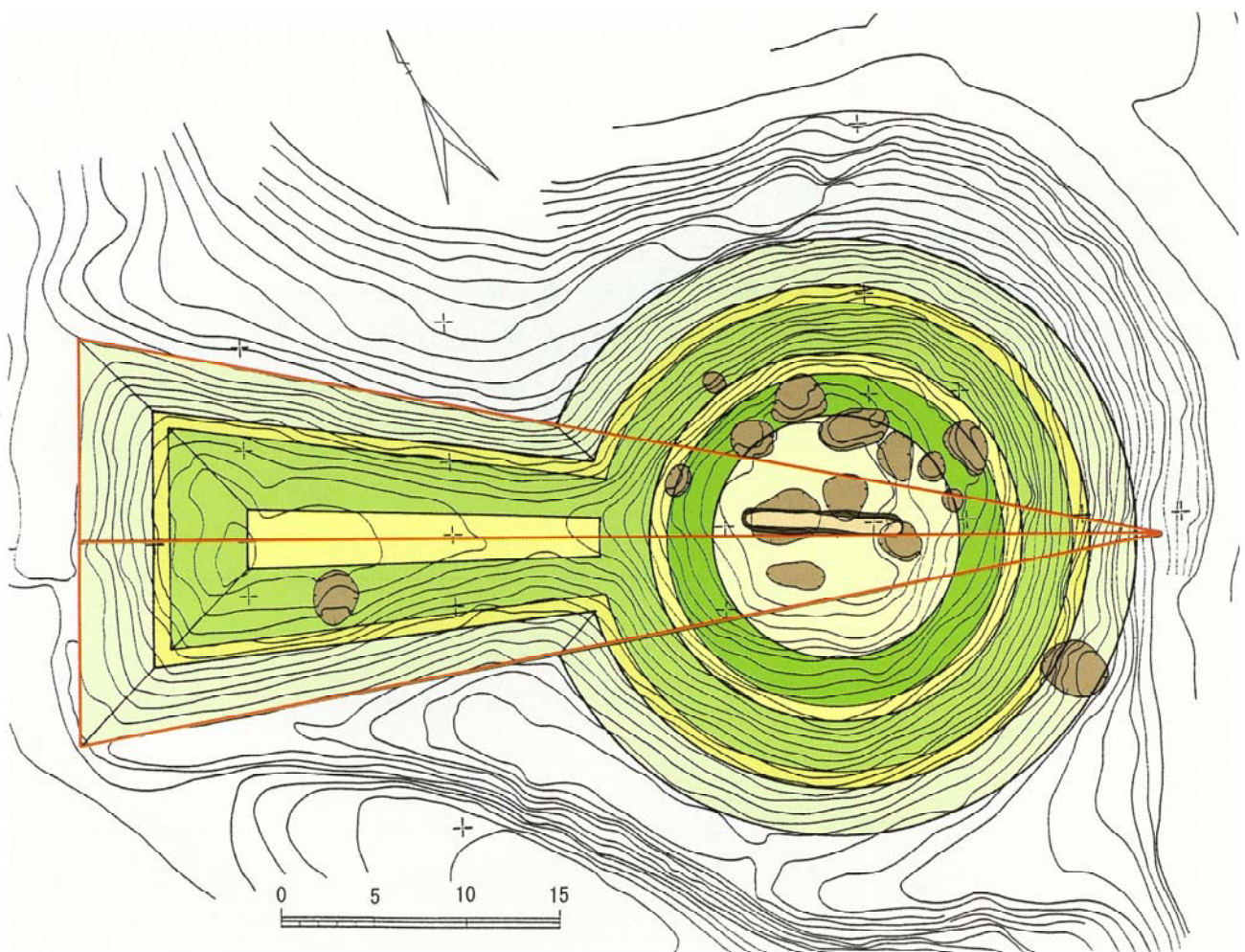
続している。墳頂部は、比較的平坦に整形しており後円部より-1.44m低いのが特徴で、ほぼ直角に近い形の前方長は26.2m、幅22.4mを測る。

墳丘の整形は、一段目が地山の削平で施し、二段目から墳頂を盛土整形で行っている。ちなみに前方部の盛土平均は50cm前後であった。

次に古墳の形態について述べておく。成島1号墳の形状は、これまでに県内で検出されている前方後円墳の仲間では、最も均整のとれている古墳といえる。三段構築の後円部にほぼ直線的に張り出した前方部は、後円部6に対しての前方部は5となっている。県内最大の前方後円墳である南陽市稲荷森古墳や戸塚山139号墳はいずれも6：3となっている。

第5表 成島1号墳後方部計測表

前方部					
一段長	26.2 m	一段幅	22.4 m	—————	
二段長	24.1 m	二段幅	14.1 m	二段高	3.1 m
墳頂長	19.1 m	墳頂幅	3.4 m	墳頂高	3.65 m



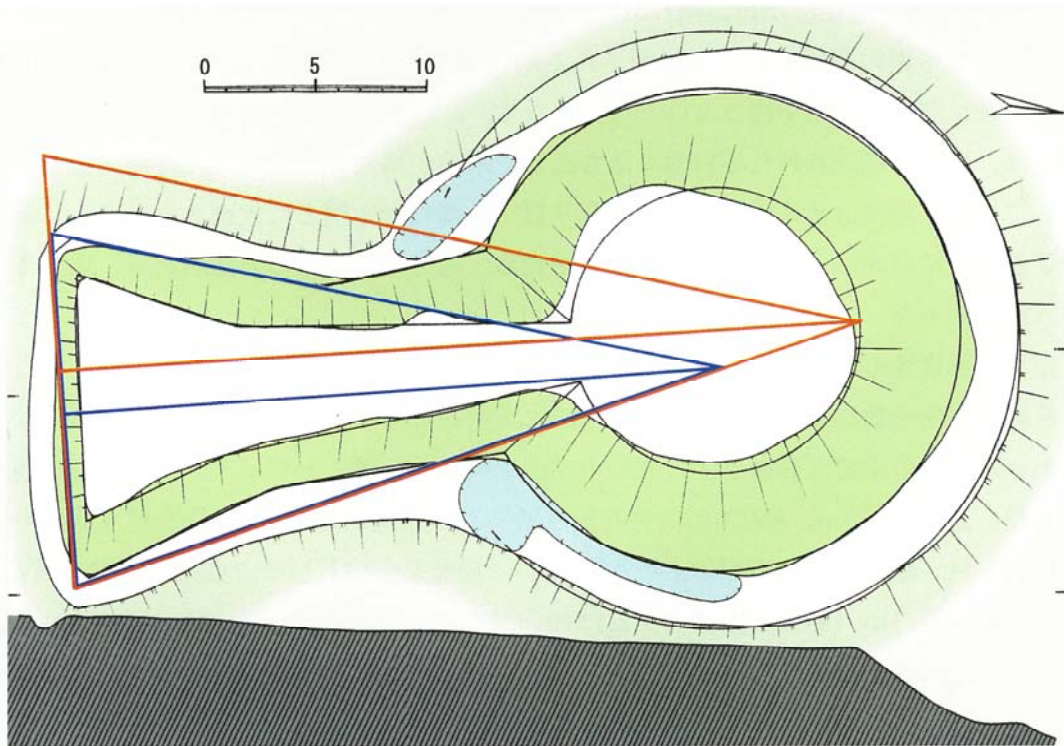
第26図 成島1号墳の古墳企画概念図

前者の稲荷森古墳は、4世紀後半～末の前期古墳と推測されており前方部が未発達で、前方幅の全体の三分の一程度に意図的に狭く構築している。後者の戸塚山139号墳は、5世紀代を代表する中期古墳で、前方幅を四分の一ほど短く構築している。これらの現象は、加藤氏らが提唱する大和政権の政治的な影響下で「規制」を受けた古墳との考え方がある。

2. 京塚4号墳の形態

次に京塚1号墳の形態について分析してみる。前方部が南に開く前方後円墳で、全長が40.4m、後円部の直径が20.7m、前方部の長さ19.7m、前方部の幅が15mと主軸長に対する後円部と前方部の比率が6：6の割合となる。古墳は、自然に傾斜する尾根の一端を切断し、地山を整形したもので、後円部と前方部側面の縁辺部を区画するように約2.5m前後の帯状テラスが存在している。ただし、くびれ部と前方部先端に関しては浅い周濠が認められており、全体的には周庭状のテラスで区画したといったほうが自然である。墳丘は、前方部・後円部ともに無段構築で墳頂部は地形に沿って斜行した平坦面となっている。古墳形態を見る限りでは、成島1号墳は所謂「柄鏡型」を示すのに対し、京塚1号墳は後円部のくびれ部から直進する前方部が外側に開く形状を有する所謂「機内型古墳」の特徴を示している。

第27図の古墳企画概念図は赤で示す三角が前方部の基本形態、青で示す三角が現況形態を表したものである。前者の基本形態に対して現況の形態を重ねると西側の前方部が短いのに気付く。具体的な数字を加えると赤の基本形態が20mとなるのに対し青の現況は15mと5m短縮していることが判る。つまり、当初の理想形態である前方部幅を最終的に全体の五分の一を短縮して構築したことになる。こうした傾向は、既に前述したように稲荷森古墳の三分の一、戸塚山139号墳の四分の一らに共通する。京塚1号墳の事例を加藤氏の提唱するような規制を受けた古墳に該当するかは別にしても、意図的に前方部を短縮した可能性は否定できない。



第27図 京塚4号墳の古墳企画概念図

この点、成島1号墳は左右対象の前方部を呈している。形態的には、合津大塚山古墳に近いものと推測され、稲荷森古墳と併行もしくは先行する前期古墳と考えられる。

参考までに東北地方を代表する会津大塚山古墳と名取雷神山古墳も比較してみると、会津大塚山古墳の場合は6:5、東北最大の古墳として知られる雷神山古墳は、前方部が比較的発達した6:4.5を示している。東北地方の大型古墳の多くは6:3の数値を示すのが多い中での成島1号墳は、前方後円墳の仲間としては最も優美な古墳形態を示しているものといえる。

第6表 主要前方後円墳計測表

単位m

古墳名	主軸長	後円径	後円高	前方長	前方幅	前方高	比率
稲荷森古墳	96	64	9.6	32	32	4.5	6:3
成島1号墳	58.7	32.5	5.1	26.2	22.4	3.65	6:5
戸塚山139号墳	54	36	4.5	18	27	4.2	6:3
京塚1号墳	40.1	20.7	3.5	19.4	15	5	6:6

<参考>

古墳名	主軸長	後円径	後円高	前方長	前方幅	前方高	比率
会津大塚山古墳	114	約70.0	13	55	50	6	6:5
名取雷神山古墳	168	96	12	72	96	6	6:4.5

3. 主体部

成島1号墳の主体部は、後円部の主軸から僅か40cmほど北にずれただけのほぼ中央に存在している。埋葬施設は、墳丘の上部より掘り込んで構築したもので、長さ約10.1m、幅3.7m、深さ0.9mを掘り下げた面に長径8.78m、幅1.31m、深さ1.0mの墓境内に割竹形木棺を直葬したと考えられる。層位と木棺の設置痕跡から推測される割竹形木棺の大きさは、長径8.4m、幅0.75mと想定され、僅か35cmの盛土で覆っていたことになる。

このことは、墳丘で確認された不自然な落ち込みや木棺が腐食して落ち込んだ断面観察の状況とも符号している。木棺は箱式木棺と大木を到り貫いた割竹形木棺とに大別され、さらに墓塘に直接設置する「木棺直葬」と木棺の上部に粘土で固めて棺を覆う粘土の方法がある。成島1号墳は前者の方法であった。

さて、東北・関東地方の前方後円(方)墳から木棺が検出された古墳は第8表で示すように現在のところ約67箇所を数える。この中で、具体的に木棺の形態や木棺計測の可能な古墳になると35箇所であった。この中で、8m以上の大型の木棺を検出した例としては千葉県市原市の親皇塚古墳の「北棺」長径10.75m、幅0.8m(前方後方墳? = 全長60m)。茨城県行方郡玉造町の勅使塚古墳の長径9.1m、幅1m(前方後円塘 = 全長64m)。福島県会津若松市の会津大塚山古墳の「南棺」長径8.4m、幅1.1m(前方後円墳 = 全長114m)と成島1号墳の長径8.4m、幅0.75mらが次ぐ大きさとなり、成島1号墳の木棺は、東北・関東地方の中でも大型の木棺に属することが判る。注目されるのは、埋葬施設の設置が墳丘上から掘り込まれていることで、被葬者が埋葬される生前の段階で古墳製作が既に完了していたことを意味している。

こうした生前の築成は、畿内等の大型古墳のみならずよく知られている例であるが、置賜盆地内における首長墓もある一定の計画性をもって造られていた可能性を示唆している。東北地方では会津大塚古墳が生前築成と推測されている。

ちなみに県内の例としては、小森山61号墳の第1号・第2号棺と小森山98号墳の2古墳がある。参考に前方後円（方）墳以外の古墳では、米沢市横山古墳、天童市衛盛塚古墳、川西町小森山古墳、雁境塚古墳（E-1号）、長井市河合山古墳群がある。

4. 副葬品

出土品の内訳は、鉄剣1点・銚鉄2点・鉈1点・板状鉄製品2点・管玉7点、靱（漆製品）2点であり、成島1号墳が大型木棺であるのに比べ、副葬品の量は以外と少なかった。こういった傾向は、東北地方一般の古墳と共通しているといえる。鉄製品については、会津大塚山古墳の南棺副葬品に全体的に類似している。

鉄剣は、小型の鹿角装剣で、杷元に鏢状の菱形と外反菱形に加工した鹿角装具を装着して漆を施した精巧なもので、杷間に紐を巻いた痕跡と木質部が残っている。剣身部は凸レンズ形をし、全体に鞘木が残っている。古墳時代の鉄剣については、時代の変化とともに剣身が長くなる傾向が指摘されている。短身の剣については槍とする説もあるが、成島1号墳の鉄剣はその領域までは達していない。県内での鹿角装飾を施した鉄剣の例としては、山形市大ノ越古墳出土がある。鉄鏃は、身が薄く刺逆（腸扶）のある大型の有茎腸扶式鏃と小型の鑿頭式鏃の各1点がある。茎にはいずれも矢柄の痕跡を示す木質痕が明瞭に観察される。鉈は、木材の表面加工の仕上げや削具として使用するもので、柄の部分には布の痕跡が認められる。県内の出土例としては、川西町下小松古墳群の小森山61号墳・雁境塚古墳出土が知られている。板状鉄製品には鋸留痕とみられる穿孔が確認される。短甲の一部の可能性もあるが断言はできない。

管玉は地元の緑色凝灰岩（グリンタフ）製によるもので、左右から穿孔して製作されている。同様の管玉は米沢市の上浅川方形周溝墓から検出されている。

第2節 成島古墳群の性格

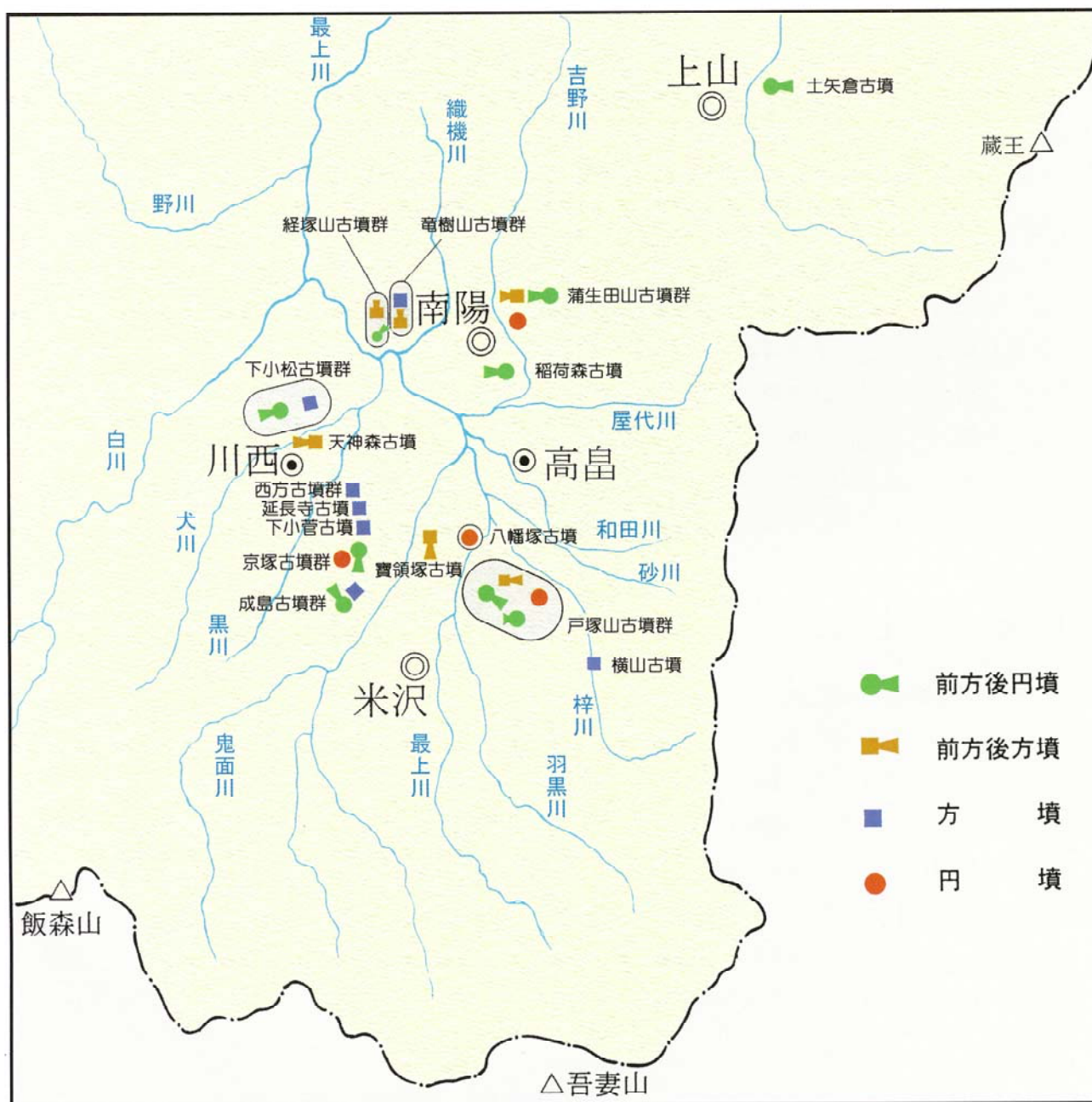
1. 置賜地域の前・中期古墳の分布と特徴

山形県内に存在する前方後円（方）墳は、35基を数える。山辺町と上山市の2基の古墳を除く他は、全て東南置賜地区に集中している。ここでは、置賜地区における古墳の発生と成立について考えてみたい。まず、古墳成立の背景として、一定区域を中心とした豪族や有力者の台頭が古墳成立の基盤にあったと考えている。そして小規模な地域を統括した人物が最初に古墳に埋葬された被葬者である。さらに、小規模な集団を政治的な権力をもって掌握しながら優位に立った人物が畿内の豪族と同盟・服属関係を結び、大規模な古墳を築くのが所謂「首長墓」である。東南置賜地区の主要古墳を分析すると河川を境に分布していることが判る。敢えて細分すれば次のようになる。

- (1) 米沢市の梓川と羽黒川を境とした横山古墳・戸塚山古墳群。
- (2) 米沢市の最上川と鬼面川を境にした範囲に分布する寶領塚古墳・八幡塚古墳。

- (3) 米沢市の鬼面川と川西町の黒川を境にした範囲に分布する成島古墳群・京塚古墳群・下小菅古墳・延長寺古墳・西方古墳群など。
- (4) 川西町の黒川と犬川を境に分布する天神森古墳群。
- (5) 川西町の犬川と白川を境に分布する下小松古墳群。
- (6) 高島町の屋代川と吉野川を境に分布する浦生田山古墳群。
- (7) 南陽市の吉野川と機織川を境に分布する稲荷森古墳。
- (8) 南陽市の機織川と最上川を境に分布する経塚山・竜樹山古墳群。

以上の8河川を境とした範囲を古墳時代の行政区画と直結することは難しいが、いくつかの共通点を見出すことが可能である。これまでに調査された資料を基に検討すれば、置賜地方の古墳成立から首長墓出現までを推測することが可能となる。



第 28 図 置賜地域の前・中期古墳の分布図

第7表 米沢盆地の古墳編年表

年	米沢周辺	川西町周辺	南陽市周辺
200			
300	<ul style="list-style-type: none"> ・ 比呂尼正方形周溝墓 ・ 大清水方形周溝墓 ・ 横山1号・2号 ・ 寶領塚 ・ 京塚古墳群 ・ 成島1・2号 ・ 戸塚山195号 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 雁境塚 ・ 天神森 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経塚山、龍樹山古墳群 ・ 蒲生田山3号、4号 ・ 蒲生田山2号 ・ 稻荷森
400	<ul style="list-style-type: none"> ・ 西方古墳群 ・ 三月在家 ・ 戸塚山182号 ・ 八幡塚 ・ 戸塚山140号 ・ 戸塚山139号 ・ 戸塚山137号 ・ 窪平 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 下小松61号 ・ 下小松98号 ↓ ↓ ↓ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経塚山、龍樹山古墳群 ↓ ↓ ↓
500	<ul style="list-style-type: none"> ・ 戸塚山138号 ・ 戸塚山181号 ・ 窪田 ・ 戸塚山34号 ・ 戸塚山180号 ・ 戸塚山178号 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 松沢1、2号
600	<ul style="list-style-type: none"> ・ 戸塚山189号 ・ 戸塚山175号 ・ 戸塚山74号 ・ 戸塚山43号 ・ 戸塚山59号 ・ 戸塚山群集墳 ↓ ↓ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 天神裏 ・ 長手2号 ・ 木和田 ・ 長手4号 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 蒲生田山1号 ・ 二色根1号 ・ 赤湯古墳群 ↓ ↓
700	<ul style="list-style-type: none"> ↓ ・ 牛森 		

・発生期の古墳（4世紀中葉）

- (1) 米沢市の梓川と羽黒川を境に成立した古墳で、比丘尼正方形周溝墓から発展した集団の一派が最初に構築した古墳となる。横山古墳が最も古い段階の古墳と考えられるが、(3)の地域の下小菅古墳・延長寺古墳・西方古墳群の一部や(8)の経塚山古墳群・竜樹山古墳群の方墳の一部が含まれる可能性もある。

・成立期の古墳（4世紀中葉～4世紀後半）

この段階になると、突然、小高い尾根や舌状丘陵の先端部を選定する小規模な前方後方墳や前方後円墳が米沢盆地の各地域に登場するようになる。

- (1) 米沢市の梓川と羽黒川を境に成立した米沢市の戸塚山古墳群内の戸塚山195号墳など。
- (3) 米沢市の鬼面川と川西町の黒川を境に成立する米沢市の成島古墳群・京塚古墳群・下小菅古墳・延長寺古墳・西方古墳群など。
- (5) 川西町の犬川と白川を境に成立した川西町の下小松古墳群内の雁境古墳など。
- (6) 高島町の屋代川と吉野川を境に成立した南陽市の浦生田山古墳群。
- (8) 南陽市の機織川と最上川を境に成立した南陽市の経塚山古墳群・竜樹山古墳群。

の5箇所の地域に成立した古墳群で、方墳や円墳などの古墳がいずれも共存するといった特徴をもっている。これらの古墳群は、米沢盆地に点在していた豪族や有力者が各地域を集約して優位に立った豪族らの墳墓群とみている。

注目したいのは、経塚古墳群の存在である。この古墳群内で最大規模を誇るのが、全長41.1mの京塚1号墳である。1号墳は、貧弱ながらも6：6の畿内形に類似した前方後円墳であり、同じように前方後方墳として出現する浦生田山3号墳（全長34m）、浦生田山4号墳（全長33m）、経塚山6号墳・竜樹山17号墳（全長30m）、戸塚山195号墳（全長15.5m）、前方後円墳の経塚山2号墳・浦生田山3号墳（全長30m）に比べると一段階大きいのを特徴としている。京塚1号墳をここでは、成立期の古墳の仲間として分類しているが、次の発展期の古墳へ移行する段階で登場した初期首長墓の可能性を考えている。よって、京塚1号墳に関しては、成島古墳群の成立前に築造された公算が強い。さらに、1号墳に先行もしくは後続して構築された円墳群の存在も重要になってくる。これまで検出された置賜地区の4世紀代の古墳群は何れも方墳が中心で、円墳を主体とした京塚古墳群は特異な例となる。

今後は、米沢盆地における古墳の成立を全国的な観点から推測し、初期中央（大和）政権との影響や係りに地域文化の交流など、あらゆる可能性を考慮しながら慎重に検討しなければならないものと考えている。

・発展期の古墳（4世紀後半～4世紀末）

首長墓と呼ばれる大型の古墳が次々と築成されるようになってくる時期である。

(6)と(8)地域を統一したのが稲荷森古墳の被葬者で、(7)南陽市の吉野川と機織川を境にする範囲に県内最大の前方後円墳を築いた。

(5)の地域を中心とする川西町をほぼ支中にし、米沢東部にまで影響を与えていたと推測される首長は川西町の水田地帯に天神森古墳を築いた。

第8表 山形県の前方後円(方)墳一覧表

単位はm

No.	古墳名	所在地	形態	主軸長	後円径(方)	後円高(方)	前方長	前方幅	前方高
1	稲荷森古墳	南陽市大字長丘	前方後円	96.0	64.0	9.6	32.0	32.0	4.8
2	寶領塚古墳	米沢市窪田町窪田	前方後方	(80.0)	40.0	4.8	40.0	(50.0)	—
3	天神森古墳	川西町大字下小松	前方後方	75.6	48.3	4.2	32.5	32.5	3.0
4	成島1号墳	米沢市広幡町成島	前方後円	58.7	32.5	5.1	26.2	22.4	3.65
5	戸塚山139号墳	米沢市大字浅川	前方後円	54.0	36.0	4.5	18.0	24.0	4.0
6	京塚1号墳	米沢市広幡町上小菅	前方後円	41.1	21.7	3.5	19.4	15.0	5.0
7	小森山78号墳	川西町大字下小松	前方後円	35.0	20.0	2.1	9.3	9.2	2.1
8	蒲生田山3号墳	南陽市大字上野	前方後方	34.0	18.0	1m以上	12.0	11.0	1以上
9	蒲生田山4号墳	南陽市大字上野	前方後方	33.0	16.0	1m以上	13.0	11.0	1以上
10	蒲生田山2号墳	南陽市大字上野	前方後円	(30.0)	—	—	—	—	—
11	竜樹山17号墳	南陽市大字梨郷	前方後方	(30.0)	—	—	—	—	—
12	経塚山6号墳	南陽市大字梨郷	前方後方	30.0	19.5	2.3	12.5	10.0	1.2
13	経塚山2号墳	南陽市大字梨郷	前方後円	30.0	16.2	—	—	—	—
14	小森山61号墳	川西町大字下小松	前方後円	28.0	15.0	1.46	11.36	10.3	1.69
15	八幡塚古墳	米沢市窪田町窪田	帆立貝式	27.6	24.0	3.26	3.0	9.0	1.5
16	小森山98号墳	川西町大字下小松	前方後円	26.5	17.5	3.5	12.0	6.5	1.5
17	坊主窪1号墳	山辺町大字大寺	前方後円	26.5	17.5	1.95	9.0	(16.0)	1.05
18	小森山67号墳	川西町大字下小松	前方後円	24.5	13.5	—	11.0	8.0	—
19	京塚山9号墳	南陽市大字梨郷	前方後円	24.0	13.7	—	10.3	—	—
20	戸塚山137号墳	米沢市大字浅川	帆立貝式	24.0	21.0	2.8	3.0	9.0	1.5
21	小森山50号墳	川西町大字下小松	前方後円	23.5	13.0	—	9.5	6.5	—
22	小森山69号墳	川西町大字下小松	前方後円	23.0	13.0	—	8.5	8.0	—
23	小森山75号墳	川西町大字下小松	前方後円	23.0	13.0	—	9.0	10.0	—
24	小森山30号墳	川西町大字下小松	前方後円	22.5	12.3	—	7.5	6.0	—
25	小森山65号墳	川西町大字下小松	前方後円	22.3	14.5	2.1	9.3	9.2	2.1
26	小森山73号墳	川西町大字下小松	前方後円	22.0	13.5	—	8.0	7.0	—
27	小森山100号墳	川西町大字下小松	前方後円	22.0	7.5	3.0	9.0	5.0	2.0
28	小森山58号墳	川西町大字下小松	前方後円	21.5	13.5	—	7.5	5.0	—
29	小森山87号墳	川西町大字下小松	前方後円	21.0	13.0	—	8.0	5.3	—
30	小森山62号墳	川西町大字下小松	前方後円	21.0	13.0	—	6.5	7.0	—
31	小森山53号墳	川西町大字下小松	前方後円	19.5	10.5	—	6.5	7.0	—
32	小森山48号墳	川西町大字下小松	前方後円	17.5	12.3	—	7.5	6.0	—
33	土矢倉2号墳	上山市大字金谷	前方後円	17.0	10.7	(4.0)	7.3	(13.5)	(3.5)
34	戸塚山138号墳	米沢市大字浅川	帆立貝式	15.0	13.5	(1.5)	1.5	6.0	0.75
35	戸塚山195号墳	米沢市大字浅川	前方後方	15.5	9.5	1.5	5.5	9.5	2.0

注＝()の数字は推定長・—は未確認。

(2)の地域の水田に忽然と出現した賓領塚古墳は、(1)の地域を含む米沢市と高島町の一部を掌握した首長墓と考えられる。

(3)の地域を統一した地域には成島1号墳がある。京塚1号墳古墳に後続する古墳として成立したと推測している。ただし、賓領塚古墳と並行関係にあるかは検討の予知がある。上記の大型3古墳が全て平地に築かれていることに対しての矛盾である。編年表では並行する時期を想定しているが、年代的な幅を有している可能性を示唆しておきたい。

このように大型の4古墳は、河川を境に成立した小規模集団を次々と統括し、最も優位に立った前期古墳を代表する首長墓とみられる。

その後、米沢盆地の古墳群は、5世紀に入ると新たな展開を示すようになる。最上川を境とする川西町の下小松古墳群と米沢市の戸塚山古墳群を中心とした東西2大の勢力構図に習合されるようになる。前者の下小松古墳群は、4世紀後半に成立した古墳が5世紀から6世紀にかけて急速に発展する古墳群であり、前期古墳～後期古墳までの約200基の古墳が存在している。

一方、200基以上の古墳が分布する戸塚山古墳群も4世紀末頃に成立し、5世紀後半の段階で首長墓が戸塚山の山頂に忽然と出現する。全長54mの前方後円墳である。その後、戸塚山には次々と古墳が継続して築かれ、7・8世紀を中心とした米沢盆地の終末期古墳の大半が戸塚山古墳群に集約されることになる。

2. 古墳の年代

主体部からの年代を決定する遺物は認められなかった。墳丘の表土からは後世に置かれた可能性のある土師器高杯と土師器壺の破片が出土しているが、古墳の直接的な時期を示すものではない。古墳の形態と大型の木棺からは前期古墳を示唆する要素をもっている。鉄製品は、これまでに述べてきたように前期古墳から検出される武器形態に類似性を有しており、特に、東北地方では唯一、豊富な副葬品で有名な会津大塚山古墳出土の鉄製品に共通する遺物が検出したことは留意すべきと考えている。会津大塚山古墳の年代については、概ね4世紀後半頃と位置付ける研究者が多い。この点だけで成島1号墳の年代を決定することはできないが、古墳の形状や鉄製品の形態を参考に考えてみれば、成島1号墳の築成年代としての上限は4世紀後半から末期頃と現在のところでは推測するのが妥当といえる。ちなみに京塚1号墳は、成島1号墳より古い4世紀後半前後としておきたい。

3. 成島古墳の意義

米沢盆地の古墳成立は、米沢市の横山古墳の調査などで4世紀中頃まで遡ることが判明している。その後、4世紀中葉～4世紀後半に入ると30m前後の小規模な前方後方墳や前方後円墳が山の山頂や尾根に次々と構築されるようになる。南陽市の浦生田山古墳群、経塚山古墳群、竜樹山古墳群、米沢市の戸塚山195号墳、それに京塚古墳群の仲間である。こうした古墳群の成立の背景には、各地域の中において政治力を結集した豪族や有力者が急速に台頭してきたことを物語っている。さらに京塚1号墳の発見で新たな資料を付け加えたことになる。

4世紀の後半から4世紀の末頃に入ると地域の首長墓と呼ばれる大型の古墳が次々と築成されるようになってくる。これらは、南陽市の稲荷森古墳、米沢市の成島1号墳、川西町の天神森古墳、米沢市の賓領塚古墳の4古墳であり、前期古墳を代表する首長墓とみられている。

当初、これらの首長墓は、単一な米沢盆地の時代変遷の中で成立した首長系譜とみる考え方もあったが、ある一定の地域区分の中で独自に発展成立したとする説が主流である。古墳編年参照。今回の調査で確認した成島1号墳は、将来の被葬者となる首長が、生前の段階で古墳造りを開始していたことを証明するもので、首長らは自らの指導力や支配権を行使して計画的に古墳を築造していたといえる。

その背景には、畿内等の陵墓や首長墓と同様に自らの指導力を生前段階で誇示する狙いがあったものと推測される。一方、地域の大型古墳の存在には、大和政権との係りが常に指摘される古墳形態や副葬品からの分析で、大和政権の影響・同盟・服属・服従といった表現が多いのも事実である。

しかし、地方の大型古墳のすべてが大和政権の影響下で成立したとする前提から脱却し、地域性や地域独自の古墳文化の発達を前線にした中で、他の地域との係りや大和政権との係りを研究する段階にきているものともいえる。米沢盆地を中心とする地域には、大型の前方後円墳や後方墳、その前後の小型の古墳等、他の地域とは異なる発達を示しており、今回の成島1号墳は、今後の古墳文化の究明に重要な資料を提供したといえる。

参考文献

- 1 西村真二 1938 「置賜盆地の古代文化」『東置賜郡史』(上巻)
- 2 柏倉亮吉 1953 『山形県の古墳』「山形県文化財調査報告書 第4輯」山形県教育委員会
- 3 川崎利夫 1964 『辺境における古墳文化の特質』『日本考古学の諸課題』
- 4 会津若松史出版委員会編 1964 「会津大塚山古墳」『会津若松史』別巻1 会津若松市
- 5 柏倉亮吉・武田好吉・小野忍 1969 『土矢倉古墳群発掘調査』上山市教育委員会
- 6 伊東信雄・伊藤玄三 「会津大塚山古墳」『会津若松市 別巻1』会津若松市
- 7 加藤 稔 1973 「最上川流域における古墳文化の展開」『最上川流域の歴史と文化』工藤定雄教授還暦記念論文集
- 8 柏倉亮吉他 1976 「牛森古墳」『米沢市八幡原工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書第2集』米沢市教育委員会
- 9 川崎利夫 1977 「出羽地域における古分の成立」『考古学研究第24巻2号』考古学研究会
- 10 佐藤鎮雄・保角里志 1979 「稲荷森古墳」『昭和53年度調査概報』山形県立博物館
- 11 佐藤鎮雄 1982 「置賜地方の古墳-南陽市周辺の古墳をみる中心として-」『まんぎり創刊号』まんぎり会
- 12 手塚孝・菊地政信 1983 『八幡堂遺跡発掘調査報告書』「米沢市埋蔵文化財報告書 第8集」米沢市教育委員会
- 13 加藤稔・手塚孝 1983 『戸塚山137号墳』「米沢市埋蔵文化財調査報告書 第9集」米沢市教育委員会
- 14 藤田宥宣他 1984 『分布調査報告書』「川西町埋蔵文化財調査報告書 第7集」川西町教育委員会
- 15 川崎利夫 1985 「最上川流域における古墳文化の生成と展開」『流域の地方史』
- 16 手塚 孝 1985 『米沢の古代文化』まんぎり会
- 17 加藤稔・藤田宥宣 1986 『天神森古墳発掘調査報告書』「川西町埋蔵文化財調査報告書 第9集」川西町教育委員会
- 18 手塚孝・菊地政信 1986 『大清水遺跡発掘調査報告書』「米沢市埋蔵文化財調査報告書 第17集」米沢市教育委員会

- 19 藤田宥宣他 1986 『下小松墳丘群小森山支群 第61・64号墳調査報告書』「川西町埋蔵文化財調査報告書 第10集」川西町教育委員会
- 20 藤田宥宣他 1986 『下小松墳丘群鷹待場支群 第105・106・186号墳調査報告書』「川西町埋蔵文化財調査報告書 第11集」川西町教育委員会
- 21 藤田宥宣他 1986 『下小松墳丘群小森山支群 第65号前方後円墳調査報告書』「川西町埋蔵文化財調査報告書 第13集」川西町教育委員会
- 22 加藤稔他 1987 『菅沢2号墳の発掘調査』山形市教育委員会
- 23 手塚 孝 1988 『比丘尼平遺跡発掘調査報告書』「米沢市埋蔵文化財調査報告書 第21集」米沢市教育委員会
- 24 川崎利夫 1988 「山形南半における終末期古墳の様相」『山形考古 第4巻第2号』山形考古会
- 25 藤田宥宣他 1988 『下小松墳丘群葉師沢支群 第143・145号墳調査報告書』「川西町埋蔵文化財調査報告書 第12集」川西町教育委員会
- 26 手塚 孝 1989 <八幡塚古墳の発掘調査> 『遺跡詳細分布調査報告書 第2集』「米沢市埋蔵文化財調査報告書 第25集」米沢市教育委員会
- 27 手塚孝他 1989 『戸塚山古墳群詳細分布調査報告書』「米沢市埋蔵文化財調査報告書 第10集」米沢市教育委員会
- 28 古野一郎・茨城光裕 1989 『稲荷森古墳発掘調査報告書』「南陽市埋蔵文化財調査報告書 第4集」南陽市教育委員会
- 29 加藤稔他 1989 『菅沢2号墳発掘調査報告書』山形市教育委員会
- 30 加藤稔他 1989 『坊主窪1号墳予備調査報告書』「山辺町埋蔵文化財調査報告書2」山辺町教育委員会
- 31 手塚 孝 1990 <寶領塚古墳の発掘調査> 『遺跡詳細分布調査報告書 第3集』「米沢市埋蔵文化財調査報告書 第27集」米沢市教育委員会
- 32 国学院大学 1990 『河井山遺跡群学術調査報告書』国学院大学考古学資料館
- 33 国学院大学『河井山遺跡群第1号墳学術調査報告』「国学院大学考古学資料館紀要6」河井山遺跡学術調査団
- 34 手塚孝他 1991 『寶領塚古墳の発掘調査報告書』「米沢市埋蔵文化財調査報告書 第31集」米沢市教育委員会
- 35 吉田博行ほか 1991 「杵ガ森古墳・稲荷塚遺跡」『坂下西第一土地区画整理事業坂下西第一地区発掘調査概報』会津坂下町文化財調査報告書第22集 会津坂下町教育委員会
- 36 手塚 孝 1992 <成島古墳群の発掘調査> 『遺跡分布調査報告書 第5集』『米沢市埋蔵文化財調査報告書 第32集』米沢市教育委員会
- 37 加藤 稔 1994 『地方の概要 出羽 前方後円墳集成』東北関東編
- 38 菊地芳朗 1994 「会津大塚山古墳南棺出土の靱」『福島県立博物館紀要第8号』福島県立博物館
- 39 吉田博行 1995 『杵ガ森古墳発掘調査報告書』「会津坂下町文化財調査報告書第33集」会津坂下町教育委員会
- 40 高橋千晶 1995 「置賜地方の切石石室-石室構造の観点から-」『山形考古第5巻3号』山形考古学会
- 41 茨城光裕 1997 『大塚天神古墳第1次調査』「山辺町埋蔵文化財調査報告書2」山辺町教育委員会
- 42 手塚孝・菊地政信 1998 <木和田古墳の発掘調査> 『遺跡詳細分布調査報告書 第11集』「米沢市文化財調査報告書 第61集」米沢市教育委員会
- 43 井田秀和他 1998 『安久津古墳群の発掘調査』「高島町埋蔵文化財調査報告書 第6集」高島町教育委員会
- 44 手塚孝・菊地政信 1999 <天神裏・長手古墳群の発掘調査> 『遺跡詳細分布調査報告書 第12集』「米沢市埋蔵文化財調査報告書 第65集」米沢市教育委員会
- 45 茨城光裕 1999 『大塚天神古墳第2次調査概報』「山辺町埋蔵文化財調査報告書2」山辺町教育委員会

第9表 東北・関東地方木棺検出古墳一覽表

No.	古墳名	所在地	古墳形態・規模	年代	木棺形態・規模	副葬品	備考
1	遠見塚古墳	宮城県仙台市若林区遠見塚	・前方後円墳 (前方部1段・後円部2段) 全長110 m 後円径63 m, 高6.4 m 前方長47 m, 高2.4 m	4世紀中	「東柳」割竹形木棺 長径(?)・短径1.15 m 「西柳」割竹形木棺 残存部幅1.10 m	硬玉管玉1点, ガラス小玉4点, 縦櫛20点	粘土櫛 粘土櫛
2	小森山61号墳	山形県東置賜郡川西町大字下小松字小森山	・前方後円墳 全長25.5 m 後円径15.0 m, 高1.64 m, 頂径9.8 m 前方幅10.3 m, 長径11.36 m, 高1.69 m 〈C/F〉幅6.82 m, 後前高差-1 m	6世紀前	「第1号木棺 (粘土床)」 木棺 (割竹形分) 墓竈長1.90 m, 深0.55 m, 幅0.6 m 「第2号木棺 (粘土床)」 木棺 (割竹形分) 墓竈長2.59 m, 深0.5 m, 幅0.5 m	「第1号棺」 環状鉄製品1点 (耳飾か), 直刀1点, 広身式 鐵3点, 刀子1点 「第2号棺」 広身式鐵1点, 鈍1点, 刀子1点	
3	小森山98号墳	山形県東置賜郡川西町大字下小松字小森山	・前方後円墳 (前方部1段?・後円部2段?) 全長26.5 m 後円径17.5 m, 高3.5 m, 頂径12 m 前方幅6.5 m, 長径12 m, 高1.5 m 〈C/F〉幅6 m, 後前高差-2 m	6世紀中	割竹形木棺直葬 長径6.2 m	軆 (木製) 部分, 土師器埴 (内黒・鬼高式並行)	
4	E-1号墳 (旧雁境)	山形県東置賜郡川西町大字下小松字龜ヶ沢	・円墳 全長 (南北) 12.0 m, 高0.9 m	4世紀末	木棺直葬 長2.85 m以上 幅1.35 m	鈍, 鉄製品	
5	横山古墳	山形県米沢市大字木和田字横山	・方墳 全長13.5 m, 幅13 m	4世紀中	「第1号」木棺直葬 長径4.7 m 幅0.85~1.3 m 「第2号」木棺直葬 長径3.3 m 幅0.55 m 「第3号」箱型木棺 長径4.2 m 幅0.6 m	「第1号」 埴3点 「第2号」 管玉1点 「第3号」 土師器片	
6	成島1号墳	山形県米沢市広幡町成島字六日在家山	・前方後円墳 全長36.5 m 後円径東辺17.6×北辺21 m, 高3.30 m, 頂径東西10.1×南北6.4 m 前方幅現在8.5 m, 長径14.0 m, 高1.27 m 〈C/F〉幅6.6 m, 後前高差-2.03 m	4世紀後 ~末	割竹形木棺 長8.4 m 幅0.75 m	鹿角裝飾1点, 柳葉式鐵1点, 鬚頭式鐵1点, 緑色凝灰岩製管玉7点, 板状鉄製品2点, 軆 (漆製品)2点	
7	本屋敷1号墳	福島県双葉郡浪江町大字北幾世橋字伊織垣	・前方後円墳 全長36.5 m 後円径東辺17.6×北辺21 m, 高3.30 m, 頂径東西10.1×南北6.4 m 前方幅現在8.5 m, 長径14.0 m, 高1.27 m 〈C/F〉幅6.6 m, 後前高差-2.03 m	4世紀前	「後方部主体」 割竹形木棺 長径7.26 m 中央幅0.9 m		
8	会津大塚山古墳	福島県会津若松市一貫町大字八幡字大家	・前方後円墳 (前方部2段・後円部2段) 全長114 m 後円径約70 m, 高13 m, 頂径24 m 前方幅約50 m, 長径55 m, 高6 m 〈C/F〉幅32 m前後, 後前高差-6 m	4世紀中 ~後	「南棺」 割竹形木棺 長径8.4 m, 高0.4~0.5 m 幅1.1 m 「北棺」 割竹形木棺 長径約6.5 m, 高1 m程度 (蓋含) 幅約1 m	「南棺」 仿一三角縁唐草文帯山三神二獻鏡1点, 菱形 四獻鏡1点, 硬玉勾玉1点, 碧玉管玉79点ガ ラス小玉61点, ガラス小玉破片31点, 琥珀算盤玉 2点, 堅櫛2点, 鉄剣7点, 三葉環頭大刀1点, 直刀1点, 小刀1点, 柳葉式鐵27点, 定角式鐵 11点, 鬚頭式鐵9点, 銅鏡29点, 軆1点, 斧 4点, 脚又は鍔先1点, 鈍3点, 刀子2点, 棒 状鉄器3点, 砥石1点, 石片1点, 台石1点 「北棺」 仿一葉文鏡, 碧玉管玉40点, 碧玉製鈎鎌車1点, 鉄剣5点, 直刀1点, 柳葉式鐵5点, 無著長 三角式鐵 (逆刺付) 36点, 銅鏡4点, 軆殘片, 斧2点, 刀子1点	

No	古墳名	所在地	古墳形態・規模	年代	木棺形態・規模	副葬品	備考
9	田村山古墳	福島県北会津郡北会津村大字和合字塚の越	・前方後円墳(帆立貝型) 墳長 26 m	5世紀中	木棺の可能性有	仿一小型内行花文鏡1点, 不明一小型内行花文鏡1点, 鉄剣1点(残欠), 鉄刀1点(残欠), 刀子1点(残欠)	
10	山谷古墳	新潟県西蒲原郡巻町福井字山谷	・前方後円墳 全長 36.97 m 後方辺幅 22.9 m×縦 24.7 m 頂辺幅 14.5 m×幅 9.5 m 前方幅 16.3 m, 長径 12.27 m, 高 2.3 m 後前高差 - 1.0 m	4世紀前	割竹形木棺(直葬) 長径 4.8 m 高 0.5 ~ 0.6 m 幅 1.14 ~ 1.44 m	碧玉管玉7点, ガラス小玉34点, 鑿伏鉄器1点	
11	鏡塚古墳	茨城県真茨城郡大洗町磯浜町日下字日下塚	・前方後円墳 全長 105.5 m 後円径 60 m, 高 12 m 前方幅 35 m, 長径 45.5 m, 高 4.5 m	4世紀末	木棺(繪) 長径 8.95 m, 幅 3.5 m	仿一菱形四獣鏡1点, 内行六花文鏡1点, 碧玉管玉23点, 管玉4点, 滑石白玉 3989点以上, ガラス小玉47点, ヒスイ小玉47点, ヒスイ勾玉5点, 櫛十数枚, 石製織造品(鈔)6点, 短冊形斧2点, 鋤1点, 手斧16点, 直刃鎌2点, 鏡1点, 鑿1点, 刀子10点, 紡錘車11点, 立花形1点, 勾玉2点), 直刀1点, 鎌1点, 鉤1点	粘土槨
12	コロニ号墳	茨城県東茨城郡内原町杉崎	・前方後円墳 全長 30 m 後円径 23 m, 高 3.25 m 前方幅 15 m, 長径 7 m, 高 1 m	5世紀中	木棺 長径 3.5 m, 幅 0.6 m	刀子1点, 杯, 碗2点, 杯蓋1点, 杯身	
13	コロニ号墳(狐塚)	茨城県東茨城郡内原町杉崎	・前方後円墳 全長 30.1 m 後円径 24.5 m, 高 3 m, 頂径 10 m 前方幅 11.2 m, 長径 7 m, 高 1 m	5世紀中	割竹形木棺 長径 3.7 m, 幅 0.5 m	刀子1点, 碗5点	
14	勸使塚古墳	茨城県行方郡玉造町沖州字下組	・前方後方墳 全長 64 m 後方辺 30 m, 高 8 m 前方幅 18 m, 長径 34 m, 高 5 m, 後前高差 - 3 m	4世紀中	木棺(直葬) 長径 9.1 m, 幅 1 m	仿一重圓文鏡1点, ガラス小玉40点, 蛇文岩管玉10点, 鉄剣1点	
15	佐久2号墳(佐自塚)	茨城県新治郡八郷町佐久字佐自塚	・前方後方墳 全長 58 m 後円径 35 m, 高 6 m 前方幅 27 m, 高 4.3 m, 後前高差 - 1.7 m	4世紀後	木棺 長径 6.2 m, 深 0.7 m, 幅 1 m	硬玉勾玉2点, 碧玉蛇文岩管玉20点, ガラス小玉8点, 竹櫛1点, 刀子1点	粘土槨
16	丸山1号墳	茨城県新治郡八郷町柿岡字高友	・前方後方墳 全長 55 m 後方辺 34 × 30 m, 高 6 m 前方幅 18 m (22 m), 高 4 m, 後前高差 - 2 m	4世紀後	木棺(直葬) 長径 4.5 m, 幅 0.75 m	仿一内行花文鏡1点, 滑石丸玉1点, メノウ勾玉9点, 碧玉管玉95点, ガラス丸玉138点, 琥珀玉1点(?), 鉄剣6点, 鉄刀3点, 銅鏡4点, 刀子1点	
17	桜山古墳	茨城県龍ヶ崎市長峰町字才ノ谷	・前方後円墳 全長 71.2 m 後円径 38.8 m, 高 8.9 m 前方幅 30.6 m, 長径 32.4 m, 高 3.6 m	4世紀後	割竹形木棺? 法長径 8.3 m, 幅 1.3 m	蛇文岩管玉42点, 輝綠岩管玉1点, 流文岩管玉6点, 鉄剣2点, 大刀1点, 柳葉式鎌3点, 刀子1点, 鉤1点	粘土槨

No.	古墳名	所在地	古墳形態・規模	年代	木棺形態・規模	副葬品	備考
18	山木古墳	茨城県つくば市北条字山水	・前方後円墳(前方部1段・後円部2段) 全長48m 後円径25.5m, 高3.5m 前方長22.5m, 前方幅15.5m, 高2m 後前高差-1.5m	4世紀後	木棺 長さ3.2m, 幅0.7m	碧玉管玉10点, 滑石勾玉1点, ガラス丸玉1点, ガラス小玉1点, 鉄剣1点	粘土槨
19	北条桜塚古墳 (小和田1号墳)	茨城県つくば市北条字甲山	・前方後方墳 全長30m 後方辺22m	4世紀後	割竹形木棺 法長径6.74m, 幅0.5~0.8m 深さ0.4m	仿一四獣鏡1点, ガラス小玉29点, メノウ勾玉 1点, 縹織履灰岩管玉50点, 琥珀丸玉2点, 石釧1点, 編物1点	粘土槨
20	那須八幡塚古墳	栃木県那須郡小川町大字吉田字八幡	・前方後方墳 全長約68m? 後方辺約34m, 高約6.3m 頂辺6×10m, くびれ幅15m	4世紀中	木棺(種類不明) 全長(推定)6.55m	中国一き鳳鏡1点, 鉄剣1点, 鎌(直刀)1点 鋸1点, 鉤4点以上, 間透1点, けずり小刀3点, 有袋鉄斧1点, 小斧2点, 土師器埴輪(五領式?)	
21	駒形大塚古墳	栃木県那須郡小川町大字三輪字駒形	・前方後方墳 全長推定64m 後方辺約30m, 高約6.5m	4世紀前	木棺 内法長3.1m, 幅0.75m	中国一画文帯竜虎四獣鏡点, ガラス小玉53点 鉄剣2点, 鉄刀2点, 柳葉3点, 脇扶柳葉3点, 有袋鉄斧1点, 鉤1点, 藤手状素環頭両刃刀子 1点, 土師器壺・高杯・器台・鉢(五領式)	粘土槨
22	山崎1号墳	栃木県真岡市根本字山崎	・前方後円墳 全長33.4m 後方辺18.2m, 高2.2m 前方幅9.5m, 長さ4m 高0.8m, 後前高差-1.4m	4世紀中	割竹形木棺 長さ約3m, 幅約1m	緑色凝灰岩製管玉2点, 鉄剣1点, 鉤1点	粘土槨
23	茂原大日塚古墳	栃木県宇都宮市茂原町江面	・前方後方墳 全長35.8m 後方辺20.3m, 高4.2m, 頂辺8m 前方幅16.6m, 長さ15.5m, 高2.1m くびれ幅1.3m, 後前高差-2.1m	4世紀前	箱形木棺(直葬) 長さ3.6m, 幅0.7m 深0.7m	仿一素文鏡1点	
24	矢場業師塚古墳	群馬県太田市本矢場乙	・前方後円墳 全長約80m 後円径約50m 前方幅約25m, 長さ約30m くびれ幅約25m	4世紀中	割竹形木棺? (長さ不明)	中国一四獣鏡1点, 硬玉勾玉2点, 碧玉管玉 95点, メノウ勾玉1点, ガラス小玉19点, 石釧(縹 石製・有文)2点, 鉄剣1点, 柳葉式鎌16点	粘土槨
25	中原古墳	群馬県太田市大字高林字中原	・前方後円墳 全長約56m 後円径約41m, 高約6m 前方幅約12m, 長さ約14m, 高約1.2m	4世紀後	割竹形木棺か? (長さ不明)	鉄刀1点, 長頸細身式鎌130点, 短甲横刃板 1点	礎槨
26	前橋八幡山古墳	群馬県前橋市朝倉町	・前方後方墳 全長東西125m, 南北180m 後方辺72m, 高12m 前方幅59m, 高8m後前高差-4m	4世紀前	割竹形木棺(推定) (長さ不明)	大刀1点, 棒状鉄器(玉杖?)1点	粘土槨?

No.	古墳名	所在地	古墳形態・規模	年代	木棺形態・規模	副葬品	備考
27	前橋天神山古墳	群馬県前橋市広瀬町	・前方後円墳 (前方部3段・後円部3段) 全長129m 後円径75m, 高9m, 頂辺25m 前方幅68m, 長径54m, 高7m くびれ幅約45m, 後前高差-2m	4世紀中	「下位埋葬施設 (中央棟)」 割竹形木棺 (棺内赤彩) (長さ不明)	「中央棟」 中国一三角縁鳥獣文帯五神四獸鏡1点, 三角縁鳥獣文帯四神四獸鏡1点, 二禽二獸鏡1点, 半円方格帯面鏡 (階段式神鏡) 1点, 仿一菱形鏡形鏡 (鏡文鏡) 1点, 鉄剣15点, 大刀4点, 素環頭大刀1点, 鉄槍 (4点), 柳葉刀3点, 鉈2点, 釧3点, 短冊形鉄斧3点, 刀子1点, 鉈23点, 鈎針状金具4点, 針状金具5~6点, 埴 (内面赤色顔料入り, 石田川式), 紡錘形石製品4点	粘土槨
28	栗崎飯玉山古墳	群馬県高崎市栗崎町宮原	・前方後円墳 全長27.2m 後円高3.6m		木棺直葬?	勾玉, 金環	
29	長者屋敷天王山古墳	群馬県高崎市下佐野町長者屋敷	・前方後円墳 全長65.4m 後円高4.5m	4世紀中	木棺 (長さ不明)	仿一内行花文鏡2点, 不明一菱形珠文鏡1点 碧玉管玉13点, 滑石勾玉10点, 滑石白玉100点以上, ガラス小玉8点, 水晶算盤玉2点, 石錘 (軟玉製) 2点, 滑石釦1点, 滑石刀子2点, 滑石弁2点	粘土槨
30	北山茶白山古墳	群馬県富岡市南後箇	・前方後方墳 全長33.6m 後方辺17.7m, 高1.1m 前方幅16.2m, 長径10.3m くびれ幅4.1m	4世紀後	割竹形木棺 (直葬) 長径6.35~6.76m, 深0.6m, 幅1.48~1.66m	中国一方格規矩鏡1点, 仿一菱形四獸鏡1点 碧玉管玉, ガラス小玉2点, 鉄剣1点, 鉄銚1点, 刀子1点, 弁1点, 鉈状鉄器1点	粘土槨
31	入西石塚古墳	埼玉県坂戸市善徳寺字万海	・前方後円墳 全長推定36~40m 後円径推定24~28m	6世紀前	木棺直葬または木棺礎床 (長さ不明)	仿一珠文鏡1点, 乳文鏡1点, 直刀, 鉄槍2点, 鉄銚1点, 鉄鏡・長頸広身式鏡・柳葉式鏡27 ~30点, 埴甲・鉄留小札綴甲	
32	城山5号墳 (城山8号)	千葉県香取郡小見川町小見川字城山	・前方後円墳 全長51m 後円径30m, 高径5m 前方幅24m, 高径5.5m	6世紀後	木棺直葬? (長さ不明)	銅劍, 勾玉・白玉, 双孔円板, 高坏・埴・蓋坏・蓋身7点, 手づかぬ土器	
33	塚原1号墳	千葉県八日市場市吉田字塚原	・前方後円墳 全長約35m 後円径約15m, 高径3m 前方幅約8m, 高径1m		木棺直葬と推定 (長さ不明)	扁平勾玉1点, 刀子1点	
34	片野23号墳	千葉県佐原市片野	・前方後円墳 (前方部2段・後円部2段) 全長33.7m 後円径20.4m, 高径3.1m 前方幅21.7m, 高径2.6m		木棺直葬 (詳細不明)	直刀1点, 鉄鏡15点以上	
35	片野11号墳	千葉県佐原市片野	・前方後円墳 全長32m 後円径21m, 高径3.5m 前方幅20.8m, 高径2.5m		木棺直葬 長径3.4m, 深1.1m, 幅0.4m	直刀片, 鉄鏡・長頸細身式鏡17点以上	木皮槨

No.	古墳名	所在地	古墳形態・規模	年代	木棺形態・規模	副葬品	備考
36	大日山1号墳	千葉県香取郡下総町字高	・前方後円墳 全長54m 後円径33m, 高径5.5m 前方高3.8m, 後前高差-1.7m	4世紀後	舟形木棺(御竹形木棺か) 長径5.5~6m, 幅1.1m	碧玉管玉2点, ガラス小玉8点, 鉄剣1点, 短冊形鉄管1点, 刀子2点	
37	次浦石橋台14号墳	千葉県香取郡多古町次浦字石橋台	・前方後円墳 全長27m 後円径17m 前方幅12m, 長径12m 幅11m		木棺直葬(推定)	鉄刀1点	
38	新城1号墳	千葉県香取郡多古町西古内字新城	・前方後円墳 全長34m 後円径22m 前方幅17m, 長径8m 幅12m		「1号主体」 木棺直葬(長さ不明) 「2号主体」 木棺直葬(長さ不明)	「1号主体」 刀子片2点	
39	多古台No.8地点 第6号墳	千葉県香取郡多古町字広沼台	・前方後円墳 全長約55m	4世紀後	木棺 (長さ不明)	勾玉・管玉, ガラス小玉, 石釧, 白玉, 石釧 斧, 鎌, 刀子	
40	小川台5号墳	千葉県匝振郡光町小川台字熊落台	・前方後円墳 全長30m 後円径21.3m, 高2.6m 前方幅18m, 高2m	6世紀後	木棺直葬 長径3.8~4m, 幅0.8~1m	ガラス小玉51点, メノウ勾玉1点, 鉄刀5点 鉄鎌1点以上, 刀子1点, 鏡1点	
41	戸張作13号墳	千葉県千葉市東寺山町	・前方後円墳(帆立貝型) 全長27.5m 後円径15.5m, 高1.5m 前方幅9.5m, 長径4.5m, 高0.5m 幅6.5m, 後前高差-1m		箱形木棺(組合式) 長径3.3m, 幅1.1m	碧玉管玉5点, 滑石白玉1点, 土製小玉12点, 刀子1点	
42	中原Ⅲ号墳	千葉県千葉市平山町長谷部字中原	・前方後円墳 全長33m 後円径20m, 高径3.15m 前方幅19m, 長径1.9m, 高1.9m 幅10m, 後前高差-1.27m	6世紀後	木棺直葬 長径2.95m, 高0.2m, 幅0.7m	ガラス小玉120点, 金銅製耳環2点, 鏡, 環2点, 鉄刀2点	
43	中原Ⅴ号墳	千葉県千葉市平山町長谷部字中原	・前方後円墳 全長25m 後円径18m, 高2m 前方幅7m, 長径7m, 高0.5m 幅6m, 後前高差-1.5m	6世紀後	木棺直葬 長径1.85m, 幅0.5~0.6m	鉄刀1点, 鉄鎌・長頸細身式鎌17点, 広身式 鎌14点, 刀子1点	
44	親皇塚	千葉県市原市菊間字北野	・前方後方墳 全長推定60m 後方辺40m, 高7.1m		御竹形木棺2 「南棺」長径5.98m, 幅0.95m 「北棺」長径10.75m, 幅0.8m	「南棺」 仿一珠文鏡1点, 碧玉管玉5点, ガラス丸玉1 点, 鉄剣1点, 鉄刀1点, 鎌1点, 刀子片1点, 鏡2点, 斧1点, 鏝1点 「北棺」 仿一内行花文鏡, 碧玉管玉94点, 水晶勾玉1点, 琥珀勾玉1点, 石釧1点, 鎌2点, 打鉄1点, 刀子7点, 錐1点, 鉈1点, 斧1点	

No	古墳名	所在地	古墳形態・規模	年代	木棺形態・規模	副葬品	備考
45	大 概 4 号 墳	千葉県市原市大厩	・前方後円墳 (帆立貝型) 全長 29.5 m 後円径 20.9 m, 高 1.2 m 前方幅 9.4 m, 高 0.46 m くびれ幅 8 m, 後前高差 - 0.74 m	6 世紀後	「第1主体」 木棺直葬 「第2主体」 木棺直葬 (長さ不明)	「第1主体」 直刀1点, 鉄鏃・長頸細身式鏃 63点 「第2主体」 耳環 2点, 直刀1点, 鉄鏃 18点	
46	仁 戸 名 2 号 墳	千葉県仁戸名町	・前方後円墳 全長 31.5 m 後円径 19.5 m, 高 2.5 m 前方幅 14 m, 高 1.5 m くびれ幅 14 m.	6 世紀後	箱形木棺? (長さ不明)	鉄刀1点, 鉄鏃・長頸細身式鏃 19点, 刀子1点	
47	江 子 田 金 環 塚 古 墳	千葉県市原市江古田字送り神	・前方後円墳 全長 63 m 後円径 25 m, 高 4.5 m 前方幅 25 m, 長径 21 m, 高 4.5 m		木棺直葬 長径 4 m, 幅 0.7 m	硬玉勾玉1点, メノウ勾玉 6点, ガラス丸玉 238点, 水晶勾玉 1点, 琥珀勾玉 7点, 不透明玉 1点, 水晶算盤玉, 金製耳環 2点, 直刀 1点, 棘籠被柳葉式 36本以上, 刀子 1点, 鉄鏃 1点, 「字形鉄地金銅張板付轆 1組, 鐘形鉄地金銅張杏葉 5点, 鉄地金銅張雲珠 1点, 辻金具 2点, 鉄地金銅張辻金具 (革紐装着用) 6点, こぼせ形金具・絞具 2点, 麻布, 絹布	
48	弁 天 古 墳	千葉県柏市布施舟財天	・前方後円墳 全長 32 m 後円径 14 m, 高 3 m, 頂辺 7 m 前方幅 7 m, 長径 18 m, 高 1.5 m くびれ幅 7 m, 後前高差 - 1.5 m	5 世紀中	木棺直葬 長径 4.4 m以上, 幅 0.54 ~ 0.64 m	白玉 269点以上, 滑石刀子 2点, 滑石斧 3点 石枕 1点, 立花形 9点	
49	水 神 山 古 墳	千葉県我孫子市高野山	・前方後円墳 (前方部 3段・後円部 2段) 全長 81.5 m 後円径 36 m, 高 5 m頂辺 2 x 1.5 m 前方幅 33 m, 長径 36 m, 高 3 m くびれ幅 12 m, 後前高差 - 2 m	4 世紀後	御竹形木棺 長径 5.13 m, 西端幅 0.7 m, 中央幅 0.65 m	ガラス小玉 (青) 280点, 刀子 2点, 滑石管玉 1点, ガラス管玉 1点, 針	粘土部
50	根 田 130 号 墳 (旧根田 1 号)	千葉県市原市根田代	・前方後円墳 (帆立貝型) 全長 42 m 後円径 27.5 m, 高 2.3 m 前方幅 10 m, 高 8 m くびれ幅 8.5 m		「第1主体」 木棺直葬 (長さ不明) 「第2主体」 木棺直葬 (長さ不明)	「第1主体」 銀胎金塗金環 2点, 直刀 2点, 鉄鏃 7点, 刀子 1点, 轆 1点, 鏃子 1点, 子札 1点, 幡巻石 1点 「第2主体」 鉄鏃 7点, 刀子 3点	
51	神 門 3 号 墳	千葉県市原市惣社字塚越	・前方後円墳 全長 56.5 m 後円径 34 m, 高 5.1 m, 前方幅 12 m以上, 高 15 m以上 くびれ幅 8 m		木棺直葬 (組合式箱形木棺) 長径 3.82 m, 幅 0.94 ~ 1.00 m	ガラス玉 103点, 管玉 11点, 鉄剣 1点, 鉄鏃 2点, 鉄槍 1, 鏡 1点	
52	神 門 4 号 墳 (神門 141 号)	千葉県市原市惣社字塚越	・前方後円墳 全長 49 m 後円径 34 m, 高 6.9 m 前方幅 14 m, 高 16 m, くびれ幅 9 m		木棺直葬 (長さ不明)	ガラス玉 420点, 硬玉勾玉 3点, 碧玉管玉 73点, 鉄剣 1点, 鉄槍 1点, 定角式鉄鏃細身式鉄鏃 41点, 施 1点	

No.	古墳名	所在地	古墳形状・規模	年代	木棺形態・規模	副葬品	備考
53	諏訪台古墳 七28-025号墳	千葉県市原市村上	・前方後円墳 全長28m 後円径15.5m, 高0.5m 前方幅14m, 高0m		木棺直葬 (長さ不明)	大刀1点, 鉄鏃	
54	諏訪台 4081号墳	千葉県市原市西広字松ヶ谷	・前方後円墳 全長32.5m 後円径26m		「a」主体 木棺直葬 (長さ不明) 「b」主体 木棺直葬 (長さ不明)	「a」主体 鉄刀2点 「b」主体 ガラス子玉, 琥珀玉	
55	諏訪台16号墳 (諏訪台4033)	千葉県市原市惣社字天神台	・前方後円墳 全長24m 後円径20m		木棺直葬 (長さ不明)	メノウ勾玉13点, ガラス子玉, 金銅製耳環1対(2個)	
56	姉崎古墳 二墳	千葉県市原市姉崎字二ツ子(二子塚)	・前方後円墳 全長103m 後円径50m, 高9.5m 前方幅52m, 長径48m, 高8.5m 〈OxL幅34m, 後前高さ-1m		「後円部主体」 木棺直葬 (長さ不明) 「前方部主体」 木棺直葬 (長さ不明)	「後円部主体」 中国-扁額文鏡1点, 仿一菱形文鏡1点, 四神十二支鏡1点, 瓊勾玉7点, 滑石大形勾玉1点, 滑石管玉4点, 琥珀勾玉1点, 霰玉5点, ガラス子玉300余, 金具金具魚鱗文魚鱗文金銅製(魚鱗か)刀子5点, 有孔円板, 白玉3点, 鉄刀破片2点, 鉄鏃1点, 短中破片, 鉄地金銅製子丸銚留衝角付冑(地板2段構成), 挂甲子札片, 立花形4点, (伝)石枕 「前方部主体」 メノウ勾玉1点, 銀製垂耳環(腰佩), 鉄刀2点, 鉄鏃2点, 広身式, 細身式鉄鏃, 長柳葉式, 横別板革綴1点, 挂甲子札片, 横別板革綴1点, 頸甲片, 冑甲片, 冑(衝・引手), 立花形2点, 石枕1点(高縁3段・直弧文陰刻)	
57	原1号墳	千葉県市原市姉崎字原	・前方後円墳 全長70m 後円径36m, 高5.7m 前方幅50~60m, 高6m, 後前高さ-0.3m		木棺直葬 (長さ不明)	直刀1点, 刀子片数点	粘土床
58	椿8号墳	千葉県袖ヶ浦市滝ノ口字内勝台	・前方後円墳 墳長38m 後円径21m, 高3.5m 前方幅約18m, 長径18m, 高1.7m 後前高さ+1m		木棺直葬2 (長さ不明)	メノウ勾玉, ガラス子玉, 刀子	
59	下郡古墳	千葉県袖ヶ浦市吉野田字寺原	・前方後円墳 全長60m		木棺直葬(推定) (長さ不明)	鉄刀3点, 鉄鏃・長頸細身式鏃(同圓長三角・同圓三角・片刃簡), 刀子3点(鹿角装1), 素環鏡板付簪1点	
60	高千穂9号墳	千葉県木更津市菅生字高千穂	・前方後円墳 全長3.1m 後円径15~17.5m, 高2.2~3.15m, 頂径9m 前方幅13m, 長径13m, 高1.1~1.6m 〈OxL幅11.5m, 後前高さ-1.7m		「第1」主体 木棺直葬 (長さ不明) 「第2」主体 木棺直葬 (長さ不明)	「第1」主体 鉄刀1点, 鉄鏃約110点, 刀子1点, 朱 「第2」主体 鉄刀2点(大1・小1), 鉄鏃約40点, 刀子3点	

No	古墳名	所在地	古墳形態・規模	年代	木棺形態・規模	副葬	備考
61	鳥越古墳	千葉県木更津市太田字鳥越	・前方後方墳 全長 25 m 後方辺 18 m, 高 3.5~4 m, 頂径 8 m 前方幅 9.5 m, 長径 6.5 m, 高 1.5~2.5 m くぐり幅 8.5 m, 後前高差 - 1.5 m		「第1主体」 箱形木棺 (長さ不明) 「第2主体」 箱形木棺 (長さ不明)	「第1主体」 碧玉管玉 9 点, ガラス子玉 78 点, 片口鉢, 高 杯, 土師器壺, 朱, 石臼 1 点, 石杵 1 点 「第2主体」 方一方向規短鏡 1 点, ガラス 282 点, 水晶罌玉 21 点	
62	鹿島塚 8 号墳	千葉県木更津市請西字鹿島塚	・前方後円墳 全長 38.6 m 後円径 22 m, 高 4.5 m, 前方幅 17.5 m, 長径 16.6 m, 高 3.5 m くぐり幅 23 m		木棺直葬 (長さ不明)	鉄刀 3 点, 細身式鍬 (両面長三角・両面三角・ 片刃簡), 刀子 3 (鹿角装 1), 素環鏡板付簪 1 点 埴瓶, 土師器壺	
63	塚原 7 号墳	千葉県木更津市請西字塚原	・前方後円墳 全長 48.5 m 後円径 22.5 m, 高 4.0 m, 頂径 8 m 前方幅約 17 m, 長径 18 m, 高約 4 m くぐり幅約 10 m, 後前高差±約 0 m		「第1主体」 箱形木棺 長径 2.87 m, 幅 0.87 m 「第2主体」 長径 3.27 m, 幅 0.97 m	「第1主体」 ガラス子玉 32 点, 錫製耳環 2 点, 鉄刀 1 点, 刀 子 1 点 「第2主体」 鉄刀 1 点, 鉄鍬 29 点, 銀製肥元器具 1 点, 刀 子 1 点	
64	宝来山古墳 (西岡 37 号)	東京都大田区田園調布	・前方後円墳 (前方 2 段) 全長約 100 m 後円径約 52 m, 高推定 10 m 前方幅 32 m, 長径約 30 m, (推定 50 m), 高 7 m		制竹形木棺 (推定) (長さ不明)	方一四獣鏡, 硬玉勾玉 4 点, (片面穿孔), 碧 玉管玉 67 点, ガラス丸玉 173 点, ガラス小玉 390 点, 紡錘車形石製品 1 点, 鉄剣 6 点, 鉄 刀 10 点, 鉄槍 1 点	粘土椀
65	狛江亀塚古墳	東京都葛江市元和泉	・前方後円墳 (帆立貝型) 全長 51 m 後円径 31 m, 高 6.0 m (推定復元 7 m), 頂径 8 m 前方幅 14 m (推定復元 15.7 m), 長径 9 m (推 定復元 10 m), 高 1.5 m くぐり幅 8.2 m, 後前高差 - 4.5 m		「第1主体」 木棺 「第2主体 (中央棺)」 木棺	「第1主体」 銀環 2 点, 直刀 1 点, 刀子 1 点 「第2主体 (中央棺)」 中国一尚方作神人歌舞面像鏡, 碧玉管玉 8 点 ガラス丸玉 336 点, ガラス小丸玉 320 点, ガラ ス小玉 450 点, 鈴釧 (鈿付銅釧), 直刀 1 点, 鉄鍬 5 種 27 点	「第1主体」 木炭椀 「第2主体」 木炭椀
66	東野台 2 号墳	神奈川県横浜市戸塚区上矢部町	・前方後方墳 全長 54 m 後方辺 27 m, 高 3.5 m 前方長 15 m くぐり幅 12 m		制竹形木棺直葬 長径 6.7 m, 幅 0.85 m	滑石勾玉 1 点, 滑石罌玉 1 点, ガラス丸玉 36 点, 鉄剣 2 点, 刀子 31 点, 埴 (五領式)	
67	塚越古墳	神奈川県平塚市北金日字塚越	・前方後円墳 全長 45 m 後円径 21 m, 高 2.35 m, 頂径 15 m 前方幅 6.5 m, 長径 24 m, 高 1.5 m, 後前高差 - 1.3 m		舟形木棺 (長さ不明)	碧玉管玉 4 点, (片面穿孔), 滑石管玉 2 点, (片 面穿孔), 鉄製工具 (全長 12.3 cm)	

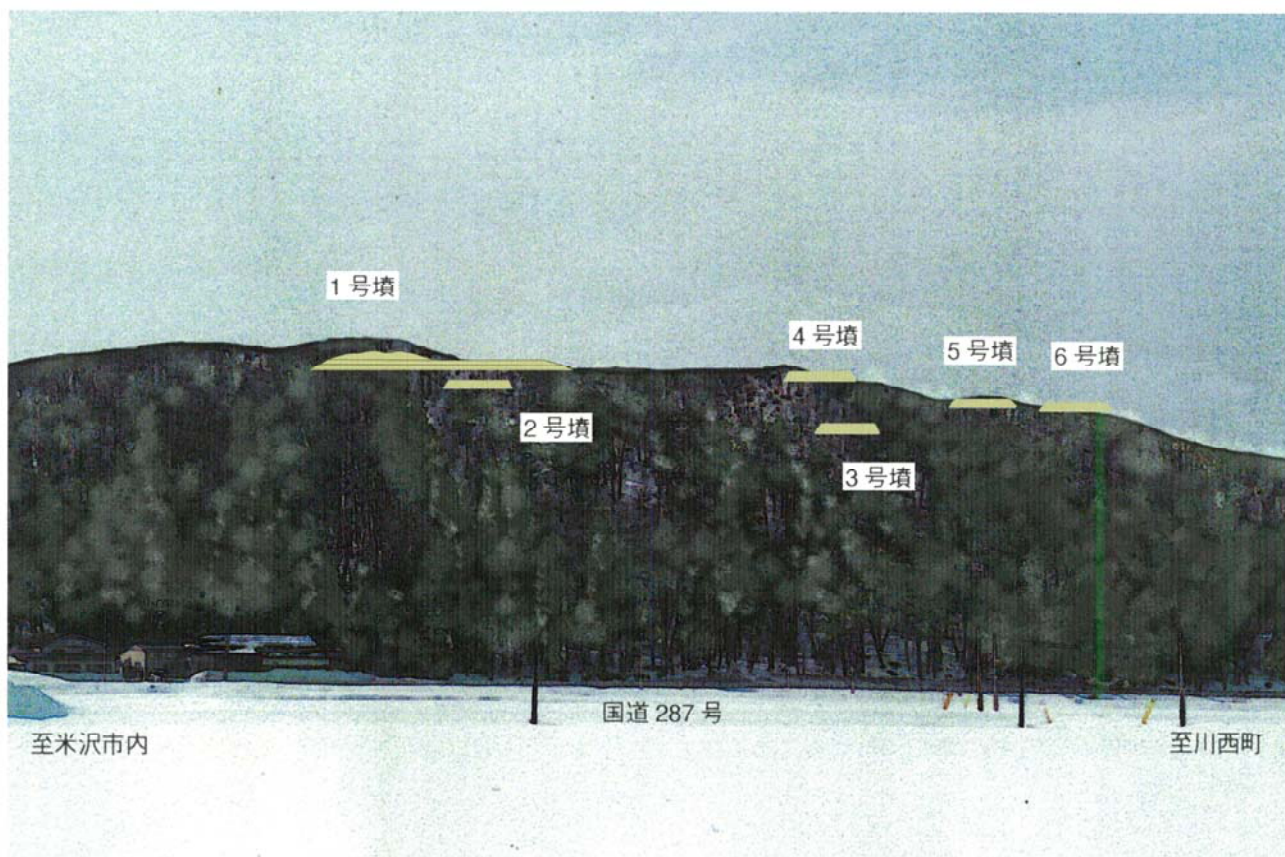
報告書抄録

ふりがな	いせきしょうさいぶんぶちょうさほうこくしょ							
書名	遺跡詳細分布調査報告書							
副書名	成島古墳群 1号墳							
巻次	別冊							
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第82集							
編著者名	菊地政信							
編集機関	米沢市教育委員会							
所在地	〒990-0012 山形県米沢市金池三丁目1番55号 TEL0238-22-5111							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なるしまこふんぐん 成島古墳群 ごうふん 1号墳	やまがたけんよねざわし 山形県米沢市 ひろはたまちなるしまあざ 広幡町成島字 ろくがつざいけやまちない 六月在家山地内	6202	米沢市 遺跡番号 I-602	37度 45分 20秒	140度 03分 25秒	20000911 ～ 20001124	80m ²	確認調査
						20021202 ～ 20021224	6m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
成島古墳群 1号墳	前方後円墳	4世紀後半～ 4世紀末期	墓壙主体部	鹿角装鉄剣・鉄鏃・ 鉈・管玉・靱	後円部墳頂中央 部に墓壙及び主 体部を確認した。			

写 真 图 版



▲成島古墳群遠景（東方から望む）



▲成島古墳群位置図

図版 2



▲成島古墳群 1号墳の重機削平箇所（東方から望む）



▲成島古墳群 2号墳（南方から望む）



▲墳丘南北断面（前方部から望む）



▲墳丘後円部東端部断面（西方から望む）

図版 4



▲墳丘東西断面（北方から望む）



▲主体部プラン確認状況（東方から望む）



▲ F地点断面全景（西方から望む）



▲ 主体部西方箇所に確認した木棺の痕跡（西北から望む）

図版 6



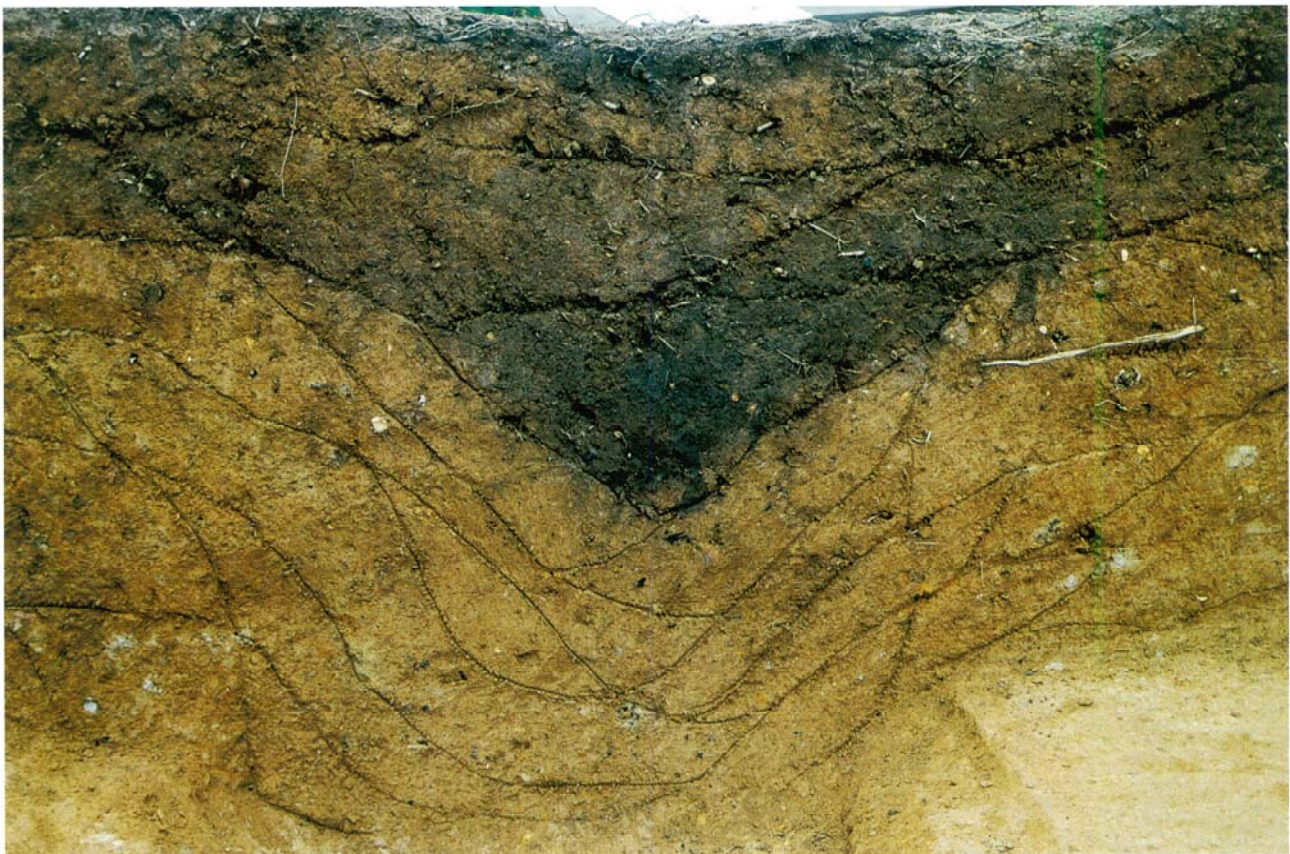
▲ E トレンチ上層部断面（西方から望む）



▲ E トレンチ主体部断面（西方から望む）



▲ E トレンチ上層部断面全景（西方から望む）



▲ E トレンチ主体部断面近景（西方から望む）